それを導くには同情心を養成して、こんな事をしては可愛想だと反省するやうにさせるのが良策である。

同情心を養ふのは積極的の禁止法で、これができれば大成功であるが、一方消極的にはつとめて慘忍な刺戟を與へぬやうに注意する事が必要である。親達や教師が何か慘忍な事をして見せると、兒童は忽ち模倣して平氣で酷い行をするやうになる。幼時から慘忍な刺戟をうけ馴れてゐると遂にはこれに鈍感になり、成長の後も慘忍な事を平氣でするといふ事は、西洋でも我國でも殺人犯人が屠獸者に最も多いといふのを以ても知れる。

人の身體は神聖にして犯すべからざるものである。一旦身體を打擲せられたものは、忽ち自重心を失ひ、一方他人に對する尊重の念をも忘れて、他人の身體に害を加へる事が平氣になるものである。兒童の殘忍性を放任すればかゝる結果をひき起す事は珍らしくない。露西亞人や支那人特に北支の人間は、國民性として慘虐性があり、虐殺を何とも思はないといふのは、畢竟幼時から虐殺等を見馴れ聞馴れて、人の身體の尊重すべきを感じない結果であるといふ。我國の兒童は動植物に對する慘虐性が強く、親達も亦意に介しないやうであるが、これがひいて

は弟妹使用人、外には社會の人々に對する慘忍性の萠芽になるのであるから、よく〳〵その由をいひ聞かせねばならぬ。慘忍性の刺戟を避ける事に就いては實地模範を示す事を禁ずるのは勿論であるが、兒童の讀物とか演劇とか、特に活動寫眞の繪看板等に毒々しい繪具を以て流血の慘虐事を畫いてゐるものが多いのを注意せねばならぬ。これは單に殘虐性の抑止のみならず、他の諸道德の教育と共に一考を要する事である。

これを一言にしていへば防ぐは矯むるに優れりで、兒童の習慣教育一般に應用せらるべき格言であるが、一つ惡い習慣がついたのを直すといふ事は中々むづかしく、初めから惡い習慣のつかぬやうにしてやるに如くはない。卽ち殘忍性の場合にはその中に含まれてゐるよい本能的方面、例へば活動性とか權力觀念とか好奇心とかは、これを他の方面に導いてできるだけその本能を全うさせねばならぬ。それには犬猫乃至は馬等の家畜を飼養せしめ、これを觀察して好奇性を滿さしめると共に、これを兒童の權力の下に支配させ、部下として活動せしめ愛させるといふのが宜しからう。

又一般に慘酷の惡い事、仁愛の尊い事を說くにも、父兄や教師の說論が効のない場合には兒

童の社會精神を應用して、博愛や動物愛護の集會を開き、それに出席せしめる事は案外に効果が多いのである。その他兒童の趣味に投ずる讀物演劇等に仕組むのも一工夫であらう。

七　兒童の好奇心と質問

好奇心の最初の現はれは音や色や光に對する一種の單純な驚きである。これは遲くとも生後二週間を經れば現はれる。次はその注意が長くつゞくやうになり、ぢつと耳をすまし眼をみはつて注視するやうになるので、これ亦遲くとも一ケ月乃至三ケ月のうちに現はれる。併しこれはまだ眞の好奇心とはいへぬもので、眞の意味の好奇心は一年の終り頃になつて初めて發生する。その發端は、人の顏を弄りまわし、節穴等に指を入れたりする事で、次第に觀察の態度が正確になるにつれ、今度は自ら手を出して實驗して見ようとする。その結果、何でも手に持ちたがる所謂把持本能を現出する。又隱れてゐるものをすつかり見ようとして箱や包や引出をあけ、中の物を出してしまふ等もよくあることである。

滿一歲以後になると自然に對する好奇心が現はれて、植物や動物の生活に非常に興味を持ち、昨日蒔いた種を堀り返して見たり、花の蕾をむしりとつて開いて見たりする。これは實驗的好奇心の一例で、いふまでもなく研究心の初まりとして貴いものであるが、時として或人の利害に抵觸し、惡いたづらと見える爲め、ともすれば禁止されがちな事である。叱られる爲に手を出す事を羞し控へ〳〵する內には、いつか大切な本能的好奇心を消滅させるばかりか、意氣地のないいぢけた子供を造るやうになるので、特に敎育上弊害のある事の外は大人の利害は大抵の場合犧牲にして大目に見てやるもよからうし、よくその理由をいひきかせて禁止するもよからう。

この實驗的好奇心と最も著しく關連して見えるのは八歲から十歲位に現はれる煙草を吸つて見ようとしたり、何によらず味はつて見ようとする傾向である。その爲め摘み食ひをしたり遂には喫煙の習慣をつけるので、未成年の喫煙者はこの種のが多い。

十歲から十二歲にかけては單に自分が實驗して見るのみならず、動物や植物にある刺戟を與へてどう變化するかを見ようといふ傾向が起り、犬に鹽を嘗めさせたり、猫に紙袋を冠せたり

する。これは時として一見殘忍にも見える時があるが、多くは好奇心の現はれでよく研究して見れば單なる興味に過ぎない。眞の慘忍と好奇心との差は、兒童がその事に耽つてゐる際の顏面の表情その他を以ても知り得る筈である。

兒童の好奇心はひいて質問となる。スミス及びホール二氏の分類によれば、兒童の質問には大略左のやうな種類がある。

1、自然力に關するもの。例へば太陽、月、星、雨、風雲、雷、火水、動植物に關するもので、お日樣はなぜ赤いか、蟲はなぜ啼くのかの類。

2、器械力に關するもの。汽車はなぜ走るか、時計はなぜ鳴るかの類。

3、生命の紀元に關するもの。赤ちやんはどこから來たの、僕はどこから生れたのといふ類。

4、神學及び聖書に關するもの。神樣は何處にゐるのといふ類、但し日本には少い。

5、死及天國に關するもの。祖父樣は死んでどこへ行つたの、極樂つてどこにあるのといふ類。

以上の中でも1、2に屬する質問がもつとも多く、七五パーセントまではそれだといはれてゐる。併し3、4、5の如き質問でも、成人にも猶謎の中に解されてゐる程の人生の難問題である

から、その境遇を體驗する兒童には當然出づべき質問であらう。

自然に對する好奇心、實驗的の好奇心、質問となつて現はれる好奇心、すべてが兒童の知的のめざめを意味するもので、あらゆる進歩はこれから初まる。ニユウトンもダーウヰンもその他世界の學者といふ學者の大發見の元は小さい好奇心で物を注意したのにある。好奇心がなければ世界は進歩しないと斷言してよい。然るに從來の教育の態度はあまりに好奇心の存在を無視しすぎてゐる。例へば器械力の不思議を自ら解かうとして、時計、樂器、人形の如きものを分解し壞して終ふ。そして更に一段の發達を遂げたものになると破壞したものを又組立てようとする。これが成功すると否とに拘らず、これらの作業は一概に惡戲と見做されて一喝の下に禁止されてしまふ。兒童にとつて何程か殘念な事であらう。將來の教育者は兒童のなす所をじつと見てゐてその内に潜むものを見出し、これを善導するやうに有りたいものである。

八　恐怖と憤怒

恐怖はもと自己の保存を危くするものに對して現はれ、行爲に移しては逃走となる。即ち自己の安全を計る上に缺くべからざる一種の本能であつた。それ故人の情緒のうちで最も早く起るのは恐怖と憤怒であつて、プライエルは生後二十三日目、ベンは二ケ月目、ダーウキンは四ケ月目に起るといつてゐる。

左に恐怖の種類を表示すれば

恐怖
- 普通型
- 異常型
- 本能的
- 經驗的
- 事實的
- 想像的

この中異常型は恐怖の病的になつたもので、變質兒童に現はれるものであるから一般の場合には云へないが、普通型のうちの本能的といふのは生れながらにして持つてゐる恐怖で、動物や見馴れぬ人や自然現象を恐れる事がある。これを一に遺傳的恐怖といふ。つまり原人時代の恐怖感が兒童に再現してゐるのであるといふ說で、最も早く現はれるのはこの恐怖である。

續いて經驗的恐怖が現はれる。殊に事實的恐怖が早いので、例へば且て犬に嚙まれたものが

犬を恐れるといふ類である。

次第に智識が豐富になつてくると、自己の直接の經驗でなく、他人から聞き又は讀物等によつて苦痛禍福等を想像する恐怖で、例へば火事、地震等を恐れる類である。おばけ幽靈等を恐れるのも多くこの部に屬する。

恐怖に襲はれた時には戰慄や惡寒を伴ふのが普通であるが、甚しい時には腦の中樞が筋肉支配力を失して麻痺痙攣を起し、歩行ができなくなるのはよく見る事である。同時に觀察力や注意力が減ずる一方、想像力や刺戟性が盛んに起り思考意識の作用は全く亂されるものである。度々かゝる狀態に陷ると腦の作用を害するものである。併し又大切な護身的本能である以上、これが教養には十分注意して怖るべきは怖れ、怖るべからざるものは決して恐れぬやうに訓練せねばならぬ。恐怖の本能ほど一時性を現はすものは少ない。幼時に怖ろしい事を經驗した兒童と然らざるものとはその恐怖反應に著しい差を現はすもので、例へば一度地震に出合つた人は微震にも戸外へ飛出すといふ事は事實である。さすれば益なき恐怖を除くについての教育の要は、徒に恐怖の對象を與へない事である。家人の話題や讀物、活動寫眞、演劇等に

於て幽靈談、怪談の如きは、所謂怖いもの見たさで兒童には歡迎されるが、徒らに本能的恐怖を刺戟するのみで何らの教養上の價値も有しないのみか、その印象が殘つて將來に至るまで永續的の恐怖を植えつけるものである。

恐怖の對象として最も多いのは動物（特に獅子、狼、虎、蛇等）で、次いでは天災（火事、地震、雷、）人物（盜人）怪物（お化け、幽靈）等で、そのうち動物の恐怖と、怪物の恐怖は年齡の進むと共に減少し、人物、天災の恐怖は年齡と共に增加する。これは兒童の知識が進んで恐るべきを恐れ、恐るべからざるを恐れないといふ觀念ができてきたからである。

幼少の時に劇しい恐怖を受けると、それが第一印象となつて、成長の後既にその恐るべからざるを知りながら詰らぬ事物を恐れる一種の病的恐怖に陷る事があるので幼時の取扱は特に注意せねばならぬ。

從來學校家庭が教育に對してとり來つた態度のやうに『落第させるぞ。』『先生にいひつけるぞ。』と脅し、これを恐れしめて勉學に導かうとする事は、兒童の恐怖心を强めるのみならず眞の學習の動機を止め、眞の努力の興味と價値を無視せしめるに至るものである。自己の足ら

ざるを恐れ、罪を犯さん事を恐れる類の恐怖は、相當の教養を經なくては現はれて來ないが、之こそ眞に醇化された恐怖といつてよからう。

憤怒は爭鬪本能の現はれである。これも勿論自己保存の目的に沿ふものであるが、唯異るところは、他の本能的傾向が阻げられた場合のみに起る第二次的傾向である。即ち自己の追究を障害し、或は幸福を阻害された時に個性の維持を主張する本能であるといへばよからう。

すでに動機が對他的である以上對手に對して何らかの意味が無ければならぬのであるが、極く幼時の怒りにはたゞ本能的生理的である場合が多く、生後四十日位で既に怒りの表出を見たといふのはこれである。この怒りは人類よりも鳥獸に多く現はれるもので、例へば犬が食等の餌を見つけた時怒りの相好を現はして之を威嚇するやうな事がある。

例し五六才の幼年時代に至つては既に情的の怒りを發する。普通の場合怒りには自己が害せられたといふ感じと、害を加へた對手の觀念と、これに對する復讐の念とのこの三つが集つてゐるものである。大人に於ける場合は一時忍耐して、他日の復讐を期するといふ所謂智力的の怒りと變化する事もあるが、兒童は直情徑行で直ちに怒りの表情を表はす。それは多く興奮と

號泣とを伴ひ、亂暴をするまでに至るものであるが、この場合みだりに抵抗する事は却つて反動的に亂暴の度を強くする恐れがある。

怒りの教育については種々の異見があるのであるが、兒童の怒つた場合には、當然の結果として來る苦痛と後悔とを是非ともなめさせなくてはならぬ場合もあり、又全然放任して置かねばならぬ場合もある。之らは怒りの原因が多樣であるのにつれに一樣にいふ事はできぬが、怒りを制止すべき場合には、徒に之を阻げず單に物を破壞するなどのことを止める位にして置き、後に靜かに落ついた頃を見計らつて、熱心に諭せば大抵は悔悟するものである。嬰兒心理學に現はれた半意識の教育の適用はかゝる場合である。

爭鬪本能が社會の進歩に益したのは既に過去數世紀前の事であつて、現今の文明人は努めてこの本能を洗練し美化しようとしてゐる。殊に爭鬪本能の結果が他を害し傷つける事にある以上はあまり喜ぶべき事ではない。唯自分の正義のために、不正に對する怒り、所謂義憤なるものは、本能的以上に高尚な精神の働きといはねばならない。

九 兒童の社交性と朋友

兒童は家庭内にどんなにいゝ遊戯機關が備へてあつても、又兄弟姉妹が幾人あつても、必ず外に朋友を造りそれと一緒に遊ぶ事を好む。これは年と共に進む傾向であつて、幼兒時代の社交は友達といつても眞の交際ではないが、小學校時代の交際は既に社交性を帶び團體的の動作をなすに適するやうになる。

これはやはり一種の社會的本能のあらはれで、例の原人の時代には食物を得んが爲にも自己の身體を保護する爲にも群居してゐる必要があつた。これが社會本能の中でも群居本能となつて現はれたものであるといふ。

孤獨を厭ふ性質から、兄弟を持つてゐる兒童は幾分か家庭内でその本能を滿足させる事ができるが、所謂一人つ子は之を求める事ができない爲め、一種の變態を呈する事さへある。即ち朋友の仲間入りをしようとして早く服屬の本能をあらはし、他の兒童に阿諛して仲間に入らう

とする。もし他に朋友を求められない時には犬猫に遊び友達を求めるといつた有樣である。

これ程までに強い要求によつて朋友の徒黨の一員となつた後の兒童は、甚しくその影響をうける。すべて人が大勢集ると、そこに群集心理といふものができて、善事惡事に抱はらず實行力が非常に強くなるものである。そしてその一人〳〵は社會精神卽ちその徒黨全體に共通した精神に感化される事が非常に早い。例へばある仲間のものがみな獨樂を持つて遊んでゐるとする。そこへ一人獨樂を持つてゐない子がくると、その子は忽ち仲間外れにされる。その爲め持つてゐない子はどうにかしてそれを得ようと焦る如きもので、その場合その仲間の中に頭たるべき優秀な子供が居ると、その子供の命令には如何なる困難を忍んでも服從するものである。これは一に服屬本能の現はれともいへるが、又一には一團の首長はその徒黨全體の精神を代表するので、その感化力が特に強いのだといふ事もできよう。

故にその徒黨に起るべき群集精神の善不善は兒童の言行に烈しい感化を及ぼすもので、餓鬼大將の徒黨に屬する時は忽ち惡戲つ子となつて終ふであらう。併しこの本能も使ひ方の如何によつては同情親切等の社會的本能を刺戟して、これを助長させる事ができる。又爭鬪、所有等

の本能についても、團體生活の指導宜しきを得れば、徒なる爭鬪心を柔げ、個人の占有よりも多くの人の共有の方が一層滿足な結果を我々の許に齎すのを知るやうになる。所有本能爭鬪本能に伴つて來る惡傾向の矯正は、この社會的本能の善用によるのが一番賢い、一番手早い方法である。

然るに從來の學校教育は比較的この本能に冷淡である結果、兒童の朋友は、學校での友達、家庭での友達、勉强する友達、遊ぶ友達と區とに分れてゐる。學級は一の社會であつて、その中に於て兒童の社會的本能の滿足は完全に行はれなければならない。ところが學級の組織が知的形式的となつてゐる爲めに、兒童は學級內の友達のみに滿足を得る事ができないといふやうな結果を來すのである。

社會的本能としては廣く友達を求めるのが普通であるが、時々兒童は一二人の親友を以てこの滿足を得る事がある。これは友誼とか愛情とかの點に就いては一面によい所もあるが、いかに完全でも一人によつては性格の全部が練られる筈はない、善惡ともに親友の感化は强く且つ偏するものであるから特に注意を要する。善い友達と善い刺戟とよい徒黨、これが兒童の社會

生活に最も必要である事を忘れてはならない。

十　習慣と教育

人生の最大要素は本能と習慣である。習慣は第二の天性といふやうに、本能に劣らず重大な勢力を身心の上に持つてゐるが、分けていへば本能は先天的遺傳的の反應で、習慣は後天的反應である。從つて本能は學ばずして現はれるが、習慣は經驗の反覆によつて成立する。

習慣の內容は分析すれば數多い事だが、第一に行爲の正確と迅速とを促し、目的にあつて行はれるやうになる事である。なほ習慣の力は勢力の抹消を防ぎ疲勞を少なからしめる。以上を例を擧げていへば、知らぬ道を行く時は非常に遠く感じて疲れを覺えるが、馴れた道は同一距離でも早く到着し得るのみか疲勞を感ずること少い。これは一方に意識の方面からも說明し得る。習慣は活動を支配する能動的注意を進化せしめて第二次的無意注意とする爲め、何らの注意を拂はずに行爲をなし、しかも誤りなきを信じ得るのである。

かくの如き習慣性は個體の許す範圍に於ては如何なる活動にも形成せられ得るもので、善も

不善も虛僞も忠情も忠實も勤勉も一樣に習慣化されて我々の生活を支配する。吾々の理性の働く所はほんの少しで、後の大部の生活は習慣によつて成されるのである。

特に兒童期に於て習慣を刻みつける事がもつとも容易である。指先や體の運動乃至は記憶の如きもの〻習慣性は兒童期に限るので、藝事の本氣な修業は十歲からでは晩いと言はれる。既に幼少時代の可塑性の大なる時にはその環境の爲に精神的影響をうけ、快活にも陰鬱にも氣早にも愼重にもなり、この時の感情的習慣は一生涯拔けぬ事が多い。『三つ子の魂百まで。』といふのは這間の消息を言ひ表し得てゐる。筋肉の習慣は九歲位までの小學生時代がよい、就眠食事等の衞生的習慣、淸潔や姿勢や步行等の習慣はこの時代を等閑にしてはつきにくいものが多い。併し要はその行爲の難易にあつて、餘りに幼いものに難しい作業を强ひるのは困難である。

習慣を造らしむるに就ては勿論屢〻同一作業を反覆する必要がある。その過程に於て、所謂仲だるみと稱して一時進步の緩漫な時代があるが、この時季を過ぎて初めて習慣の器械化が行はれるのでそれまでは怠らず練習する事が必要である。更にこの反覆は注意の緊張した時に行はれるのが最も有効であるので、その爲にはその活動に興味を持つ事が必要である。學書を遊

戲化して之を面白く學ばせれば効果の多いのも同一理由である

最後に習慣の形成には除外例を許されない。もし許す時は習慣の幾日かの反覆は全部無効になつてしまふのである。例へば冷水浴の習慣をつけようとしてゐる人が冬季一日之を休むならば、翌日は一層寒氣を覺えて繼續の元氣を失つてしまふであらう。これは感情の弛緩と興味の消失とによるもので、苟しくも兒童の習慣性を監督するもの〻心懸くべき事である。これらを一括して習慣形成の法則を示せば、一、端緒を得よ。二、練習せよ。三、除外例を許すな。の三則に歸する。

端緒を得るといふ事はかなり困難であるが、兒童の發意によらしめてその興味を持續させる事が最も有効で、その爲には兒童の本能的行爲に着眼してひき出す必要がある。又その形式的手段としては、新年、學年始、何事かの記念日、誕生日等を發端として着手させる事は一法であらうと思ふ。

十一　兒童の名譽心と英雄崇拜

兒童の社會的本能の發現と共に名譽心が目覺めてくる。その始めは五六才の幼年時代に起るが、この頃の名譽心といふものは甚だ漠然たるもので、先生に譽められるのは叱られるよりも良いといつた程度のものである。

ところが小學校に入る頃になると、社會性の發達につれて名譽といふ事の解釋もつき、自己がそれを得たいといふ念も高まつてくる。

すべて名譽は社會があつて初めて存在し得るので最小限度でも二人以上の人が居なければならぬ。兒童の社交性が現はれて遊戲をするにも朋友を求める事が盛んになり、又その友達仲間で褒められたり批難されたりする事が著るしく心を刺戟する結果こゝに名譽心の發動を見るので、本能的に持つてゐる優越性卽ち他人に優越せんとし、優秀なものに服屬しようとする傾向の現はれである。この中で他人に優越せんとする心の働きは名譽心や功名心となり、優秀なものに服屬しようとする働きは後に記す英雄崇拜となつて現はれるのである。

名譽心は人の心の有力な刺戟となるものであるから、教育上これを利用する事は効果が多いのであるが、こゝに注意を要するは一歩を誤れば虛榮心に陥する恐れがあるのである。虛榮と

は自己が何う賞讃せられる丈けの價値を持つてゐないくせに、持つてゐるやうに見せかけて人に好く思はれたいと思ふ心である。例へば美しい衣服を持つてゐると思はれたさに借り着をしても飾るとか、醜い姿のものが美しく見せかけようとして粉飾するとかいふのはその類で、甚だいやしむべき心狀である。

名譽心の盛な時代には、その區別がつかぬためにともすれば賞められたさに外見を飾る傾きがある。その間の眞の區別を知らしむるは親なり教師なりの賞罰の態度如何にある。賞罰の原則としては賞は重く罰は輕く、寛嚴その宜しきを得るといふ事であるが、時と場合に從ひ、又賞罰の性質によつて一樣でなく、なか〳〵適度にするのはむづかしいものである。古來道學の歌に

かはゆくば五つ教へて三つ褒め
二つ叱りてよきものにせよ

といふのがある。賞は喜びを與へて發奮力を起させ、罰は苦痛を與へて抑制心を起させる。もし過ぐれば或は慢じ、或は怠る。中庸を得る事は實に至難である。

賞罰特に賞讃を與へる場合は決して子供にごまかされてはならない。明敏な洞察力を働て、兒童の力なり骨折りなりを認めてこれに適當な賞讃を與へねばならぬ。よしその事の結果は惡くとも、自ら骨折つて成しとげた事ならばその骨折りに對して賞讃すべく、上出來であつても一時的の虛飾によつてなされたものは認めないといふ風に斷乎たる態度を持せねばならぬ。それには平素からつとめて兒童の力を觀察する必要があらう。

と同じに、虛榮心の現はれを芽のうちに摘とり、その卑しむべきを知らしめねばならぬ。兒童特に女子には七つ八つの頃から既に衣服等をねだる傾向が現はれるが、これは虛榮心の起つた徵候である。次いで少年期から青年期に移れば女子はます〳〵粉飾を加へるに反し、男子は俗に體カラと稱へてわざと汚い風采をするのを名譽とする時代が來る。これを過ぎると初めて相當の思考を混じた虛榮、即ち風采を飾るとか、善行を衒ふとかいふ傾向が出るので虛榮心もこゝまで來れば本物である。

「かゝる弊害がある爲めに名譽心を教育の手段に使ふ事は全然惡いといふ說もあるが、名譽心を基礎とする教育は日本古來より行はれて、しかもかなり成功してきたのである。即ち武士道

に於ける『武士の面目』とか、『刀の手前』とかいふ語によつて、廉恥を知り、自重してゐたのであつて、これを知らぬものは町人根性と卑しんだ。つまり日本魂の生粋は名譽心より發したものといへる。故に將來の日本人を造るにもこの方針により、家庭に於て各父母が我家我國の名譽とか功績とかを兒童に分りやすく話して、その子孫としての自重心を起さしめればよいのである。先祖に偉動者を出さぬ場合でも、日本國民と生れた事が既に名譽である、又各自の家から犯罪者を出さぬ事が一種の消極的の名譽であると敎へて、兒童自らに何らかの名譽を感ぜしむる事が必要であらう。

兒童の名譽心と權力の觀念に連絡して、社會性の一方面として起つてくるものは英雄崇拜である。兒童が他に權力を及ぼし又他から賞讃をうけた時の愉快さを基礎として、偉い事を成し遂げ、世の人の多數を自己の意志に從はせ、且つその社會から偉いと認められた英雄豪傑を慕ふのは優越本能の一の現はれでなければならぬ。

兒童は想像力が發達してゐるため、いろ〳〵の經驗から名譽と權勢とを兼ね具へた英雄を心に描き、自らそれになつたやうに感じて自然身體の態度にも現はれる。英雄の傳記などの話を聞

いた兒童が意氣揚々として肩を怒らして敎室から出て來るが如きは各國をとはず皆然りである。

併しその崇拜の對象は年齢によつて次第に異るもので、一番智能の發達せぬ幼い頃は、先生、村長さん、郡長さん、お巡りさん、兵隊さん等を崇拜の中心人物とする。ところが少し進んで眼界が廣くなつて來ると、その時代に名の顯はれてゐる人、例へば何々將軍とかいふ現在の人、或は源義經とか豐臣秀吉とかいふ歴史上の人物を崇拜するのである。大きくなつたら何になると問はれて、總理大臣とか陸軍大將とかいふ答をするのもこの時代つまり小學校時代である。中等敎育をうけて考へが世界的になると、ネルソンとかナポレオンとか、シーザー、ソクラテスといふ風に軍人でも學者でも宗敎家でもすべて世界的人物を選ぶやうになる。更に一層進んで青年期の半以上になると時として腦中に中心人物を置かず、純粹の理想的對象物を作り出す事ができる。これが卽ち神又は佛であつて、崇拜はこゝに信仰と變じ宗敎的色彩を帶びてくる。これを一言に約めていへば、崇拜の對象物は年齢の長ずるに從ひ、具體的より移つて抽象的となるともいはうか。

故に注意すべき事は兒童は、眼前にある人の他から崇拜せられる狀態を見て之を崇拜する念を起すので、もしこの崇拜の的が自ら貶し、又は他から傷けられるやうな事があれば崇拜の念は忽ちにして消えるといふ事である。即ち兒童は自分の偉いと信じてゐる人は何人よりも必ず偉かるべきものと信じてゐるのであるから、もし他にそれより偉いものが見つかれば、崇拜の念はその方に移つてしまふ。この意味に於て、父兄が家庭で教師の惡口を言ふ事は固く愼まなければならぬ。又大臣大將乃至は教師の職にある等、苟も兒童の尊敬の的たるべき位置に屬る人は、少年子弟教育の爲めに深く自ら重んじて、彼等が英雄として崇拜してゐる心持を傷つけないやうにせねばならぬ。

第五章　兒童の知能と其教育

一　感覺と認識作用

我らが感官即ち耳眼鼻口皮膚等の末梢器官に外界の刺戟を感覺し、それによつて外界の狀況を知る作用を認識作用といふ。これらの器官がまだ十分に發達せぬ幼兒と成人との間には自ら認識作用の差がなくてはならぬ。先づ感覺とは身體外に感覺ある所のもの即ち外的刺戟から來る感覺と、有機感覺即ち內的刺戟から來る感覺に二大別されるが、第一外的刺激から來る感覺は更に(A)皮膚感覺（1觸覺、2壓覺、3溫覺）(B)味覺、(C)嗅覺、(D)聽覺、(E)視覺の五つの感覺に分類され、第二の內的刺激から來る感覺は、(A)痛覺、(B)筋覺、(C)腱覺、(D)關節覺、(E)營養機關及び內臟等から來る感覺の五つに分類される。

皮膚感覺はいふまでもなく皮膚から感じるもので、そのうちの觸覺は物が我々の身體に觸れたといふ觀念で、たゞ觸つたといふだけのを單純觸覺、身體の或る部分に觸つた觸れたことを識別するのを識別觸覺とに分けてゐるが、その觸覺には銳鈍の區別があると、榊博士の實驗では、左類に於て觸覺計を當てゝ、九才の少學兒童(女兒)は一一、六粍、十四才六ヶ月の女學生は一二、一粍、九才二ヶ月の小學兒童(男兒)は一二、三粍、十三才六ヶ月の中學生は一、二粍といふ結果が現はれて居る。とにかく觸覺は年齡が增すに從つて遲鈍になる相がある。壓覺は身體

の一部を感じて感じる所のもので、これはいつも筋肉の感覺と結び付いて居つて抵抗感覺と重量感覺の二種がある。前者は杖などで地面を突く時に感じる感覺で、後者は物を擧げた時などに感じる感覺である。ギルバードの實驗の結果は六才から十三才までは年齢の增すに從つて重量の感覺が鋭敏になり、更に十四才、十五才、十六才になると鈍くなる傾向があるといふ。しかし十七才に至ると又鋭敏になる相である。それから重量感覺は物の大さに依つて影響を受けるので、同じ目方でも形が大きければ輕く感じるのである。そして重量感覺に於ける被暗示性は女兒の方が男兒よりも高いのである。溫覺卽ち溫度覺は初生に於て發達してゐる。そして身體の部分によつて相違があるので、舌の先、指先、唇、頰、首筋、脊等の順序で鋭敏になつて居る。

第二の味覺といふのは味の感覺で、これは兒童に於て最も早く發達する所の感覺である。子供が甘い物を喜ぶのはそのためである。然し白痴低能兒には味覺の缺陷があるが、之を異食症といつて居る。第三は嗅覺で、クスマウルの研究によると初生兒は非常によく惡臭を感じる相である。そして眼の覺めてる時よりも眠つてる時に一層感じるといふて居る。概して生後二三ケ月になると良い匂と惡い臭を區別し、七才位に達すれば大體に於て臭の感覺を識別するやうに

になるのである。第四は聽覺で、之は生れてから六時間以前は無いものである。その理由は、生れたばかりには耳には液があつて皮膜を押へて居り、泣いて呼吸してるうちに段々その液が退くので、音も聞えてくるのである。卽ち音は生れてから六時間より三週間の間に聞えてくるのである。最初は高い音を聞き低い音は聞かないので、一才から一才半になると聽覺は漸次鋭敏になる。音の方向を聞き分けるのは生後四ケ月で、子供によつて遲い早いがある。それから聽覺の鋭鈍は精神の發達に大分關係があるので、鈍い者は精神の發達もやゝ鈍いのが多い。聽覺に缺陷のある兒童を學校について調べた處が、日本では二十乃至三十パーセント、米國では二十五乃至二十パーセント、英國では二十パーセント、獨國では三十パーセント、露國では二十一パーセント、あつたといふことである。第五の視覺について云ふと、生れたての兒は盲目であつて、數分間若くは數時間たつて始めて見えるやうになるのであるが、生れて三四日間は光を感ずるのみで色盲である、眼も生れた當座は瞼視だが三四ケ月たつと平行して動くやうになる。

次に內的刺激から來る感覺を述べると、先づ第一は痛覺であるが、之れは身體諸部の生理作

用に障碍のある場合に起る感覺で、兒童について調べて見ると概して頭腦の惡い者ほど痛覺は鈍いやうである。よく不良少年などに不死身の多いのはこのよい例である。然し餘り痛覺の鋭過るのも頭腦によくない。第二の筋覺といふのは筋肉の收縮によつて起る感覺で、之れはいつも腱覺や關節覺に關係して居る。筋覺は兒童の自我觀念の發達を助けるものであると共に意志の發達をも示すものである。此の筋覺、關節覺、腱覺の結び付いて起る運動感覺は適當な場合には非常に快感を與へるもので、兒童が遊戯を喜ぶのも一はそのためである。

感覺の働きを統一して外界の狀況を感知するのを知覺といふ。普通知覺は空間の知覺と時間の知覺とに分れる。

幼兒の空間に對する知覺は極めて單純で、視覺や觸覺で廣がりを感じ、唇などの運動を以て空間を感ずるのみである。この基本的練習の爲めにフレーベルの恩物中に種々の幾何形態を使用してゐる。

距離に對する知覺は六才以後特に六才の時に大いに發達する。モイマンの研究によれば二線の長さを等分させた處六才では四分の五粍の誤があつたのに、七才では多くとも1/10粍、平

均では1/21粍の誤があつたのみである、十二三才になれば可成複雜な目測でも大して成人と變りが無い。

時間知覺は最も遲く發達する。尋常四五年位の兒童でも三十秒を五十秒乃至三百秒といつたといふ例がある。兒童は概して短い時間を長く、長い時間を短く見る傾向がある。

これを概括して述べると、兒童の認識作用は粗大であつて、その發達に遲速はあるが、いづれも漸次微細となるものである。そしてどの器官も練習によつてその機能を高めることができる。出來るだけ多くの經驗を與へて感覺の正しい練習を積ませることは認識作用を發達せしめる上に大した貢献があらう。

二　兒童の注意作用

注意とは外界の一切の中より、ある物象が指定されて我々の心の中に入る過程をいふのである。これを分てば受動的注意又は無意注意（即ち對象が自ら注意さるゝ場合）と、能動的注意又は有意注意（即ち注意せんとして注意する場合）とになる。而して後者は練習によりて第二

次的無意注意（意志を用ひずに全然心が一事に集中される場合）と變化する。注意も茲に至れば極まれりで、所謂三昧に入つたものである。

兒童の注意は無意注意である。ごく幼少なものは呼ばれた聲に應じて注意し、全然意志を働かせる事がない。やゝ長ずれば、刺戟の強いもの、廣がりの大なるもの、刺戟の新奇なもの、反復されるもの運動するもの等の各々又は之を兼ね具へるものには注意をするが、その他のものに對しては意志的努力を拂ふ事はできない。少年期に入つては無意注意の外に有意注意も現はれ、稀に第二次的無意注意すら現はれる。作業の上に第二次的無意注意が確實に現はれ得るのは青年期に入つてからである。

兒童は同時に二つ乃至三つの物に對して注意を働かせる事はできない。成人に於いてすら注意範圍の最大限は六つであるとされてゐる。赤子が片手に玩具を持つてゐる時、一方の手にも一つの玩具を持たせれば前に持つてゐた玩具を落す、これが注意範圍の成人より狹い證據である。瞬間露出機によつて小學兒童の注意範圍を檢査した結果によれば次表の如くである。

年齢	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
男（平均）	一・八	二・二	二・七	二・六	二・九	三・〇	―	三・五	三・五	三・五
女（平均）	二・〇	二・三	二・二	二・六	三・一	二・九	三・三	三・四	三・五	三・五

以上の如くであるから、兒童に同時に多くの作業を課してはならない。到底滿足にそれを果す事ができないのみならず、あまり數が多いとまづ『これは大變だ。』といふ感じを與へ、それが暗示となつて意志の禁止を起し、却つて効果を減殺する。

兒童の注意の深さは又成人に比して淺い。從つて何かの刺戟に遇ふと直に散亂する。故に注意を要する作業をさせる時は十分周圍を肅にしてやる必要がある。

有意注意の持續の長さは年齢と正比例する。即ち幼少な程時間も短かくなるのである。それはつまり注意によつて疲勞を感じる時間が早いといふ事を證明するもので、それ故に注意を要する課業の時間も幼少な程短くなくてはならぬといふ事に歸着する。

故に兒童をして過度に作業せしめぬ爲めには、適當な考察を以てした時間割によらなくてはなるまい。左にエレンケイの制定した時間割の一例を掲げよう。

年齡	就眠時間	起床時間	着衣洗面	食事	遊戯	課業	休憩
年	時	時	時間	時間	時間	時間	時間
七	八	七	一	五	六	二—三	二—三
八	八	七	一	五	五—六	三—四	二—三
九	八	七	五	五	五	四—五	二・五
一〇	八—九	七	五	五	三—四	六	四
一一	八—九	七	五	五	四—五	六	四—五
一二	九	七	五	五	三	七	四—五
一三	九	七	五	五	三	七	四—五
一四	九—五	七	五	五	二—五	八	四—九
一五	一〇	七	五	五	二—五	八—五	五
一六	一〇	七	一	五	二—五	八—五	五
一七	一〇	六・三〇	一	三	二—五	九	五
一八	一〇	六・三〇	一	三	三—五	九	五

これによつて見れば、兒童の家庭に於ける作業時間は最高程度が三時間以内で、それ以上は過度とせねばならぬ。幼きものには適度の參酌を加へて減ずる事は勿論である。

併し之らの有意注意は、その修練によつて永く持續する事も周圍に攪亂されないですむ事ができる。これは學校や家庭に於て注意力の練習をなし、その結果形成された習慣の力である。けれども有爲的注意には強弱があつて、多く身體の強弱に比例する。注意の連續性となると、この身體の強弱の外に氣候の關係がある。即ち夏は注意が短く散亂し易く、冬はこれに反する。冬日の學習によいのもこの理由からである。

三　變化と疲勞と睡眠

幼稚園程度の兒童は特に變化を好むものである。その原因はといふに、一は律動の影響一は疲勞の感覺からである。

これを詳說すれば、律動とは心理學上に云ふリズムの譯で、韻律又は定期變換律とも云ふ。すべて萬物の進歩は一直線でなく波動的に進むものである。人の運命も世上の轉變もすべて禍福相變り治亂興廢が止まぬ。氣候に四時の變化あり花に開落あり月に盈虛がある。森羅萬象盡く律動に支配されてゐるのである。同樣に兒童の感覺にも亦變動がある。精神にも律動がある

のである。

耳、眼、鼻等の感覺機關が律動的に交互に働いてゐるといふ事には、心理學上興味ある實驗法がある。まづ眼の場合には一眼は綠、一眼は赤の眼鏡を懸けて一所を凝視めてゐると、ある時はそこが綠に見え、ある時は赤に見える。卽ち兩眼が交互に働く證據である。耳の場合は深夜人靜まつた頃、耳をすまして時計のセコンドを聞くがよい、或は音が近くなり或は遠くなる。これは左右の耳が律動的に働いたり休んだりしてゐる證據である。鼻の場合は鼻孔へ二本のラッパ狀の管を挿し、二つの異つた香、たとへば一方にはバラの香を置き一方には麝香の香を置くと、これ又ある時はバラの香を强く感じ、ある時は麝香の香を强く感じる。

感覺にして既に然り、精神に律動的の働きあるは論を俟たぬ。かく身心供に變化してゆくのに、ひとり課業のみが變化せずしては兒童の倦怠を感じるのも無理はない。幼稚園時代には一時に三分以上注意を持續させる事は困難としてある。從つて、長いお談義等はその効なく却つて注意を散漫にさせるばかりであるから、十五分か二十分位の間には相當變化を與へねばならぬ。併しこゝに注意べき事は、餘りに變化のめまぐるしいのも刺戟上注意がまとまらなくて惡いので、一つの物でもその以置を變へるとか分解して見せるとか、或は問答し或は實驗して教育的な變化法を示さねばならぬ。

子供の變化を好む今一つの原因は疲勞を感ずる事である。疲勞とは、腦の細胞に萎弱を來し血液中に一種の毒分を生じる事である。兒童は身體の新陳代謝が盛んである爲め、毒分を生ずる事も早いが一方恢復する事も早い。併し疲勞が早いといふ事は同一事業の永續困難を感じさせる。故に幼稚園兒や小學校初年級生では一時間中に一二回二三分づゝ休憩させる必要がある。休憩の外に玆に變化法を用ひて感覺の働く方面を變へ、或は見せ或は聞かせ或は語らせなど、各種能力を滿遍なく使ふやうにすれば比較的疲勞の度の少ないものである。

疲勞から救はれる最大の手段は休息で、その中でも効果のあるのが睡眠である。睡眠は意識の溷濁狀態卽ち無意識の狀態に入る事で、睡眠中は內臟の一部を除く外殆んど全部の機關が休息するので、全身の疲勞恢復の爲には之程よい方法は無いのである。吾々が每夜の睡眠も畢竟この目的であるが、若しこれが十分でない時にはいつも意識が溷濁してゐてはき〳〵と事物を處斷する事が難い。殊に兒童にとつては發育上睡眠が必要なのである。

兒童の睡眠時間は獨逸のペルンハルト氏說の學校衞生によると左の如くである。

七才乃至九才……十一時間
十才乃至十一才……十時間乃至十一時間
十二才乃至十三才……十時間
十四才……九時間半

以上は是非必要とするだけの睡眠時間を擧げたのであるが、もしこれに不足すると學業に注意を集める事ができず、發育旺盛な兒童の身體や神經系にもとり返へしのつかぬ後害を貽す事がある。神經質の兒童中には往々中々熟睡ができず、睡つても夢を見てすぐ眼覺めるものがあるが、かゝる傾向のものは特に注意して早く就寢せしめ、身心の安定を與える事につとめねばならぬ。

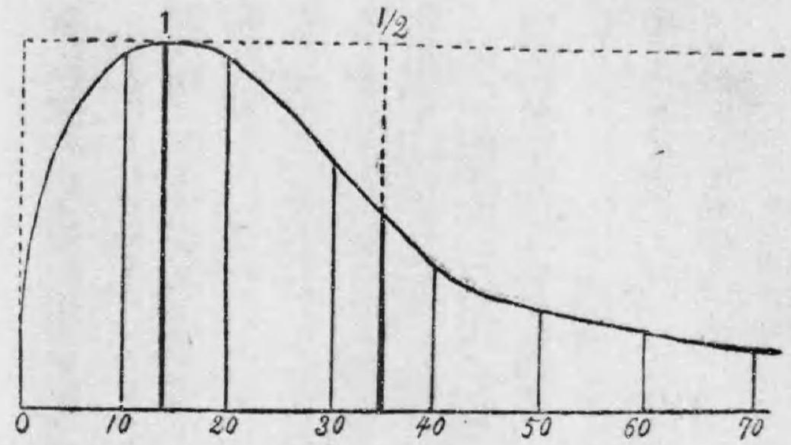
四　兒童と記憶作用

戲曲に源義經は二歲にして平宗淸を記憶したといふ事があるが、これは別として人生最

初の記憶はいつ頃から起るものであらうか。

統計によれば最も古いのは一歲二歲の折の出來事を記憶してゐるといふが、最も多いのは三歲の時である。即ち人の記憶で生涯に殘るものは凡そ滿三年から初まる場合が最も多いと言ふ事ができる。いづれにしても記憶力の弱いこの時代に、生涯に殘るほどの記憶をうけるにはよほど特殊の出來事でなければならぬ。即ち、火事とか地震とかの災害の記憶で、同じ感情の中でも怖れとか驚きとかの如く强い刺戟を與へるものは最も記憶に殘り易いのである。併し七歲以前即ち幼年期の記憶は一般の場合に於て忘れ易いものである。

進んで學齡前後に至れば記憶力は次第に盛んになつてくる。續いて十二三歲から二十歲位が生涯中最も記憶の盛んな時で、その後は次第に力が衰へ、三十歲には最盛時の半分位になつてしまひ、七十八十の老年になると全然記憶の働がなく、たゞ若かつた頃の明瞭な記憶のみが殘る。それ故老人の話には自分の若い時の思ひ出話が多いので、これは單に愚痴な計りでは無い。左にこれを圖示する。（埃太利維納大學教授リンドネル氏の研究）



下部の數字は年齢

高さは記憶の度

以上のやうに小學校時代が最も記憶力の盛んである理由は、この時代の兒童は最も生理的作用が盛んである事による。人の腦細胞は幼年時代には水分に富み、恰も蠟細工の折に於いて型付をするやうに餘り軟かくてはその用を成さず併し又これが固まり過ぎてもいけないので、小學校時代には記憶を刻み付けるのには最も適當な軟かさであるのである。これが生理的方面より見た記憶の第一條件である。故にこの時代は刺戟を受くるに從つてそれを記憶し、その働きは殆んど止む時がない位である。

記憶をその方法によつて分類すれば、機械的記憶と論理的記憶の二つになる。機械的とは知

覺した事そのまゝを道理の如何に拘らず直ちに記憶する事で、論理的とは道理の關係をたどつて記憶する事である。生理的條件の最もよく備はつてゐる小學生の記憶は皆機械的記憶に屬し、刺戟をうけるや否や直觀が働いて、それが直ちに記憶となる、その間に何等論理的思考の働きを入れないのである。長じて成年期に至つたものゝ記憶力は大いに衰へるが猶ほ相當の勢力を保つ事のできるのは、青年期から次第に現はれてくる論理的記憶の結果である。それには記憶に對する心理要件を具へねばならぬ。

心理的要件とはたゞ生理的に記憶に留めるばかりでなく、自己の智識がふえてくるに從つて事物を理會し、自己の腦中を統一整理する。換言すれば、觀念聯合作用や類化作用によつて新しい刺戟を既に有する智識に結びつけてゆくのである。かういふ記憶は年齢によつて著しく衰へるものではなく三十四十の所謂分別盛りの分別を形成するのである。

記憶を完全にするには今一つ物理的要件が備はる事を要する。これは兒童と大人との區別なく必要であつて、靜かな明るい境遇と、明瞭な形又は聲の刺戟をいふ。故に教室は靜かな明るい室でなければならぬし、教授法は明瞭でなければならぬ。

かういふ風に小學校時代の兒童は生理的理由からして機械的記憶にすぐれてゐるものであるから、種々な事を教へるのにあまり理屈に拘泥せずに正確な事柄をそのまゝ覺えさせた方がよいのである。從つて、外國語又は表類、例へばいろは五十音は勿論加減乘除の九々とか、化學の符號等の類はこの時代に覺え込ますに限るので、現在制度の如く中等學校程度になつて語學を初めると、記憶の上に大いに苦しまねばならない。

かやうに兒童の記憶は盛んではあるが、必ずしも正確で完全だといふ事はできない。完全な記憶には把住と再現と再認との三つの過程が備はらねばならぬ。一般には把住即ちしつかり事物の正體を掴むことゝ、再現即ち腦中にそれを觀念として現はす事だけで記憶といふのであるが、學問上からいへば今一つ再認即ち何時何處で經驗した事であるかといふその時間と空間の判斷がはつきりしなければならぬ。概して普通にいふ記憶はみな不完全なものであるが、兒童の時の記憶もこの大切な再認が缺け易いのである。しかも把住と再認の働きは非常に強い爲めに、いはゞ減茶苦茶に頭の中へ詰め込まれる傾きがあるので、教授者の方では十分注意して教材を選擇し、これを整理して腦中に入れてやらねばならぬ。もうこの際に誤つた記憶を與へる

事があれば、一生涯そのまを承認し、後に正誤する事はよほど困難であると思はねばならぬ。

記憶を時間的に分類すると知覺の直後の記憶即ち直接記憶と、長き間を置いての記憶即ち永續記憶とに分れる。この永續記憶によつて後半生の生涯は續けられるので、前半生の經驗の如何によつて、後半生は愉快にも苦痛にもなるのである。迷信深い宗教家がいふ生靈死靈の祟りは、一種の記憶から刺戟をうけそれが心身に影響を及ぼして現實に形を見るに至るので、心理學上毫も不可思議な事ではない。とにかく記憶といふものは存外人の運命を左右するものである。

幼時から永い間經驗した事はそれだけ記憶が澤山にあるので、それに向へば便宜多く之をすてれば不便が多いのはいふまでもない。之を以て見れば、記憶は將來を限定するといつてよからう。移り氣な人は職業を種々に迷つて、商賣をしてゐるかと思ふと會社へ出る、かと思ふと官吏になつてゐるといふ調子で轉々し、あれもこれも思はしくないと結局最初幼時から見馴れ手なれた職業へかへつてくるものが多い。さすれば最初からその職を守りつゞけるに越した事はないので、幼時の記憶はこゝにまで及ぶのである。故に老練な探偵は犯人搜査にこれを應用する事がある。

記憶は知能との關係が著るしく、その强弱といふ事は先天的の素質による事が多い。併し度々反覆して練習をするときはある限界までは發達する。兒童の記憶練習は一般に輕視され、單に覺えがよいとか悪いとか評せられるに止まつてゐるが、兒童をして注意の練習をさせる事や、反覆を重ねさせる事は一にはその材料の記憶を確かにすると同時に印象を把持する一般能力を高める。殊にその能力の旺盛な時に於て然りである。

猶ロブシインの研究によれば記憶の中でも各種の記憶によりその發達を異にしてゐる。幼少の兒童は情緒的記憶（たとへば喜び、悲しみ、希望といふやうな語の記憶）は甚だ劣り、青春期になると著しく進むのである。一般に男兒に最も記憶されやすいものは實物で、次は視覺內容の語、聽覺內容の語、音觸覺を示す語（例へば滑とか粗いとかの語）運動感覺の語で、數及び抽象名詞がこれに次ぎ情緒的の語は最も記憶が困難である。女兒の場合は、まづ最も容易なのが視覺內容の語、次は順次實物、音、數、抽象名詞、聽覺內容の語、觸覺及び運動感覺の語で最後が精神的の語であるといつてゐる。

とにかく記憶は知能の働きのうちで最も基礎的根本的のものであるから、これの正確な發達

をさせるためには、教師や父兄が十分に力を致さねばならぬ。

五　兒童の推理作用

幼兒時代の末期には、明かに推理作用が現はれるのを見る。推理作用は卽ち物の道理を考へる働きであるが、之がこの頃から論理の形式を取つて現はれるのである。併しなほこの頃の兒童は偶然性と主要性とを混合する爲め、その推理には誤りが多い。卽ち偶然に一つの事が突發して、前後の時間の關係があると、直ちにそれを原則として一般の場合を論じるので、そこには演繹も歸納も殆んど區別なく、一つの事を經驗すればそれが直ちに演繹法の大前提となるのである。

例へば二人の兒童が同種の玩具を持つてゐた。ところが甲の玩具は形が大きく、乙のは小さい。この場合に乙が下した結論は甚だ振るつたものである。

『甲君の玩具は大きな店で買つたから大きいのだ、僕のは小さい店で買つたから小さいのだ。』

と。卽ちこの論法で行けば、偶然にその玩具を買つた店の廣狹を想ひ出し、それを原則とし

て、

『家が廣ければ大きな玩具を造る。』『甲君の玩具は廣き店にて買へり。』『故に甲君の玩具は大なり』といふ斷案になる。實に大人から見れば失笑を禁じ得ぬほど面白い徑路を經た斷定なのである。併しこれを單なる笑ひ話として終ふのは餘りに輕卒な事で、かういふ事が將來推理の本になるのであるから、よくその誤謬を說明してやらねばならぬ。又稀に幼い子供が大人を驚かすやうな推論を出す事があるが、それを賢いといつて賞讃すべきで無い。それは全く意志あつてするのでなく偶然の產物であるからである。

少年期に入つては推理力は次第に正確に、かつ演繹的歸納的に首尾を完全してくるやうになる。これがやがて大人の推理判斷の初めである。

兒童の推理がかく無系統的斷片的であり不正確である所以のものは、第一に兒童の有する觀念が想像活動の旺盛と、注意の集中が困難なために、ともすれば不正確に陷り易いことと、第二には兒童の精神生活に系統がなく、全體として斷片的聯想的である爲めに觀念と觀念との聯絡關係といふ方面にはぼんやりしてゐる事である。

今一つ大切な事は、兒童の推理を不正確にさせるものは批判的態度に缺けてゐる事で、兒童の中心をつかみ、これを檢する事ができないのが理由をなしてゐる。

さすれば推理力の練習はどうしてさせるか、勿論多くの問題を與へて物を考へる機會を造つてやることもよからうが、根本的問題は兒童の好奇本能を適當にとりあつかふ事である。

好奇といふ本能は考へんとする傾向である。『何故』といふ疑問を起すのは考へる第一歩である。この萠芽を屢々大人の爲めにくぢかれては推理力の發育は得て望まれない。勿論その推理の結果がどうあらうとも、これを冷笑し又は嘲笑の材料とする事はくれ〴〵も慎まねばならぬ。

その他記憶、注意、想像の教育を完全に施すことも勿論大切であらう。

六 兒童の比較辨別力

記憶作用と同時に現はれるものは比較作用である。總べての高尙な學問も、要するに物を比較して互の關係を認めてゆくに過ぎないものであるから、この比較力の現はれは將來すべての智

識の基となるものである。

五六才の幼兒時代に至つて、初めて比較力は現はれてくるが、二つの物を比較して其の間の差異を見出す辨別力はまだ至つて弱い爲め、類似した者はすべて同一概念の下に混同して終ふ傾きがある。例へばアの字とヲの字とを混同し、ヲの字とラの字とを誤る類である。それを誤りなく練習させて比較力を養ふ爲には、二つの物の差異を著るしくして、それを明瞭に認める事ができるやうにしこれを以て比較の練習をせる事である。

少年期に入れば比較作用は更に進歩して、單に事物を比較してその類似點を認めるのみでなく、更に一歩進んで事物の間の違ひを發見する事ができるやうになる。

かやうに比較辨別の作用が進むといふ事は、つまり抽象作用が進むといふ事である。外界の一つ〳〵の物に拘泥してゐる間は、十分な比較も辨別も困難であるが、既に纒まつた概念や判斷の作用が出來てくると、抽象作用も正しく出來得るのである。すべて人の心は進歩するに從ひ事實實物に囚はれず、簡短敏捷に働く事ができるやうになる。

この時代になつて抽象作用の進む例は、著るしく文章や言語が自由になつてくる事を以ても

知られる。勿論言文一致體を用ひしめる爲もあらうが、昔の兒童と異つて今の小學生の手紙が好何に自由に思ふまゝを述べられてゐる事であらう。これは畢竟教授法が進んで、兒童の心の抽象作用を利用する事が巧みなからで、何事ををしへるにも或は歸納的に或は演繹的に規則を理會せしめ、兒童も又これを消化して巧みに應用してゆく力が既に生じてゐる。幼時には會話にも往々發見される文章上の誤りが、この時代には矯正されてくるのも抽象作用の働きである。すべての規則の適用はこの時に至つて可能に成つてくる。

抽象作用の働きの發達に伴つて、同情の廣まる事がある。兒童の同情も最初はほんの親近者に向つて現はすのみであるが、少年期の後半に至ると、他人特に饑饉、海嘯等の天災時に於てその罹災者に同情を表する事ができるやうになる。即ち抽象力が進んだ爲め、眼前に居ない者、又は實際の感覺にふれないものをも想像に浮べる事ができるやうになつたので、兒童にとつては一大進歩である。勿論同情は感情の働きであるが、智力の進歩と相俟たねば、眞の發達はできないのである。

七　兒童と想像

兒童は想像力が烈しい。想像と記憶との差は、記憶が過去の經驗の再生であるのに、想像はこの過去の經驗がその結合形式を變化してあらはれるといふことにある。いひかへれば、想像は過去の經驗の新らしい複雜な統覺的結合であるといへる。

想像を大分すれば受動的（所謂自發的）想像と能動的（所謂構成的）想像とになる。このうち能動的想像は青年期以後に於て初めて現はれるもので、諸學說、諸計畫みなこれである。これには相當の知識と思考力を要するので幼少な子供に成し得る所ではない。

モイマンは兒童の想像の特性として左の三條を擧げてゐる。

1、受動的無計畫的なること。

2、抽象的にあらずして直觀的なること。

3、無批評的架空的なこと。

即ち兒童の想像は自分でこれを組立てるのではなく、再生的模倣的に記憶が現はれたままに

口をついて出づるので、往々突拍子も無い脫線をする事がある。無系統的聯想的に現はれるため、無批評的架空的で大人から見れば寧ろ荒唐無稽な事が多い。併し直觀的であり著るしく感覺的である爲めに、大人をして思はず膝を打たしめるやうな想像力を現はすこともある。これらの傾向は年と共に系統立つて來、批評的となり抽象的となるのである。

兒童の想像がいかに聯想的で無系統であるかを知るべく、青木誠四郎氏が自著『教育的兒童心理學』に引かれた一例を借用しよう。これはある幼稚園生の話で雜誌『心理研究』に掲載せられたものである。

ある所に木があつたんですつて。木に鳥がとまつたらばね、人が見てとらうとしたらば逃げたんですつて。今度はね、竹籔のところに鳥がかくれたの。するとね、今度、鼠が來たので食べちやつたの、鳥を。それでね、今度ね、動物園へ行つたらばね、動物に食はれたの。そしてね、動物が逃げたらば、動物園の人が追つかけたの。それでね、動物が逃げ出したの。かやうに所謂辻褄の合はぬ話をして笑ひの種をまくものであるが、往々他の現象に影響されて想像と實際とが混同し、觀察が不正確になつたり、想像を事實として承認してしまふ結果、

無意識のうちに嘘言をついたりする事がある。それ故可成早くから想像のよい修練を行はせなければならない、こゝにお伽話（童話）の利用といふ事が起つてくるのである。

ところが尋常科三四年位になると、もう童話では承知せぬやうになる。即ち想像の制限といふことが行はれてくるのである。既に種々な事の經驗を經たために、實際に出來る事と出來ないことゝ、又作つた事と實際にあつた事との區別がつくために、想像をするにも單なる空想ではあきたらず、想像を實際化し又實際に結びつけやうとする。即ち鳥や獸が話をしたりする事は一笑に附し去り、先覺の冒險談等に興を覺えて、自らその話中の人となる想像を廻らすのである。こゝに想像は漸く確實性を帶び目的物が定まり、次第に構成想像に移つてゆく端緒をなすのである。

八　兒童の活動性と教育

最近世上の流行語に活動性（アクティヴイテー）といふ語がある。即ち物の働きを現はすのであるが、兒童は身心共に活動性に富むものである。活動はあらゆる生物といふ生物が生來本然的

に持つてゐる性質の一つであつて、たとへ一つの細胞の動物でも生きてゐる以上は活動を續けてゐる。自ら活動すると共に他の刺戟物に對して之に應じた種々の働きをする。兒童は大人よりも多くの刺戟物を持つ爲めに、活動性も亦盛んに現はれるものである。その中には善いものも惡いものも、つまり善惡無數の活動の芽が兒童の心中に潜んでゐる譯であるが、この活動性を適當に働かせて、惡きものを摘み、善いものを延ばしてゆくのが教育の眞意義である。

教育は絶對的に人の心を自由に作り、人の天性を變へる事が出來るかといふ事は、今問題とされてゐる處であるが、要はその成否如何にある。これは固より困難事には違ひないが、兒童の天性を絶對に取り去る事はできないがある程度まで善い方に進める事は確かに可能だといふ事に一致してゐる。

活動性は天性であるが、その中でも惡い傾向のもの、例へば小さい子供は他人のものでも何でも構はずに口へ持つて行き又は叩くものであるが、その活動性をそのまゝ打ちすてゝ置けば、自他の物の見境がなくなり、遂には『人の物は己の物』といふやうになる。併し又絶體にこれをとめて終つて何も持たせぬやうにすれば、まるで坊ちやん育ちになり薄志弱行の人となる。こ

こが教育のむづかしい所であるが、惡い天性の芽はその芽生の間に發見して、これに刺戟を與へぬやうにすれば次第に退化し消滅するものである。と同じによい方の芽はこれを適當に指導し、折にふれて刺戟を與へさへすれば、これ又次第に發達するものである。活動性の選擇と禁止奬勵は、植木屋の鋏のやうなもので、その働き一つで兒童は良くもなり惡くもなる。これが卽ち教育の好機である。

人の天性は年齢に歷じて次第〳〵に一つづつ現れては消え、現はれては消えるので、生涯に亘つて續くものと、一時的に出るものとがある。その順序に從つてこれを教養してゆくのには勿論學校教育も家庭教育も與つて力があるのであるが、こゝに見逃すべからざるは社會の教育である。すべて世の中の人に見聞させ、その人の心に影響を與へるものはすべて廣義の社會教育と解してよいが、これが兒童に與へる影響は意外に大きいものである。

演劇は一の社會教育である。これを害あるものとして兒童には絕對に見せぬといふ方針は從來嚴格な家庭に行はれて來たが、それは畢竟材料の問題であつて、演劇その物の價値には關係はない。子供は五つ六つになると戲曲的本能が自然に現はれ、その結果として自然の芝居卽ち女の、

子の飯事、お母さんごつこ、お嫁さんごつこ等の遊びや男の子の戰爭ごつこ、豪傑ごつことなつて現はれる。芝居ごつこをして長い刀をさし大人の着物を引摺つて喜ぶのもこの本能の發現である。それ故絕對に芝居を見せないのも考へ物で、結局この本能を滿足させる爲には解りやすい良いものを選んで見せるのが適當である。外國ではかういふ施設も多いが、近來日本でも兒童劇とかお伽劇とかの研究が次第に進み、隨時その催しを見るやうになつたのは喜ぶべき事である。

講談も社會教育の一で、その材料は主として武勇傳であるが、興味を中心として扱つてある爲めに學校の修身課よりも子供に喜ばれ印象も深いものである。それ故に、そのよきものを選んで子供に聞かせるのは非常に効果がある。見世物も亦子供の注意をひき一種の教育になるが何時の場合にも質のよい物を選ぶ事を忘れてはならぬ。この種のものは所謂山師の類に依つて興行される爲め往〻非教育的なものや慘酷なものを見る事があるので、兒童の任意に放任する事は危險である。

書籍雜誌の類も同じく社會教育である。出版事業の發達につれ、少年少女の讀書慾に投ずべく月々多數の書籍雜誌の刊行を見るのであるが、これ又子女の取るに任せて置くと濫讀の結果

弊害恐るべきものがある。殊に教育上害のあるやうなものは特に好奇心をそゝるものであるから、これらは絶對に目にふれぬやうにせねばならぬ。一方學校でも家庭でも、注意して兒童の要求に添ふやうな良書を選び之を與へる等、積極的方面にも考へねばならぬ。學校で男女の別を考へその程度に適した書物を指定し、各家庭に入れしむるやうに指導するのは良策であらう。

新聞紙は大人の爲には社會の耳目であり、處世の指針であるが、社會の是非善惡盡く之を載せる爲めに、判斷力の弱い兒童には見せて惡い事が往々ある。さりとて兒童にも社會教育上これを見せる事に大利益があるので、新聞の良い物と惡い物を選み分けて良い物のみを見せるやうにするのが良法である。英國の良家庭では兒童に見せる前に母親が檢閲し、惡い記事は切り抜いて讀ませる。子供が『此處はどうして無いか。』と尋ねたら、『お母さんが入用があつて切り抜いたから。』と答へるさうであるが、それまで注意が行き屆けば安心であらう。

一體に書籍雜誌乃至は新聞等の惡いものを禁止するのに、ある本は見てはいけないといへば却つて兒童の注意を引き好奇心を起させて、内緒でかくれ讀み等をするものである。それ故一般に見ては惡いといふ物を言はず、却つて良い物を示して注意をその方に轉換せしめる事が良策

であらう。

第六章 兒童の感情と其教育

一 兒童と感情

感情といふものは快、不快の精神狀態の總稱であつて、ヴント一派の說に從へばこの他に尙、一興奮、沈靜、緊張、弛緩などがあるとされてゐる。興奮は例へば赤い色を見た時、突然之は赤いと思つた時の心地で、沈靜はそれが元へ歸つた時の心地である。又緊張といふのは今將に矢を放たうとする心地で、放つてしまつた後の心地が弛緩なのである、先づ感情の一つに感覺的感情といふのがある、卽ち前述の赤い色を感じる心地がそれである。次には情緒といふのがある、刺戟が一つの感覺を起し、そこで感じを起すのが卽ち情緒である。それから第三には情操といつて或る事柄について有意的の注意を拂つてそれに斷定を行つた所の快不快がそれである。まづ恐ろしいといふ感情が情緒である。學者のうちには胎兒が恐怖の情をもつと云つてる人も

ある。恐怖の發達の順序を見ると、最初に不快の經驗をした事から起つて來てゐる。それで恐怖の目的物は年齢によつて違ひ又男女によつても異るが、この情はどんな小さい子供の時からでもある。そして小さい程恐怖の程度が多いのである。情緒としての恐怖の次には驚愕を擧げなければならない。驚愕は自分が豫期しなかつた事に突然接した時に起るものであつて、先づ不快な狀と見ていいのである。次には憤怒を擧げる事が出來る。憤怒は禍又は苦痛をうけた時に起るので破壞的狀態である。それから次には笑といふ情緒がある。笑ひは非常の場合に起るもので、子供の笑ひは身體の心持よい時起るもので生理的原因に關係して居る。それが漸次進んでくると精神的原因からも起つてくるのである。この他に得意とか羞恥とかいふて自己の値打に依つて起る感情がある。以上述べた情緒はすべて盲目的に陷り易いもので、教育上多大の注意を要するものである。

更に情操について云ふと、先づ情操は知的、道德的、美的、宗教的、の四通りに分類して考へる事が出來る。簡單に云ふと、知的情操は或る事柄に就て斷定を下して、それが正しい、正しくないといふ樣なことから來る快・不快の感情である。子供はまた經驗に乏しいので何でも珍

らしいものを求める心が強い。又同時に一方では疑惑の心が非常に起る。これらの二つの心持即ち好奇心及び疑惑は知的情操に屬する。次は道德的情操であるが　兒童は道德的責任をもたないものであつて、自分は善を善とし惡を惡とするといふ自覺の下にやつて居るのでない。兒童の道德的情操を養ふには人物中心主義が最もよい。其れは兒童といふものは英雄崇拜の念が非常に強いからである。次に美的情操であるが　之れには三つの要素がある。第一は感覺的要素で、第二は形式的要素、之れは色の配合、音の配合等即ち形式的の方面である。第三は眞の理想的要素、觀念的要素である。即ち理想の上から來る所の物の快不快である。次に宗教的情操といふのがある。之の情操は十七歲頃に於て最も發達するといはれて居るのであつて兒童期に於ては眞の宗教心は起らないとされてゐる。

二　兒童の同情及び愛情

道德的情操の萠芽は幼くして人の有つものである。同情並に愛の感情は人類として最も美しい且つ本能的な情操である。既に嬰兒時代の末期に至れば、本能的に周圍の人を愛し初める。そ

の際に最も親しいのは母親、次は父親、之に次いでは祖父母、兄弟、姉妹である。長じては隣く同胞を愛し世界を愛しなくてはならぬ兒童の同情心や愛情が、最も近しい周圍の人々から初まるのに何の不思議があらうか。

最も元始的な最も單純なのは生理的に起る同情及び愛情である。即ち子供が何の理由もなく乳を飲ませてくれる人に慕ひなつくやうなのをいふので、單にこの種の愛情のみの例をひけば、乳母に育てられた子供が母親に懷かずして乳母を慕ふのは著るしい一例である。

肉親の愛は美醜を超越するとはいへ、聲とか姿とかの美しいものに同情や愛情を表する所謂感覺的愛情が續いて起つてくる。

又久しく一緒に相伴つて暮してゐるもののみに起る固定的愛情があつて、何の理由もなくその一方と別れるに忍びないといふやうなのが之である。

同情及び愛情の完全なものは以上三つの條件を具へてゐなければならない。容易にそれだけを兼ね具へるのは親子の間柄の外にない。親子の間に於ける同情や愛情が、他の何物にも増して強いのは之あるが故である。

古人が行は百孝の本といつた。道德の根元となるもの〻第一は社會學上から言つた孝、第二は論理學上から見た誠、第三は心理學上より見た恕であるといはれてゐる。恕は即ち思ひやり、同情である。同情と誠實を以て成された孝行は親子間に於ける愛情の現はれですべての道德的善行の大本であらねばならぬ。

これを人生最初の而も最大の同情及び愛情として、次第に少年期に入る頃には、同情から起る愛情及び欽仰から起る愛情、即ち眞の意味の愛情が起つてくる。

尋常一二年頃は同情といひ愛情といふもその理由が薄弱で、單に病氣だから可哀想だとか、ニコ〳〵してゐるから好きだとかといふに止まる。次第に批判力が發達するにつれ、小學校の上級程度になると、師なり先輩なりの社會的や道德的價値を認め、これを欽仰し愛慕する際にはその概念が働いてその強さを増し所謂欽仰の愛を形成する。又、對手に對する自己の優越的主觀が判然とし、これに愛情の加味された場合に同情といふ事が明瞭な事由を以て發現する。同情は更に弱い者に對する愛情を惹き起すので、兒童の道德心の發達は、自己を中心として上下二方面の愛情に現はれるといつてよい。

道德教育の一面は確にこの同情心の萠芽を清く美しく鋭く感じ易いものに組織する事にある。その手段として傳記、童話等の清らかな情緒に富んだものを選んで、或は見せ或は聞かせるのが良法であらう。これによつて、兒童の感情は漸く融合して活躍し、しかもその中に組織を得て、道德的情操の發達に結果する處が多かるべき筈である。

三　兒童の道德心と道德意識

教育家の多くは德育の根抵として倫理學乃至は宗教學の抽象的な形而上學的の智識を兒童に吹込む事につとめてゐるが、單にこれのみを以て道德涵養の大事業を成功し得るであらうか。甚だ疑問なきを得ない次第と言はねばならない。勿論、所謂修身科に說く諸德目を知る事によつて、何が正しく何が惡であるかといふことを知る觀念、卽ち道德の知的方面である道德意識又は情操といふものは養はれ得るであらうが、これが決して道德の全部といふ事はできない。寧ろその發端たるに止まるのである。

すべての行爲は善惡に拘らず感情から出發するものである。從つて兒童の道德的情操の發達

如何は先づ探り知らるべき問題であらう。更にかゝる行爲が吾々の生活に織り込まれ固定されて、動搖なく誘惑に打ち克つて行く事によつて初めて道德の完成を得る。つまり心に隨つて規を矩えずの境地である。こゝに至るには一つの刺戟に對して直ちにその行動が現はれるやうに練習する必要がある。これが習慣形式の過程である。

習慣を固定する際には或る行爲は禁止され、ある行爲は促進されるといふことがある。その時、模倣や意志禁止の如き本能性が貴重な機能を持つ事を忘れてはならない。

さて人間の道德性の發達に際し、マクデューガルは四つの段階があるといつてゐる。卽ち

1、主として行爲の結果として起る快不快の情によつて本能的行爲を加減する時代。

2、多少共系統的に社會的環境によつて行はれる報酬と罰との影響を考へて、本能的衝動の働を加減する時代。

3、社會の毀譽褒貶を豫期して行爲を加減する時代。

4、行爲の理想によつて行爲が統制され、直接社會の毀譽褒貶を度外視して自己の尊しと信ずる行爲をする時代。

勿論第一の場合は最も幼稚な場合で苦痛が兒童の衝動を禁止するのであるが、その最も大いなるものが罰である。罰を恐れてなす躊躇心はやがて自己統制の內的基礎を形造るものであらう。併しまだ罰を意識せぬ頃にも多少道德心の萠芽はある。それは習慣性によるもので、幼兒時代の初期には例へば親の命令に從ふとか、先生の敎へを守ること、衣服を正しく身につける事等が習慣として行はれ、それが道德的判斷の代用として之に背くと不愉快を感じるが、尙良心の働があるのでないから眞の道德心といふ事はできない。これが罰によつて制される道德心となり、社會の制裁を恐れるものとなり、更に一歩進んで精神的の毀譽を慮り、更に一轉して行爲の理想化となるまでには道德心にも幾多の變遷發達がある。そしてその行爲の當然の結果たる苦痛快樂損失報酬は全部兒童の經驗として味はゝしめなければならぬ。賞罰はその重大な標準を示すものであるから決して猥りにしてはならぬ。

道德的觀念はかなり幼少よりあるものであるが最初は單に漠然たる『よいこと』であつて具體的でない。それが道德觀念上の敎育をうけるに從つて具體化し、正直とか勇氣とかいふやうな特殊の觀念となるのである。

兒童が學校內に於ける德目を敎師が選定し、之を兒童の大切と思ふ順序に從つて自由に配列せしめた實驗の結果によれば、勤勉、正直、規律、親切、整頓、禮儀、清潔、共同、友愛の九德目のうち、正直は殆んどに最高位にあり、整頓はすべてに於て最低位にくる。而して共同友愛は級の進むに從つてその位置を高めてくるのである。それはみな修身科敎科書の影響をうけたもので、兒童の道德的判斷の總ては周圍の敎ふる所による事を語つてゐる。

知的敎授について注意すべきは兒童の諸種の生活に順應して之を授くべきで、特に本能的傾向の發達と併行すべきものである。例へばまだ幼い個體本能のみが働く兒童に對して國家道德を說いてもその効果のない事はいふまでもない。敎材の配列も兒童の了解し得る範圍に於て選擇さるべきである。

四　兒童の美的敎育

文明人は美を愛する。美的感情を養ふ事は個人の品性を高める上について缺くべからざる事である。從來の敎育は主として知の敎育で、情の方面特に美的敎育は閑却されてゐた。その結

果として無味乾燥な冷酷な人間を造つたといふ事は爭はれない。つまり知といふものに過度の價値を置いたが爲に、精神乃至感情方面の價値に盲目な人間ができたのである。近來藝術教育が叫ばれてきた所以の者も又こゝにある。然しその教育も兒童の美的感情の發達と沒交渉で行はれて何の効果も擧げる事はできない。

凡そ兒童の美的態度はその教養の多少によつて著しく差を生ずるものである。成人に至つて猶兒童程度の美的態度を持つ人は往々見うけるが、これは畢竟教養の不足を語るもので啓發の如何によつては兒童の審美眼又必ずしも凡ならざるに驚かれるであらう。併しこの教育とても兒童自身が先天的に有する美的態度を土臺として一歩一歩向上させて行かなければならない事は勿論である。

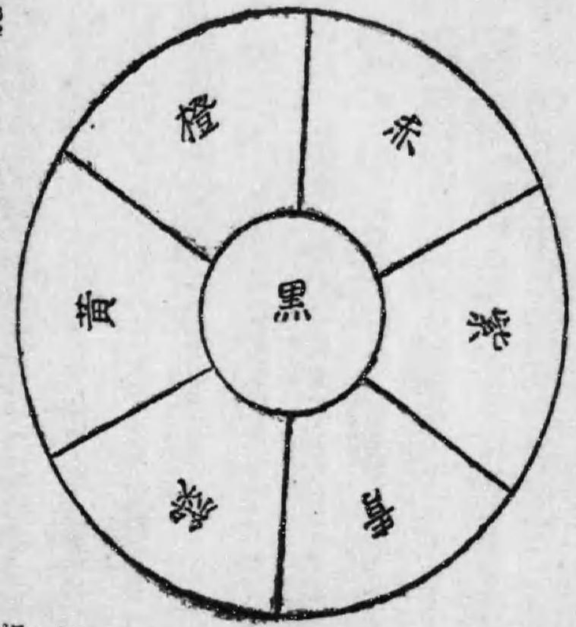
美的教育はいつ頃から初めたらよいか。それは兒童の美的感情の發育程度によるが普通藝術觀賞の態度を養成し初めるのは十歳前後でそれ以前は色彩に對する教育をなすべきである。藝術觀照の態度について本邦の圖畫教育は、あまりに偏し囚はれすぎてゐる。徒らに技巧に重きを置いてその間に溢れる藝術味を掬ましめる事を忘れてゐる。音樂に於てもその通りである。

またこゝに注意すべきは繪畫に於ても音樂に於ても特にその方面に對する材能に乏しい兒童の存在する事である。シエスラー氏の研究によれば千人の兒童中五〇%は音樂的兒童であるが、四〇%の半音樂的兒童、一〇%の非音樂的兒童が存在するといひ、その能力の重大な差は音程の記憶といふ事に存するといふ。繪畫に於ても約一割平均の割でかくの如き兒童が發見される。これらは特別な練習案によつて練習を反覆し、その足らざる點を補つてゆけばある程度までは進歩させる事ができる。

最後に最も必要なことは美的環境をつくるといふことである。常に美しい繪畫や音樂に接するといふ事は、幼少な兒童にはまだその藝術の本當の價値を觀賞する事はできないが、その心的發達に應じて之を味はふ事もでき、且これを導く手段ともなるのである。兒童室の裝飾にその程度に應じた繪畫を藝術的に配置し、兒童の遊戯の伴侶としてこれ又適當の美しい音樂を聽き又は奏せしめる事は兒童を喜ばしめる以上に教育的の大價値を有する事を思ふべきである。

五　兒童と色彩

「兒童は色彩を好む。色彩の感覺は一體に遲く、嬰兒時代には全然色の區別は出來ないが、次第に簡單な原色卽ち赤青黃等を覺えるやうになる。けれどもこれはまだ色を一つの性質として覺えるのではなく、唯々空とか水とか、桃の花とか菜の花とかの色として覺えるので、これが赤とか青とかの抽象的性質はわからないのである。」この教育に資するため小學生に示すべくベスタロッチの色彩圖がある。



「子供は單純な色を好む。勿論これは兩親乃至周圍の影響がよほど力のあるものであるが、特殊の場合の外殆んど例外なく好む色は赤、綠、黃、青である。赤青黃を三原色とし、綠は橙、紫と共に三間色を成してゐるが、概して單色である。兒童の好尙が單純であるといふ事以外に、これには重大な理由がある。

その理由は一は生物學の上から、他は物理學の上から說明する事ができる。改つて言ふまでもなく人の一生は原人發生から今日の發達に至つた徑路をそのまゝ踏襲するものである事は生物學上に明かであるが、兒童時代は宛かも原人から野蠻人の時代に當るのである。今赤色について言へば赤は血の色で身を護る上からも食物を得る上からも最も原人にとつて注意をひく色である。それが丁度この時代の兒童に現はれる。一方光學上からいつても、赤は刺戟の强い色であるから兒童の如く感覺的注意に動かされ易いものは尤もよく感ずるのである。

綠は光學上青と共に眼を刺戟する事なく、最も和かな色である。生物學上からいふも綠は野菜の色で食料として原人の注意をひくに十分であつたのである。綠には又物の未熟をも現はすので發達した人は好まない傾向があるが兒童には好まれ得るのである。

黃は赤にもまさつて刺戟が强い上に原人時代には之も特に注意をひいたものである。その頃の穴居には黃色の土でなければ堀りにくかつたであらう。併しこの色は赤や綠ほど明瞭でない爲め好みもさして一致しては居らぬ。

青は世界の總てを覆ふ空の色であり、地球の大部分を占めてゐる水の色であるから、自然に

之を注意し之を好むのであらう。此の色も兒童の好みは黃と同じく赤や綠ほどの確實性は無い。この色と綠とは屢々混同され、特に子供は混同し易い。この場合は綠をも『アヲ』と稱するのである。以上の諸色は普通の兒童として好みもし區別もし得るやうになるのは幼兒期の半頃以後である。

兒童は一般に濃厚な色を好む。淡泊は洗練された趣味で兒童にはそれまでの敎養が無い。「色彩の區別の練習の爲めにも玩具その他には濃厚な色を使つてやるのが良い。すべて色彩が二色以上集る時にはその配合に注意を要する。これらの事が幼時から一種の素養をなして美的情緒を形成し、長じて審美眼を造る上にも資する處があらう。

色彩の好みは自然に子供の精神の働きと調和を得るやうになつてゐるのは面白い事である。赤と黃とは刺戟性が強くて興奮の色である。日章旗の赤色は戰の時の聯隊旗となつて兵士を刺戟し興奮せしめる如く、子供は元氣なものであるからより多い刺戟興奮を要求して黃や赤の色を喜ぶのである。それ故にまた敎室や寢室等に赤や黃を用ふることの非は言ふ迄もあるまい。これに反して青や綠は沈靜の色である。自然は綠の草木や青色の空や水を與へて人生の平和

を計つてゐる。授業とか敎訓の場合に敎室や部屋の壁やの裝飾を青綠系統の沈靜色にしておく事は兒童の心を落ちつかせる上に大効果がある。人間が自殺をしたり燥狂を起したりする日は晴天の日に少く曇天の折が多い。これには外の理由も種々あらうが、曇天の日に見る灰色の影響による事が多いのである。

これを敎育上に應用するに、陰鬱な不活潑な子供には色々の活動を身體方面に與へると共に赤とか黃とかの興奮色によつて精神を引き立てゝやるべく、又あまりせか〳〵して落ちつきの無い子には青とか綠とかの沈靜色に接してつとめて氣を靜めるやうに計らねばならぬ。又病臥中とか就眠時とかにはやはり沈靜色を用ひて心を平和に保たせなければならぬ。

また色に對する趣味卽ち配合等について著しい傾向は、成人には複雜な混合色のしかも同色乃至類似色の配合に興味を見出すに反し、兒童は單純な明瞭な配合卽ち對比の關係にある補色の配合例へば赤と綠、紫と黃、青と橙の如きものを好む事を注意せねばならぬ。

なほ色の名稱について帝大の松本博士が調査した所によると、最初は黑白の名を記憶し、次に赤青綠に進むといふ事である。

六　兒童と繪畫

幼い兒童の最も好む繪は何か。それは『赤い着物を着た姉ちやん。』である。即ち幼い兒童は派手な色彩を持つた繪畫を好むので、その藝術的價値についての美的判斷をする事はできない。かういふ風に幼年九歲頃までの兒童がとる美的態度と、成人のそれとは大した差がある事が知られる。

まづ兒童の美的態度は繪畫の眞の價値に向はない。風景畫を見た兒童が最初に動かす興味はその美とか藝術とかでなくして、寫實即ち『何處か。』『あそこである。』といふ再認のよろこびである。それが爲め、兒童の知つてゐる所を寫したものが最も喜ばれる。次には『よくできてゐる。』『實物そのまゝだ。』とかいふ評語を以てして、所謂色とか氣分とかに觸れる事はない。成人でも藝術的訓練のない者は往々かゝる語を發するが、それは眞の美術觀賞の態度ではない。理想としてはその作品が藝術家によつていかなる個性的色彩を帶びてゐるかを知る事にある。畢竟藝術とは自然の寫眞ではなくて自然を自由に創造的に變形したもので、その中に作

目身の個性の閃めきがある。その精神を觀取するのが眞の觀賞の目的である。

兒童の美的態度は部分的である。繪畫を見るにも、顏のみを見るとか衣服の模樣のみを見るとかして、全體としての調和とか統一とかに注意を及ぼす事はない。兒童の描いた人物畫が屢頭が大きかつたり手が小さかつたりするのはこの故である。

更に兒童は概念的である。犬の畫ならば犬が居るといふのみで、その犬に對して作者が感じた生命の美を認めない。犬といへば單に尻尾があつて足が四本位に考へてゐる。故にその犬が假に三本足に描かれてあるとすればその點にはよく氣がつくのである。

兒童は繪を見ると同時に自ら描く事を好む。その最初は四才から五才に亘る錯畫期で、まだ運筆が對象と一致せず繪とも字ともつかぬ線を描いて電車だ旗だと喜ぶものである。續いて六才より八才に至る藝術的錯感期には觀念的記號的特徵を發揮して頭から手足の出たものを描く。頭は比較的寫實であるが手足は一本の棒を以てする。既に八才になると次第に寫實的となり、顏を描き衣服を描き、手足の指を描き着物の模樣その他の附屬品を描くものである。藝術的錯感期の兒童には自由に描かしめて運筆と精神的活動とを盛んならしめ、寫實期に入つては

寫生畫を開始して全幅の精神活動を促すべきもので、圖畫教育は近來漸次この方針に改められつゝある。この場合臨畫帖を手本として與へると、實地に導いて寫生をなさしむるとの二つの場合に於ける精神活動及び進歩の差の大なる事はこゝに贅言するまでもあるまい。

七　兒童と音樂

誰しも幼時慈母の懐に緩やかな子守歌の旋律を聞いて恍惚とした經驗の無いものは無からう。兒童が音に對する興味の發達早く、律動的な音を好むといふ事は兒童の音樂的素質を語るものである。

リヒテンベルゲルの研究によれば兒童は六歳から八歳位までは律動及び旋律の感情に對する影響は餘り現はれないが、九歳に至ると著しく發達して、音樂に於ける律動と旋律の感情的効果について區別する事ができるやうになる。そしてこの中律動の効果は旋律の効果にあり、律動の記憶は旋律の記憶に勝る傾向がある。

ヴアレンタインの研究によれば兒童は九歳以前には協和音と不協和音との明瞭な好惡を現はす事ができない。處が九歳に至れば著しく可能となり十二三歳になれば成人と同樣に一音階の中で十二種類の種々の間隔を持つ二音の階調を區別する事ができる。

ランカスターの研究によれば最も音樂を好むのは十五歳であつて、この後一二年は音樂に熱中する傾向があるといつてゐる。

これら諸種の研究を綜合すれば兒童は九歳に達すれば音樂の形式美に對する美的感情が發達して、その美しいものによつて心を喜ばしめる事ができ、十五歳から一二年間はその興味の最も盛んな時であるといふ事になる。本邦兒童を研究しても略同樣であらう。

兒童は聞く一方に歌ひもする。唱歌の時間は好きな學科の一つである。こゝに唱歌の教授について注意すべき事は聲域の發達に關する事である。聲域は幼少の時程狹く、長ずるに從つて廣くなり、兒童期の最終には三オクターヴとなる。但しこれは練習によつてある程度までは廣くし得るものである。左にパウルゼンの調査に係る聲域の表を掲げる。

年齢(女兒)	最高	最低
六歳	d^1	a^1
七歳	c^2	a^1
八歳	d^2	a^1
九歳	e^2	a^1
十歳	f^2	e
十歳以後	a^2	e

(男子は十二歳にてg^2十三歳にて低音gあらはる)

而して變聲期は十三歳乃至十五歳であるから、兒童の歌ふ歌曲も單に旋律や歌詞以外に音程に意を用ひて選擇せられねばならぬ。

耳を養ふ最良の方法は、正しいかつ美しい音樂を數多く聞く事である。この點に於て、特に子供に聞かせる音樂會の催しのよいものが現はれてほしい。近來音樂教育とか童謡民謡等についての運動が盛んになつたが、學校や家庭に於ける音樂教育も從來の軍歌程度に止まらず、兒童の要求に副ふやうなものになつてほしいものである。

八　童話及び兒童讀物の研究

近來書店に現はれる兒童向雜誌及び童話の書物は實に多く、それは偏に兒童の讀書慾の向上を語るものであるが、これを兒童に與へる場合にはやはり相當の注意を要するのである。小學校に入り上級に進むに從つて記憶力も好奇心も相伴つて發達し、知能を實地に應用しようとする勢から、讀書といふ事が著しく好まれてくるのであるが、その刺戟が多く便宜も得易いだけに都會の兒童は田舍の兒童よりも讀書力が早く又進んでもゐる。

まづ一番兒童に歡迎されるのは童話で、これには傳説口碑等の民話と假作談と動植物等を人間化した寓話等を含んでゐる。いづれも兒童の興味を中心にしたものには違ひないが、眞に價値のある童話とはどういふものか。それは三方面から論ずる事ができる。

第一に表現の字句の點で、活動性と情緒に富み、言はうとする思想を正確にかつ正當に現はし、うるほひのある氣品の高いものでなければならぬ。單に話の筋を進めるのみといふやうな書きものは兒童に適しない。

第二に全體の構造に關してはいふまでもなく事件の配列が論理に合つてゐて、兒童に了解され成程と肯かれるものでなければならぬが、話の中心點はどこまでもはつきりさせて、どんなに多くの事件ができてもそれが總て中心點を强めるか、中心點へ集まるかしなくてはならぬ。まとまりのない話を永くだら〳〵と並べるのは禁物である。

第三に童話の內容は兒童心理の要素、卽ち想像とか神秘とか探求活動情緒及び律動等を含めば含む程よいのであるが、その刺戟は强からず弱からず兒童に丁度適應したものがよい。又兒童の生活とぴつたり合つたものでなければならない。これについて近來の創作童話は、その特

徵として情緒のうるほひが多分に出てきた事と、藝術的の匂ひが高くなつた事、今一つには貴族的から庶民的になつた事である。今迄は話の主人公は王子王女と魔法使に限られたものが、次第に人物も一般階級の人々、事件も世界に有り得る事實によるものとなつてゐる。これは確かによい傾向であるが、唯餘り象徵的に走り過ぎて難解になる事と、餘程精神といふ事に徹底的な考へがないと安價な感傷主義に陷り易い事で、これは少年少女小說によく見る例である。

併しいくら理想的な童話でもそれが兒童の年齡と心的發達を無視して與へられたのでは何にもならぬ譯である。兒童の童話に對する趣味は年と共に變化するもので大略四時代に分つ事ができる。童話を好む初めは五六歲から發する。この時代は現實及びリズムを好む時で、所謂昔々お爺さんお婆さんがあつた話を好む。次はやゝ想像が盛になる頃で、人間以外の巨人とか小人とかの歡迎される頃である。第三時代は勇力を讃美したり、ヒロイズムに憧がれる時代でもう所謂お伽話よりも、英雄の傳說、冒險談、紀行などを喜ぶ。武勇傳の愛讀されるのはこの時代で小學校の半頃に當る。小學校の上級から中等學校時代になると、少年少女小說が讀まれてくる。雜誌の濫讀が初まるのもこの頃である。これは單に腕力のヒロイズムでなく、精神的のヒロイズム時

代で少し進んでは異性の織り込まれた話、即ち大人物の通俗小說等に切り込んでくるのである。

さて子供に面白いといふ中には事實子供の爲めにならぬ分子があり得る譯で、こゝに兒童讀物の忽にならぬ影響がひそんでゐる。童話は元來子供のために特に造られたものでなく、文化の低い時代の大人の興味をねらつた話がそのまゝ傳へられた所謂民族傳說が基となつたものである。從つて、童話には未開時代に特有な風習信仰思想感情が多く含まれてゐる。例へば性的關係の現はれたもの、食物の探求に對する爭鬪、生物に對する殘忍性のやうなものはたとへどんなに子供が喜んでも與へてはならぬ。また外國の童話について、その民族性の感心しないものは又は環境の不可解なものは與へる時に改作するか、又は全然與へないやうにするがよい。

童話及び讀物の影響は實に驚くべきで一時忍術等の小型の講談本が兒童間に流行した時、忍術遊びが盛んに行はれ、教育上憂ふべき程度に至つた事がある。讀物の影響所謂カブレルといふ事は兒童には特に甚だしいのであるから、その讀物の性質によく注意すると等しく、その傾向が一方に偏しないやうに心懸けて與へねばならぬ。

新聞雜誌は健全なものを選んで與へるもよいが、一體この種のものは大人の興味をそゝるや

うに大げさに挑發的に書かれてあり、まま事實を誤り傳へる記事があるうへ斷片的で注意を散亂せしめる。併し市井の重要にして無害な出來事は兒童としても知る必要があるから、切抜又は話題として社會教育の一端に資する事を忘れてはならない。

第七章　兒童保護に就て

一　兒童保護と入學試驗

『健全なる精神は健全なる身體に宿る。』とはいかなる場合にも眞理である。虛弱な兒童は精神の發育も遲い。身體の發育が遲れたり疾病に罹つたりしてゐると知識の方面もそれに伴つて遲れる。學校の成績の惡い子供を持つた親は頻りに焦つて鞭うつやうにして勉學させても一向効の見えなかつたものが、偶然ある疾病の手當をして全快したら急に出來がよくなつた例は往々ある。何の病氣によらず營養の減少と衰弱とは精神の上に惡い影響を及ぼすが、特に精神作用の本體である腦神經系統の疾病、又は知識の門戸を妨げる難聽や視力障害、吃音の如きは著しく知能力を低下せしめる事はいふ迄もない。その外に腺樣增殖又は扁桃腺肥大等の病氣や、蟲垂蟲病例へば十二指腸蟲、蛔蟲の如きも能力の低下を引起す事を認められた。

ただに身體の疾病のみならず精神的作業の過度から來る疲勞の毒素も著しく能力の發育を妨げるのみか、身體に故障をさへ起さしむるものである。これに就て近來頓に問題にされつゝあるのが中等學校の入學試驗準備の問題である。

事實入學試驗に對する兒童の恐怖は烈しいもので勢ひ準備勉强も激烈ならざるを得ない。從つて過度の作業の影響による心身の故障は、實に想像に餘りあるもので、普通の學校でも故障發生者が入學生の半數以上に及ぶといふ。特に他の學校の入學試驗に落第したものにその影響が著しいといふのは注意すべき現象である。左に入學者と落第者との故障に就いての最近の調査を表示しよう。

失敗の回數	故障數平均
失敗しないもの	〇、九七
一回失敗したもの	一、二六
二回失敗したもの	一、一六
三回失敗したもの	一、六〇
四回失敗したもの	二、〇〇

故障	全生徒に對する故障者の割合
體重減少	一八・〇%
皮膚白向	一二・九
食慾減退	一七・四
近視眼	一七・四
不眠症	四・五
頭痛	二九・一
憂鬱	七・三
鼻血	五・一
癇癪	一二・九

かく心身の衛生上誠に憂うべき狀態にあるので、理想としては入學試驗の全廢を叫びたいのである。併し現在試驗が行はれてゐる以上は、幾分なりともその弊害から逃れさせる方法を講じなければならぬ。

その第一は父兄自身又は兒童の頭から學校門閥の崇拜心を去つて強いて競爭激甚な公立學校を選ばず、兒童の能力に相應した學校に於て自由な餘裕のある教育をうけさせること。

第二は相當資格ある兒童には試驗勉强を强ひる事をせず、勉强は學校以外では午前中登校前に二時間位を限度とし、疲勞を感ぜぬ程度の娯樂を與へ十時間以上の睡眠をとらせて、十分休養の餘地を置く事である。

なほ入學試驗に限らず普通兒童の能力不足のものは先づ身體方面に故障なきかを調べて之が手當を忘つてはならぬ。その爲には、豫防策として學校で從來行ひ來つた身體檢査は良策である。兒童の作業に就いては、勿論過度とならぬやう注意するのは勿論、疾病を有するもの或は病後日淺きものには作業に相當の手加減を要する。これは疾病によつて知能が減退してゐる所へ過重の作業を課するは二重の弊害があるからで、病氣休學後の兒童の遲れた課業の回復には甚大の注意を要するものである。

二　兒童保護事業

兒童は將來の我であつて、單に一個の人としても家庭の一員としても國民の一人としても、これを尊重し保護すべきは勿論であるが、未開地方の無智な人民は子供を慘酷に取扱つたり、少しも教育しなかつたり、甚だしきは品物のやうに金錢を以て賣買したりする。我國でも古來子供は足手まとひとして餘り尊重されぬのみか邪魔物視されて來た。近來歐米先進諸國に學ぶ所あり、續々兒童保護の各事業が起つてきたのは喜ぶべき事である。

亞米利加の少年裁判を模範として近來日本でもその施設ができたが、これは少年の犯罪は特

に教育上の注意を要するからである。又兒童保護會は歐米諸國に設けられ、繼母等の家人が兒童を虐待するところを見れば之を説諭し、きゝ入れぬ時には之をその筋に訴へたり或は相當の手續をして子供を會の手に引とり育てるなど兒童の保護を計つてゐる。

又不良性を有する子供は感化院へ送り、白痴の類は白痴院へ收容する等の事は眞面目な國家事業として行はれてゐる。實に子供と國家とは重大な關係があるのである。

西洋各國で最も兒童保護思想の進んでゐるものはアングロサクソン族即ち英吉利人とドイツ民族である。故にこれらは進歩し發達して衰亡の色が見えない。野蠻人、即ち、アイヌとかアメリカ・インヂヤンとかの種屬が次第に滅少するのは、勿論文明人の爲に壓迫される事も原因の一つであるが、一に乳兒の死亡率が多い。即ち子供を大切にしないからである。日本は特に氣候の關係もあるが、乳兒の死亡率に於ては東洋一といはれてゐるのは寒心に堪へない事である。佛蘭西では、近來産兒制限が流行し、その揚句歐洲大戰亂で壯丁を多く失つた結果人口が減少し國力の疲弊を來さうとしたので、政府は大いに焦慮し、子福者に免税等の新規則を定めて大いに産兒を奬勵してゐる有樣である。

古來日本は家族主義主長主義の國で、子供は成長の後親を扶養する義務を持つてゐる。その爲、親の方では老後の生活の爲めに子供を育てるやうな觀念が誤り抱かれるので、子供の負擔が意外に重いのである。尤も個人主義に走る西洋流では日本古來の恩愛や、人情の温かみは感じ得られぬかも知れぬが、國民性は國民性としてその美點を保存し、他の美點は他のをも採り折衷して、將來兒童の個人性の發達を期する爲めに、ある點（主として物質方面）は西洋の個人主義を用ひ一方美しい家族の精神をも失はずして、その間十分に兒童を保護教育する事を心掛けねばならぬ。

不良なものを感化して善に導くといふ事は、唯に親のつとめであるのみならず實に社會國家の義務である。我國にも既に不良少年の感化事業は相當に進んだが、形式に流れて、實際十分な內容を持つたものは少い。感化事業は普通の教育と異り、個人〳〵についてその特異性を調べ、その犯罪のよつて來る所を査べて、根本的に且つ個人的に感化を與へねばならぬ。

犯罪兒童は大別して病的のものと環境から來るものとに分つ事ができる。この中、病的のものは精神病者低能者等で、これは醫藥によつて相當の治療を施さねば到底感化の見込はな

い。主として教育の力にまつ事の多いのは環境からくる不良性兒童である。不良な環境に育つたもの即ち盗人の子とか犯罪者の子とかでは、遺傳的に犯罪性を持つてゐるものが多いが、單に貧なる故に犯罪を犯すものがある。それは衣食に窮して止むなく行ふので竊盜罪を犯すものが多いが、これは先づ衣食を十分に給して後靜かに遷善感化を行ふので不良性中でも感化しやすい種類である。遺傳性のもの病的のものとても、根氣よく適當の方法を執ればある程度までは必ず感化し得るもので、かくして正業に就け善良な國民を增す事は國家として最も重大な事業であらう。

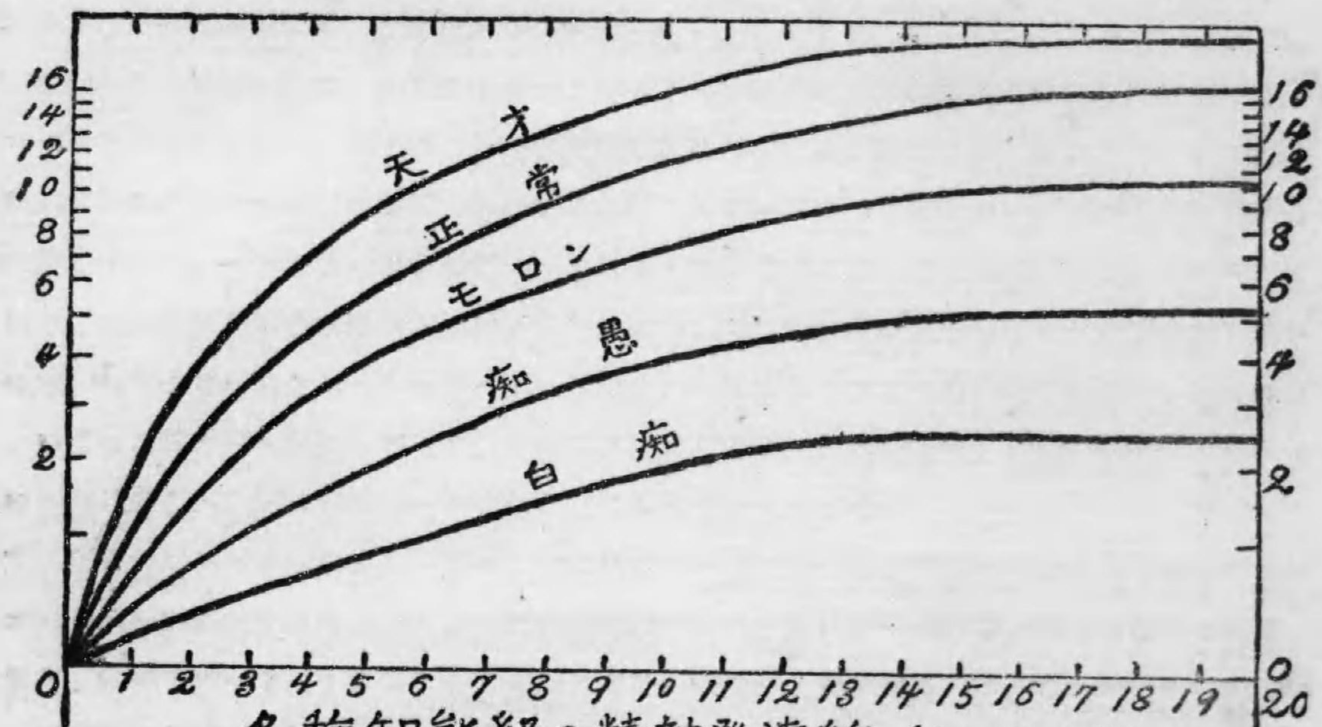
不良兒童は社會の毒物であるが低能兒は社會の廢物であらう。これを拾ひ上げて相當に有用なものにする事は國家經濟の上から見逃す事は出來ない。これが爲めには特別の學校を設け或は特殊學級を區別して個人的に注意深く指導すべきものである。

第八章　特殊學級編成問題

一　特殊學校編成の必要

近頃新しい教育者間に喧しく唱へられ出したのが自由教育、自動教育、自學自習教育、個性教育、創造教育といふやうな諸主義主張である。そして、あるものは兒童の天眞爛漫な性情をどこまでも伸ばすと同時に本來の性質や能力を十分に發揮させよと言ひ、あるものは自發的、能動的に學習するやうに導けと說き、あるものは又各兒童の個性に應じ素質に從ひ各自の長ずる方面に向つて特異な發達をさせたが宜からうと主張してゐる。

これらは誠に尤もな說であるが、一歩退いて考へると、兒童の誰もが優秀な素質を持つてゐるか、もしそれでないとしても少くとも素質がごく低格でないならば前記の主張は正當に違ひない。處が事實素質の程度に極めて不揃ひである。傑出した秀才兒もあらうが又手に負へない低能兒も居る。人並普通と目せられるものにも亦程度の高低は勿論ある筈である。それに單に空想的架空的にのみ素質を考察し實狀を度外視して猥りに新しい施設をするのは、甚だ危險なことゝいはねばならぬ。從來その方面の研究の結果に依れば、素質の優秀者と低格者との精神の發達の度合が如何に、懸隔が甚だしいかといふ事を次に揭げた樣な圖に依つて示してゐる。（橫線の數字は生活年齡、縱線の數字は精神年齡）



各種知能級の精神發達線（ウッドロウ氏）

この通りであるから素質の低いものの精神能力は少くとも普通の素質のものと同一の教育法を施されては十分に伸びる事はできない。又かゝる低格兒中には專門上どれほど自發的に學習できるやうに仕向けても到底望のないものもあり、將來成人して獨立して生活できるかどうかを氣遣はれるやうな者もくある。この事實から考へると、現在どこの學校でもやつてゐるやうに、優秀兒も低格兒もこつちやに一級を造つて、その全部を同一方法で教育する時は、如何によい主義、よい主張も實際に行ひ得ることはむつかしからう。よし又行ひ得たとしても、その効果は極めて薄いのである。例へくでいへば、馬を馴らすには鞭が必要であり、犬を馴らすには棒が必要である。と言つたやうな具合である。

さて、それならば今後の學級編成にはどんな形式をとつたらよいか。從來は同一年度に入學した者、又は同年齢のものを集めて一學級とし、卒業に至るまでそのまゝ少しも變更がないのであつた。それ故十一歳の能力ある優秀兒も十歳兒の級に引留められ、六歳の能力しか持たぬ低格兒が十歳兒の課業に苦しむやうなことが起るのである。將來の學級編制法はこの點に鑑み、優秀兒、劣等兒はこれを別級に分離し、各々その素質能力の略ゝ似通つたものを一團とし

にし、これを學科の等差を適當に割り當てるべきである。

かうして學級編成上に改革が行はれると、從つて教科目、教材配列の上にも大改革があらねばならぬことゝ思ふが、實際的取扱としては細密に各兒童の個性特殊性を知悉して教育する必要があるので、更に各個人の特殊的素質や能力を發見し、その特殊性に應じ又身體の健否、發育の完全不完全等に就て個別的に方案を立てなくてはなるまい。

以上に記した如き學級編成法を無視しては折角の所謂個性教育も自由教育も乃至は創造教育も到底成立實現し得ないのである。この特種學級編成の必要に就ては教育心理學の大家楢崎文學博士が特に力説せられる所である。

二　素質檢査の必要と幼稚園兒の檢査

人人の精神發達の差違は成長する程大きくなるものであるが、その原因は同一の條件の下にある個人の間では全く素質の差違に基づくものである。それ故兒童に對してはなるべく早い時期に素質を檢査して、その程度を知ると同時に適當な指導教育の方案を立てる必要がある。素

質には一般素質と特殊素質とがあるが、多くの場合特に幼兒程一般素質として働くもので、或る特殊の素質のみが獨立して活動することは極めて稀である。われ〳〵は先づ一般素質を檢査して各兒童の素質に應じた教育を施し、各兒童が教育に依つて得る幸福利益をば極大にまで引上げねばならぬ。

現今の幼稚園では多くは滿三歲乃至滿六歲の幼兒を收容し保育してゐるが、此の時期に於て既に著しい素質の差違を示すものである。それ故幼稚園と雖も單に一樣に唱歌遊戲手工恩物等ばかりで保育せらるべきものではないと思ふのである。各個人の素質を知つた上で夫々適當な指導教育をする爲には、是非とも其の素質に感じて學級編制若くは組分けを斷行されねばならぬ。かうして適當に指導されゝば今日の「遊び半分」の幼稚園は更に〳〵その効果を倍加するであらう。

幼稚園生を檢査するには勿論個人檢査法を用ひる。團體檢査法も全然不可能ではないが、幼兒には團體的訓練がなく、又自制や努力が永續しにくいから比較的困難が伴ふのである。

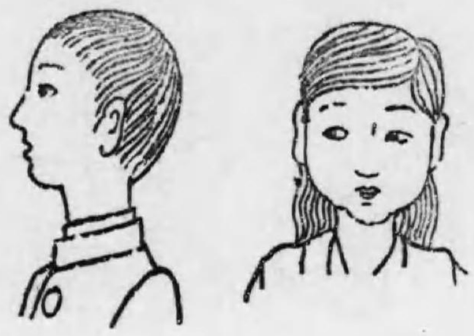
左に高等師範學校教諭楢崎博士が、米國のターマン氏のスタンフォード改訂法を參考し、そ

の材料を總て繪畫に改めて選定された幼稚園兒の素質檢査問題十種の要目を擧げる。

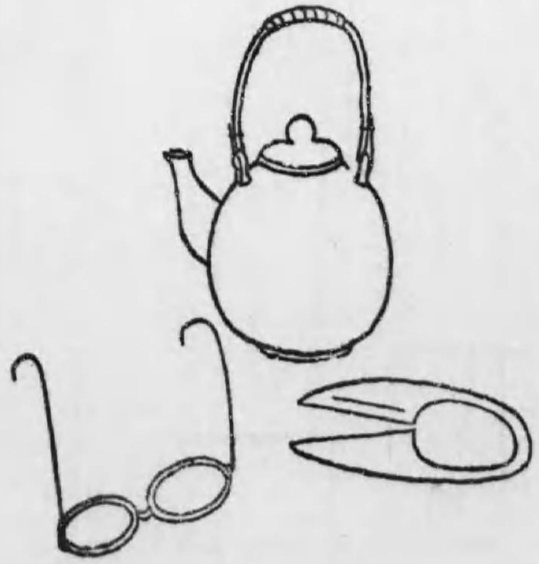
一、身體の諸部分を指す事……三才
二、見聞れた事物の命名……三才
三、了解問題……四才
四、形の區別……四才
五、繪の中の缺所の發見……六才
六、工夫すること……附加
七、圖形繪畫の模寫……附加
八、色彩の名……五才
九、數えること……附加
一〇、命令の實行……五才

幼稚園兒の一般素質檢査問題例

例(一) この男の子の耳はどこにありますか。

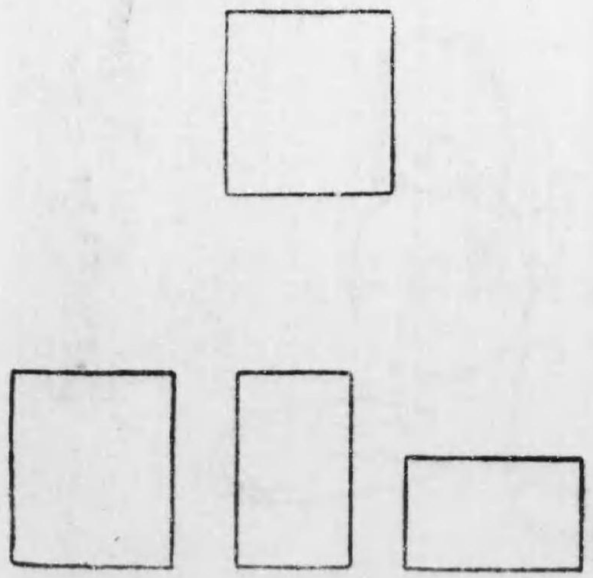


例(二) これは何ですか。



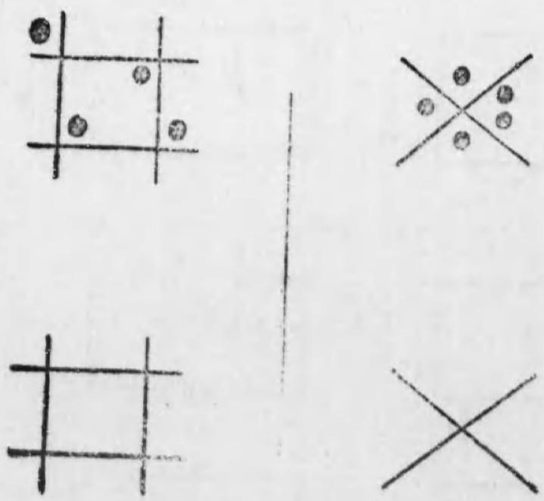
例（三）雨のふる日にはどれを使へばよいか。

例（四）上の形と同じ形のものを下の三つの中から探して下さい。

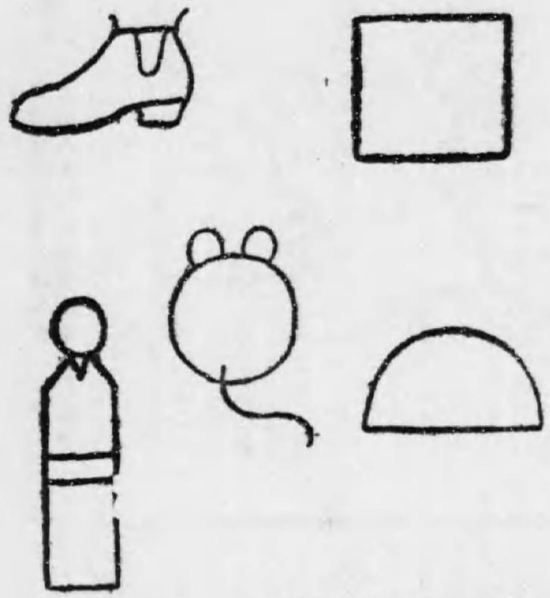


例（五）この兎のどこが足りませんか。この人のなにが足りませんか。

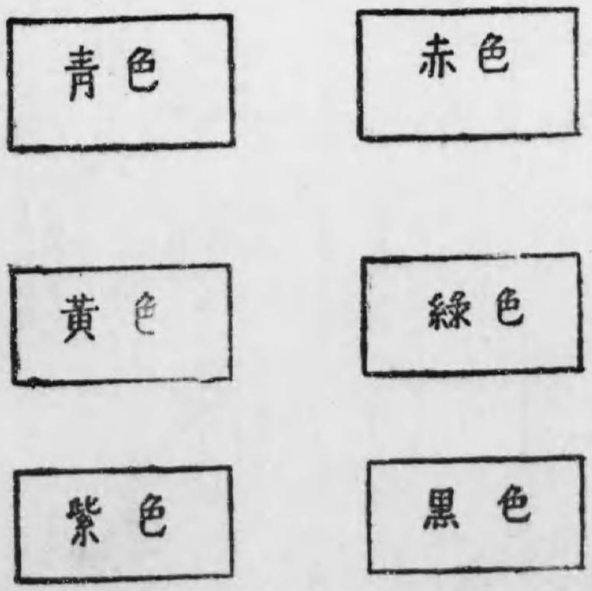
例（六）上の繪の通りに下の繪へ墨汁をつけて下さい。



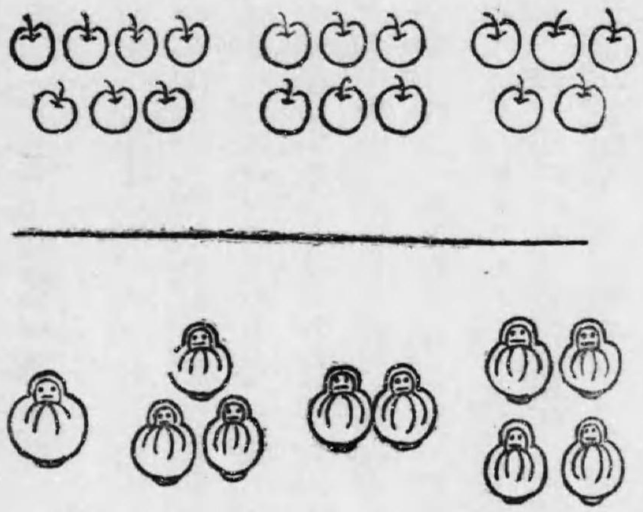
例（七）この絵を見ながらこの謎りかいてごらんなさい。



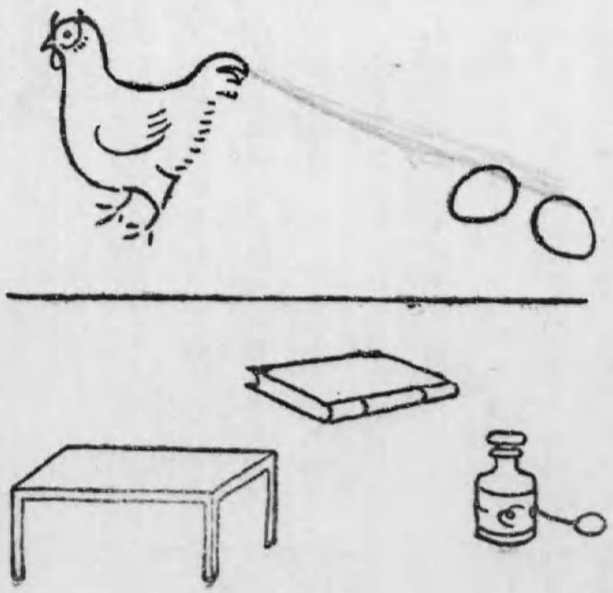
例（八）これは何色ですか。



例（九）リンゴの七つある所はどこですか。ダルマの三つある所はどこですか。



例（一〇）メンドリのお尻から卵へ筋をひいてごらんなさい。これは何するものですか。



三　尋常一學年の一般素質檢査

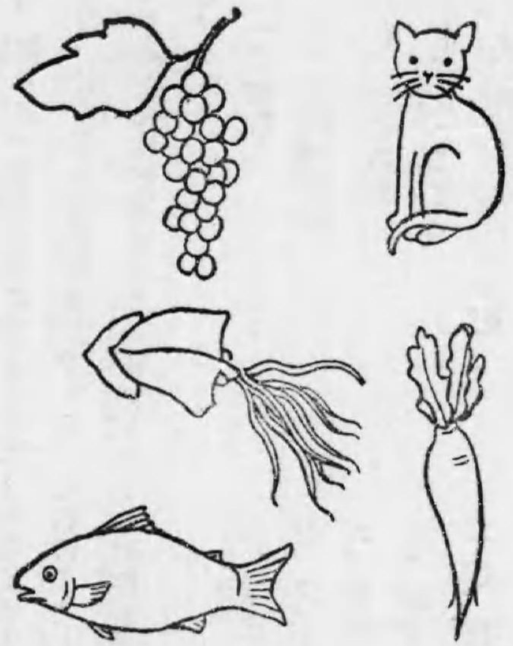
大多數の兒童は就學年齡即ち滿六歲になると從來の家庭生活を離れて全く新しい學校生活に入り多數の仲間と共に一定の知識技能を外から授けられる事になる。これは恐らく兒童の生涯の大轉機の最初の一つであらう。唯極く僅な一部の生徒は既に幼稚園其他の方法によつて幾分知的に發達してゐるものもあるが、大多數はやはり學校教育に對して全く白紙であるといつて良い。從つて新入學兒童が如何な程度まで精神受容力を有するか、いひ換へればどんな程度の知的素質を持つてゐるかは容易に知り難い。ところが實際の場合は就學前の境遇及び素質の差があつてこの白紙の筈の兒童に驚くべき能力の差を生じてゐるのである。而も同時に入學したために、皆一樣にハタ、タコ、コマから初めて行くのであるが、中には二年生の讀本をすらすら讀むものも數人、又反對に二三歲の赤ん坊位の頭しかないものも數人はあらう。これらの兒童にひとしく眞の意味の教育を施したいと思ふならば、どうしても先づ科學的方法を以て素質を檢査し、その結果の如何によつて方案を立てるより外はないのである。

併しその檢査の時季に就ては兒童が略々學校生活に馴れ、幾分でも團體的訓練の出來て來た頃、即ち第一學期の末に當る七月の上旬頃が宜しからうと思ふ。左に掲げるのは同じく稙崎博士の一般素質の團體檢査法である。これは主として米國のエンヂエル氏の第一學年用を參考して取捨したものださうで幼稚園生のよりは稍程度高く、五六歲範圍で略々六歲を標準としてゐる。

一、知識　　二、記憶
三、圖形の辯別　　四、不合理な點の發見
五、形の區別　　六、圖形の工夫考案
七、數へること、　　八、命令の實行
九、繪畫の缺所の發見　　一〇、繪畫の模寫

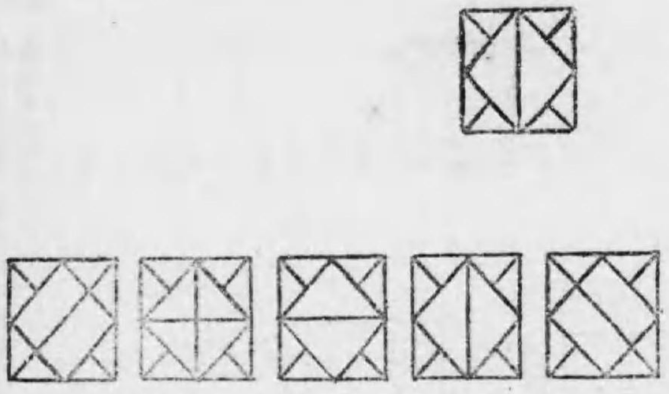
尋常一學年の一般素質檢査問題

例(一) この中で海からとれるものの下に丸をつけなさい。



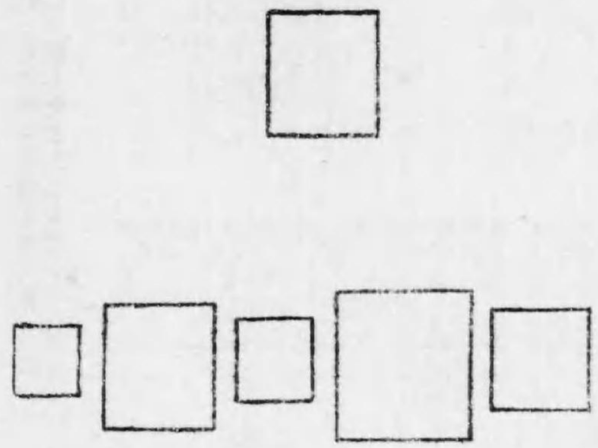
例(二) ホンとクシとサクラに丸をつけなさい。

例(三) 上のホシと同じホシを探してごらんなさい。

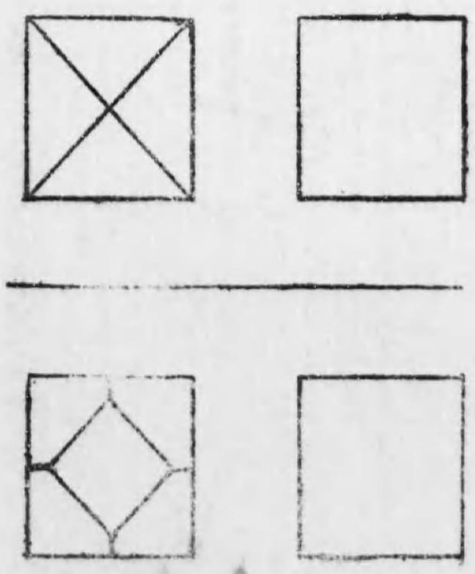


例(四) この絵のどこがまちがつてゐますか。

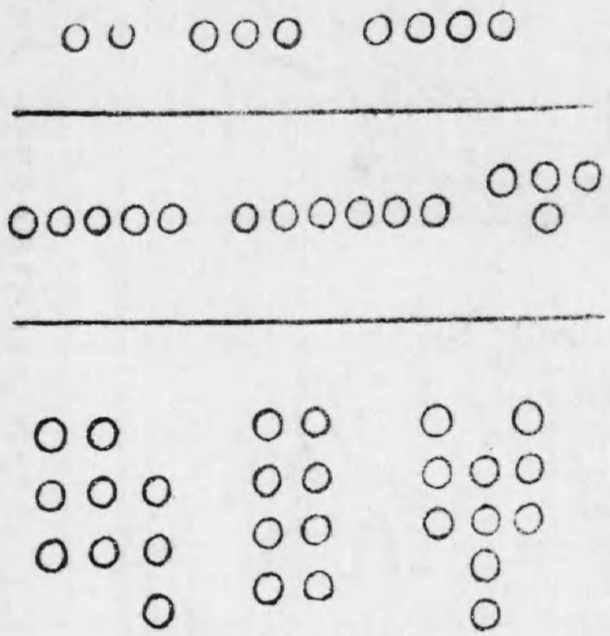
例（五）上のと同じ大きさの四角を探してごらんなさい。



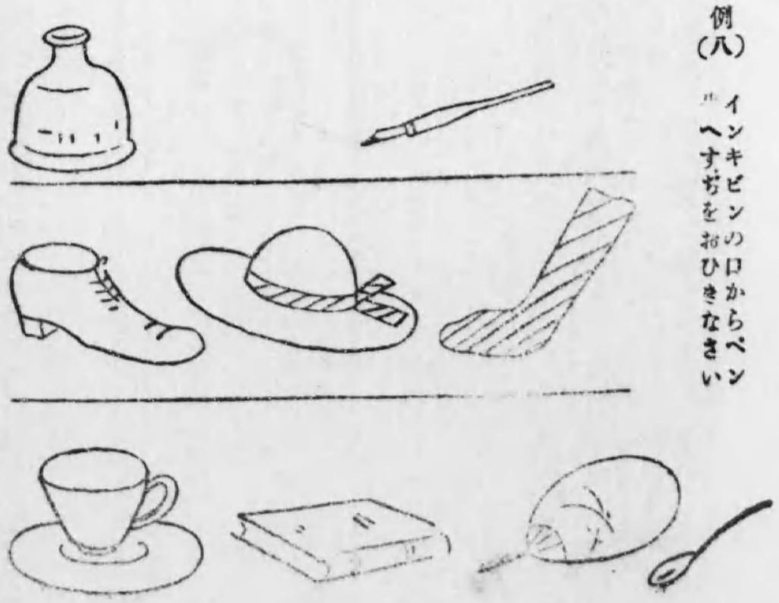
例（六）二つの四角が同じになるやうに右の四角の中へ繪をかいてごらんなさい。



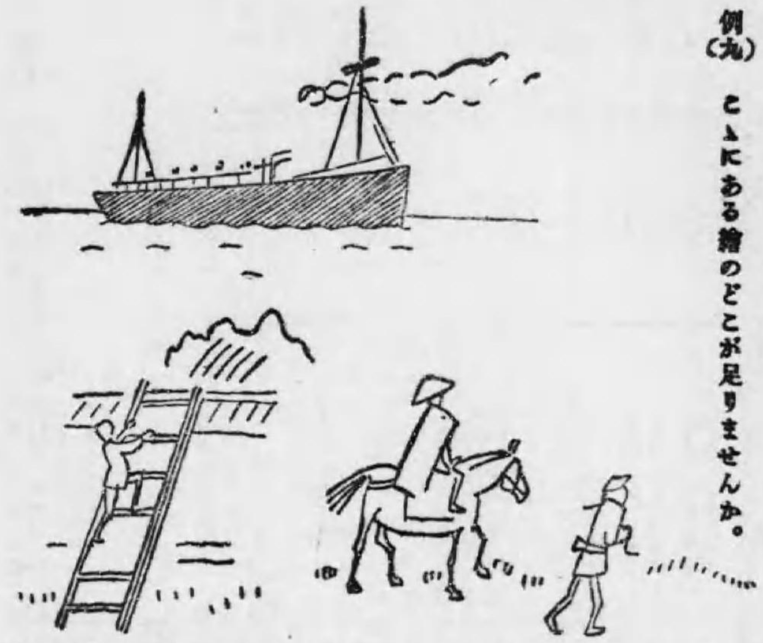
例（七）○の三つあるところ ○の五つあるところ ○の八つあるところはどこですか



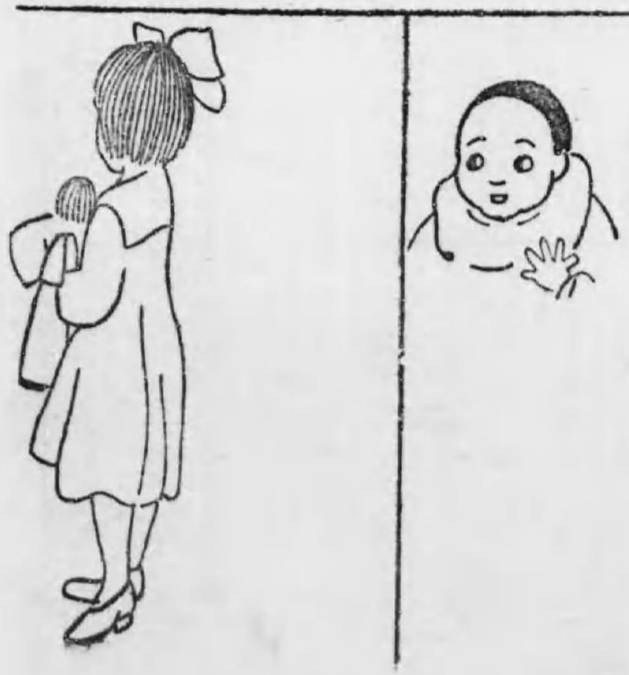
例（八）インキビンの口からペンへすぢをおひきなさい



例(九)　こゝにある繪のどこが足りませんか。



例(一〇)　この繪を見てこの通りかいて下さい。



四　尋常三學年の一般素質檢査

尋常三學年に至ると既に就學後滿二年を經てゐるから、學校教育によつて得た知識も豐富になり、素質の差違も餘程烈しくなつてくる。入學當時にはさほど現れなかつた特異性も、もうこの時期には稍著るしく現れてくる。それで尋常一學年の折に行つた學級編成のまゝでは或は特殊性の點に或は一般素質の上に幾分の變異を生じることは免れないから再びこの時期に一般素質檢査をして、その結果に基いて學級編成のやり直しをするのである。

殊に學科目に就ても著るしく教材が複雜になつてくる。例へば修身には抽象的な德目が甚だしく加はり、讀方では各單語の配列が分割的でなく、かつ後期からは文語も加はり、算術にも應用問題が加つてくる等は前學年に比べて著るしい進歩である。之等の教材を從來通りの一般學級編成法で授ける時にはますゝ教授そのものゝ効果を減じ、且つ兒童の性能を圓骨に成長せしめる上に妨げとなることを免れない。

それ故なるべくこの時期の初めに一般素質檢査をし、學級編成の資とすることが必要である。

然るに從來はこの時期が丁度尋常科在學中の中間に在る爲めに稍等閑視され、教授も又容易なものと一般に解せられてゐる傾きがあるが、これは大いなる誤りで、寧ろ中學の入學準備よりも重要視しなければならぬ程のものと思ふ。

左に檢査すべき諸能力と問題の例を列擧する、

一、注意力

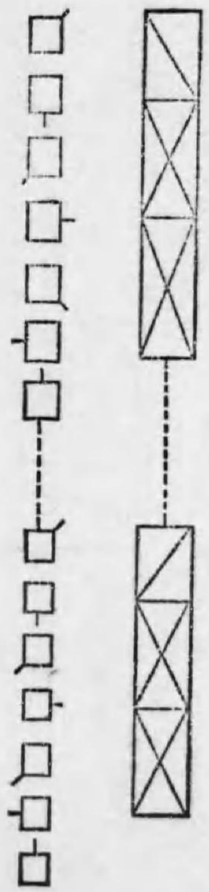
例　こゝにある左右二つのもの（文字、形、數字など）をよくみくらべてもしちがつてゐたら×同じだつたら○をつけなさい。

問題　ヨシ＝チ……ヒシ＝チ

たけにとら……たけにとち

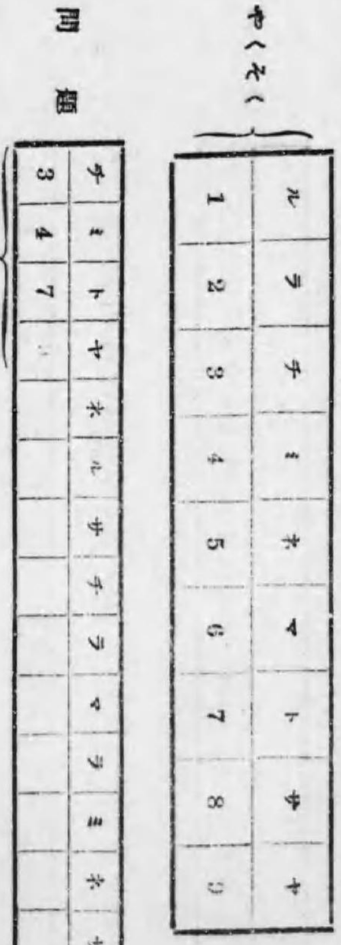
犬大丈夫……犬大太丈夫

6125……6123



二、自然學習力

例(2)　下のやくそくに從ひ、片かなの下にすう字をできるだけ早く書入れよ。



三、器械的記憶

四、關係的記憶

例(3)　次の問題で上の字を見たらすぐ下の字が思ひ出せるやうによく覺えておきなさい。

(一) ノ 甲

問題

チリヤ	ネキロ	ナ モ	ケ ム	町	八	本	白
ロ	日	シ ス	レ ミ	デ ス	ア コ チ ラ		ウズノ

(二) ノ 甲

問題

カ ホ	タ ケ	見	出	米		馬		色				海	
ア カ	カ ゴ	花	車	田	男	賣	主	赤	犬	白	岩	水	波

例(4) 次の字を見て例(3)でおぼえた中から思ひ出してその下にかかれたい。

(一) ノ 乙

問題

八	ケ ム	白	チリヤ	ナ モ	本	ネロキ	町

(二) ノ 乙

問題

出	色	見	カ ホ	海	米	タ ケ	馬

五、反對聯想

例(5) だのことばの反對にあたることばをその右にかかれたい。

1. 東……　2. ちかい……
3. ふとい……　4. 男……
5. 北……　6. つよい……
7. たかい……　8. 左……
9. わるい……　10. 死ぬ……

六、論理的統覺力

例(6) 次にきれ〳〵のことばがあるが、それをどんな順序に〳〵み合せたら一つの正しい文になるか、その順序を數字でかき入れなさい。

問題 1. (　) お寺に
(　) ならの大佛は
(　) あるのです
(　) 東大寺といふ
2. (　) おちてきたのです

（2）もとは
（1）私は
（3）空から
（4）雨の一しづくで

七、論理的明覺力

例(7) 左のものにきつとあるものか、又は一ばん大切なものを右の中から選んで下さい。

問 1. つくえ……（あし、いんき、人、本）
2. 本……（本ばこ、ゑ、文字、お金）
3. 日本……（山、川、天皇、海）
4. 忠義……（戰爭、まごゝろ、軍人、商賣）

八、論理的統覺力

例(8) 次の字をみんなつかつて短い文をかきなさい。

問 1. 夜、星、
2. 犬、風、子供、
3. 春、鳥、山、木、

九、推理力

例題(9)　次のこたへを書かせなさい

1. 一つが一錢五厘のおかしを六つかひ、十錢拂つたら丁度よいか。
2. 次の○のところに當る數をかきなさい。
   （1）　39＝30＋○
   （2）　46－○＝40
3. 下のとひの文をよんで、答の正しい方に――をつけよ。
   （1）　桃の花は赤い、赤い花はみな桃の花ですか。　（はい、いゝえ）
   （2）　よいことをした人はほめられますか。　（はい、いゝえ）
4. 太郎は三郎より小さいが次郎より大きい。それなれば三人の中で誰が一ばん大きいか。
5. 一郎は家を出て北へ行つて右へ折れ又右へ折れて左へ向いた。今一郎はどちらをむいてゐるか。
6. 次のことから空はどんなだと思ふか。
   イ、夏でも富士山のてつぺんに雪がつもつてゐる。
   ロ、ひこうきにのる時は夏でも外套をきる。
7. 何故大きな町に火事が多いかといふことのこたへに、
   イ、太郎「大きな家がたくさんあるから。」

ロ、次郎「わるい人がたくさんあるから。」
ハ、花子「家がつゝいてゐるから。」
ニ、三郎「火をつかふ事が多いのに、用心を怠るから。」
ホ、竹子「火けしがたくさんあるから。」
以上のうちでどの子のことゝが正しいか。

一〇、直觀的推理力

例(10)　次の圖の間をゆきつまらずに抜けるにはどうすればよいか。

以上十種のうち第一第二及第五第六第七は豫め練習してその仕事のやり方をのみこませておかねばならぬ。

五　尋常五學年の一般素質檢査

尋常五學年はもう小學校では上級の部でそろ〳〵卒業後の方針や學校選擇を初めねばならぬ年である。この時に當つて教師や父兄が兒童の素質又は特殊の能力を知つておく事は極めて必要であらう。殊に將來社會に立つて、文化活動の上に貢獻し、文化價値の創造をすべき秀才兒、最優兒を見分けてその教育をすることは、教育活動上、低能兒劣等兒を救濟するよりも、一層重要なことである。勿論低能兒劣等兒の救濟も肝要であるが、それをするにても、やはり先に述べた一般素質檢査と聰明な教師、父兄の判別に俟つより外はない。

それ故先づ遲くとも尋常五學年になれば一般素質檢査を施して兒童の素質を明瞭にし、これに教師の聰明にして且つ愼重な批判を加へて各家庭に通告すると共に、父兄とも協力して夫々適當な學級編成をし、特に優劣の特殊の兒童には學校家庭が歩調を揃へて、個人的にも素質に順應した取扱を初めねばならぬ。かうしてこそ、小學校最後の二ケ年をして有効ならしめることができる。若しかうして尋常五年の初めに兒童の素質が明らかになつて居れば素質低格者が強ひて競爭の激しい優良な中等學校を志願したり只資力があるために兎に角中學校の入學試驗をうけさせようとする無智無謀な、非教育的な企圖を未然に防ぐことも出來る。低格兒で

あるにも拘らず、一時的に無理な準備教育者もしくは强制的な詰込教育をすれば効果のあるもの、學業も進歩するものと考へてゐる父兄教師もしありとすれば愚も亦甚だしいものと言はねばならぬ。この點からしても一般素質檢査の必要はある筈である。左に檢査すべき諸能力とそれに適した問題を掲げる。

一、意識の同時的把握力

例(1)　左の一群の數字の中に2と4があつたら○を、3と6と1とがあつたら×を、7と5と9と8があつたら△を記せ、その他の場合には□をつけよ。

(2と4)　(3と6と1)　(7と5と8と9)

5364120 □　6517083 □　1836502 □

4368752 □　2180579 □　2750941 □

二、器械的記憶

三、關係的記憶

例(2)　上の字を見たらすぐ下の字が思ひ出されるやうによく覺えておけ。

(2)　ノ　甲

ザビル	メスキ	コント	チラミ	ナ　モ	ケ　ム	忠	美	早
箱	筆	雪	戸	サンス	ラミク	ソロム	ドロク	ワラエ

例(3)

(3)　ノ　甲

ツ　キ	木	高		動		服			師				冬				
ソ　ラ	山	ミネ	タダル	生	速	女	價	美	德	教	知	溫	暗	風	氷	炭	老

例(4)　(2)ノ甲でおぼえた中から思ひ出して左の言葉と結びつく語を下にかけ。

(2)　ノ　乙

ケ　ム	チラミ	忠	メスキ	早	ナ　モ	コント	ザビル	美

例(5)　前と同じやうに(3)の中で覺えたのをこの下にかけ。

(3の　乙)

木	ツ	キ	動		高		服			師				各				

四、自然學習力

例(6)　下の約束に從ひ數字の下に符號をできるだけ早く記入せよ。

約束	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	×	∨	=	+	○	／	‖	∧	－	＼

5	9	1	6	4	0	7	3	8	2	5	7	1	9	3	0	8	4
／		∨															

五、論理的明覺力

例(7)　左の各のくものに必ずあるものか最も關係の深いものの下に點をひけ

イ、兎……山、兎ノ子、耳、犬、

ロ、雜誌……小說、印刷、繪、廣告、

ハ、不潔……老人、病人、便所、古着、

ニ、成功……地位、怠惰、勉强、名譽、

ホ、春分……三月三日、八月一日、三月廿一日、九月九日、

六、分類力

例(8)　下の一行の言の中で他のものに比べて或る點から見てひとゝ異つた言がある。その下にすじをひけ。

イ、くらげ、かいめん、かたつむり、いそきんちやく、さんご、

ロ、行く、走る、どぶ、止まる、はねる、

ハ、無上、無二、同等、第一、無比、

ニ、コレラ、ヂフテリヤ、ホーソー、ロクマクエン、トラホーム、

ホ、石炭ガス、コールタール、石灰、コークス、石炭、

ヘ、學習、實驗、遊山、研究、觀察、

ト、貴族院、國會、縣會、帝國議會、衆議院、

チ、仁、智、情、禮、義、

リ、宗教、藝術、道德、教育、營業、

ヌ、君主、天皇、大領統、皇帝、帝王、

七、論理的統覺力

例(9)　次にある文字を皆使つて短文を作れ

イ、コツプ、のむ、水を、の、

ロ、球、先生、泣く、生徒、

ハ、水、光、方向、空氣、

ニ、日本、失敗、跡、五十年、歷史、

八、抽象力

例(10)　(1)の文章をよんでその意味を考へ、次に(2)の文章をよんで兩者互に似た意味のものを見出して、(1)の頭につけた番號を(2)の方へ記入せよ。

(1)　1. 狼は死に臨んでも羊を思ふ。

2. アレキサンダーも一度は兒なりき。

3. 流れぬ水は腐る。

4. 他人の過はよき教師なり。

5. 目は二つ、耳も二つ而して口は一つ。

(2)

(　)彼も人なり、我も人なり。

(　)人の風見て我が風直せ。

(　)雀百まで踊忘れず。

(　)用ひざる鍵は錆を生ず。

(　)　多く見、多く聞き而して少く語れ。

九、推理力

例(11)　次の答をかけ

イ、縱が八寸横が六寸の赤い紙と縱が九寸横が四寸の青い紙とはどちらが幾平方寸大きいか。又、兩方の面積を合せたのに等しい紙を切るに横を七寸にすれば縱は何寸にすればよいか。

ロ、今子供に梨を與へるに5個づゝで4個余つた。6個づゝにしたら2個足りない。子供及び梨の數如何。

ハ、次の文をよく讀んで正しかつたら正、誤つてゐたら誤と書け。

(一)　暴飲暴食をすると病氣になる。彼は病氣になつた。彼は暴飲暴食をしたのだ。

(二)春がくれば雁は北へ歸る。今は春だ雁は北に歸るだらう。

(三)人が働くのはお金が欲しいからである。故にお金のほしくない人は働かない。

(四)人の行は吝嗇であるか奢侈であるかの二つである。彼は吝嗇でない。故に奢侈である。

(五)昔から貴い人も强い人も弱い人も皆死んだ。故に人は皆死すべきものである。

ニ、次の文の答へを「はい」又は「いゝえ」で書け。

(一)人は美食すれば必ず健康になるか。

(二)約束を違へぬ人は信用してよいか。

(三)孝行な人は常に親に從ふ人であるか。

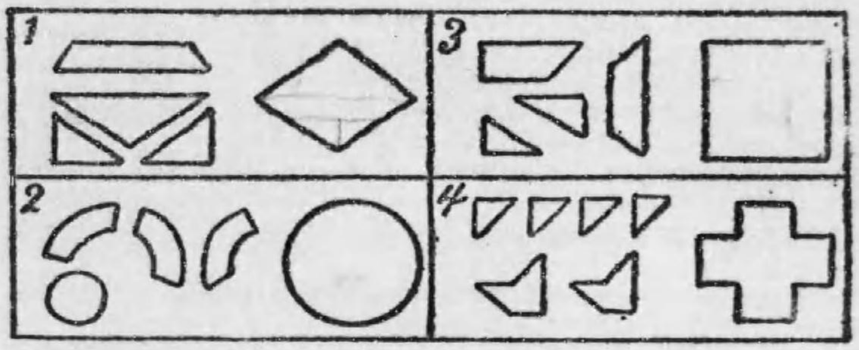
(四)學問をして學者にならない人は研究が嫌なのか。

(五)「鐵は熱してゐるまゝに打て」といふことわざは、機會を利用せよといふことか。

(六)「見守つてゐる鍋は煮立たない」といふ諺は煮立つに長時間を要するといふ意味か。

ホ、彼はもし善人ならば知りながらかゝる過失をしないだらう、又もし彼が智者ならば知らずにかゝる過失をしないだらう。然るに彼は知つてか知らずにか過失を犯してゐる。故に彼は善人でないか智者でないかである。この答は正か誤か。

ヘ、或人が拾圓紙幣で壹圓五拾錢の本を買つた。本屋はおつりがなくて隣の店でかへて貰つてお釣錢を出した。ところが後になつて隣から今のは贋造紙幣だといつてきたので本屋は又隣へ別な十圓を返した。結局本屋はいくら損をしたか。



例(10)　左の圖の左にある數個の形を右の形から造るにはどう切ればよいか。

右のうち一、二、三、四、五、六、八、の諸と檢査は行ふ前に相當の練習を要する。

以上の檢査問題はいづれもほんの一例を擧げたにすぎない。この程度この類似の問題をたくさん出題して、多くの結果より探索するがよい。十分率よりも百分率の方が結果が精密でかつ正確なのは當然のことである。從つてこれに要する時間も少くとも五六時間乃至十時間位の準定で中には四十分乃至五十分位繼續して與らせる問題を含む事が肝要である。併し今學級編

に資する爲めに、差支ない限り時間を短縮すれば、先づ二三時間に十種類を終るを適當とす。問題の數もその點を參酌する必要があらう。

六　檢査判定に關する注意

檢査問題が同じである以上、その結果はいかなる場合でも平等に調査し得る筈であるが事實はこれと異り、大都市の兒童と田舍の兒童と、若くは大體に於て上流又は中流下流の特色を帶びた學校兒童では、その素質の程度も幾分異るために、甲學校に於ては優に屬する者も乙學校では正常若くはそれ以下にならぬとは限らぬ。それ故被驗者の種類の如何によつては先に擧げた問題の程度では或は高きに過ぎ若くは低きに過ぎる事があるかも知れぬ。もしこの一般標準を造らうとすれば、大都市と田舍又は上中下流の略全般を含んだ多數の兒童を檢した結果を見なければならぬ。併し單に學校編成の資料とするにはむしろ各學校内部に於て絶對的のものとして適宜に編成されてよいのである。

更に右の判定を以て直ちに兒童の素質を示すものと速斷するのは危險である。唯比較的合理

的客觀的に素質の程度を示したに過ぎないものでこの檢査の外に次のやうな參考資料が是非とも要るのである。

卽ち平素の學科成績は勿論の事、これに教育あり洞察力に秀でた父兄の觀察、教師の知能評價、歩行及び談話の開始年齡、身體上の缺陷、並に既往症（特に神經系統及び腺に關するもの）父母の社會的地位、職業等は素質判定に有力な資料を與へるものである事を忘れてはならぬ。

七　學級編成の方法と取扱

學級編成法を一般的具體的に記述することは困難であるが、玆に大體の標準を示し他は實際家の考慮に任せよう。

學級編成はその目的によつて各種のものがある。特に優秀兒を教育する優良兒學級秀才兒學級があり、別に劣等兒を誘導しようとする低能兒學級劣等兒學級がある。要はこれら兩極端の兒童を正常兒から切離してその能力に應じた教育をしようといふのが目的である。現行の小學

校教育は正常兒若くはそれより稍程度の高い所を目標として教科教授その他の施設が工夫されてある樣である。故に普通の學校でも學級の編成に當つては兒童の能力好何は十分考慮の中に置かれなければならないのは勿論であるが、具體的にいへば、普通の小學校でも先づ優、正常、劣の三組位には區分して編成し、素質標準並にその他の參考資料によつて人員を配梅し、兒童數學級數の最少な處でも少くとも優劣の二組位にはせねばならぬ。その大體の割合は左の如くである。

1　百人を三組にする場合。

四十人を正常學級とし、三十人宛を優劣兩學級に編入する。事情が許せば五人を正常學級とし、優學級を三十人、劣學級を二十人とする。

2　百五十人を三組にする場合。

六十人を正常學級とし、五十人を優學級、四十人を劣學級とする。

3　百五十人を四組にする場合。

正常學級を四十五人宛の二組とし、三十人宛を優劣兩級へ編入する。

優劣兩級については優級の方が人數の多い方がよい。

以上の通り編成された學級の實際的取扱としては猶注意すべき事がある。折角素質に基く編成をしても、その何れの學級にも同一の教授法、教材、進度で教育する事の不合理はいふ迄もない。更に各兒童は特殊の素質に就ては非常な差があるものであるから、一般素質としては優に屬する者も或る特殊の素質のみに就ては正常に屬する者もある。又一般素質としては劣でも或る特殊の素質に就ては優に屬する者もないとは限らぬ。故に學級編成後、同時に各兒童の特殊の素質をも調査してそれ〴〵に應ずるやうな取扱法を工夫考案しなくてはならない。かくてこそ特殊學級編成の効果を擧げ得るのである。

第九章　病的兒童心理學概要

一　病的兒童心理研究の發達

近頃でこそ精神病院等の施設も出來、之に關する研究も進んで來たが、昔は今日我々がいふ

精神病なるものを病氣と考へて居なかつた。否、今でも一見して分る狂人の外は、俗に變り者だとか、狐つきだとか、不行儀だ、腕白だなどゝといつて憑き者を落すと稱して打つたり叩いたりして苛み、又は無暗に邪魔になるからといつて暗い所へ押し込んだりしてゐる。これらの類は皆立派な精神病に屬するので、本統の病人即ち狂人よりも、これらの病人と健康者の間即ち中間者が意外に世間には多いのである。

ところがこの百年以來歐洲で精神病の研究を初め、漸く人に注意され出したのが最近二十年來のことであるから、日本でこの方面の知識研究に乏しいのも無理はない譯である。從つて、通常成人の精神異常には相當考慮を拂はれて居ても兒童の精神異常といふ事までは中々研究が進んでゐない。併し何病氣でも、殊に精神疾患は初期の中に相當の治療を加へないと所謂病膏肓に入つて變人たるを免れないものであるから、兒童の精神異常即ち病的兒童の心理に就ては十分研究する必要があるのである。

二　病的兒童の分類

さてこの病的兒童は大別してまづ三種に分けることができる。即ち

甲、精神の發育不良なる者、白痴、痴愚等の所謂馬鹿の類

乙、狹い意味の精神病者、所謂狂人の類

丙、性格異常者、所謂變り者、畸人、人並みでないものゝ類

の三つである。

甲の精神發育の足りないものは主に生れたての幼兒から十二三歳までの者に多いので、うす馬鹿、所謂低能兒の大多數は之に屬する。乙の眞の狹義の精神病者といふのは十二三歳までの兒童には極く稀なもので、又よし有つてもその病氣の度が非常に輕い爲め、又は一時性のものが多い爲め、又はその現れ方が大人と違ふ爲めに普通は氣附かずにすんでゐるのである。併し後々になつて病氣を發するものはその素質を持つてゐるから、子供のうちに適當な豫防の手當をする必要がある。丙の性格異常者は氣質の變つたものを指すので、これに屬する拗ね者、變り者は兒童にも少くないのである。しかも之らは精神病的遺傳のあるものに多く又その子孫もこの害に犯され易い。かゝる變質者の殖える事は文明國では止むを得ぬ事であるが國家として

は一大問題で、かのローマ帝國の滅亡も太平の逸樂の結果變質者を多く出したのに因るといはれる位である。兒童變質者に對する豫防策は國家問題としても頗る重要なことであらうと思ふ。

三　智力、感情、意識の狀態

この變質者即ち病的兒童を診斷し治療するのには勿論種々な症狀を觀察してやるのである。精神の働きを通常智、情、意の三つに分けるが病的兒童の症狀はその各方面に異常な徵候が複合して同時に現れるものである。

その徵候を一つ〳〵に數へるならばまづ五官の感覺に異常を呈することである。殊に甚だしいのは皮膚感覺の異常である。俗にひつくるめて觸覺といふが皮膚覺を細別して見ると一、觸覺、二、痛覺、三温覺、四部位覺、五空間覺の種々なものになる。

觸覺は何物かゞ觸つたと感ずることで、病的のものは非常に過敏になつたり非常に鈍くなつたりする。通常は鈍くなる方が多いものである。甚だしいのになると半身が全然感覺がないやうな者もある。

痛覺を檢査するには太い留針で身體諸部をついて見るのである。普通の人間でも身體の部分によつて痛みの程度が違ふのであるが、病的になると甲の部分を刺せば痛みを感ずるが乙の部分を刺せば感じないといふやうな一種特別の鈍さがある。癲癇性のものになると全身に酬つて痛覺の痲痺してゐる、所謂不死身といつた樣なのが多い。

部位覺の檢査法は留針の鈍端の方へ墨をつけてそれで相手の體の諸部分を押すのである。當人には目を閉ぢさせて置きさて今留針のふれた場所を問うて見ると、大抵の場合は先の黑點、即ち刺戟のあつた個所と甚だしく違つた個所を指すものである。即ちこの感覺も非常に鈍いといふ事が判る。

空間覺といふのはコンパスのやうなもので皮膚上の近接した二つの點を刺戟し、之が一點として感ぜられるか、或は二點が區別する事ができないで一點の樣に感ぜられるか、その感覺をいふのであつて、その二點として感ぜられる最少の隔たり、又は一點のやうに感ぜられる最大の隔たりを、空間覺の識閾といふ。この識閾を計るにはコンパスの兩脚を適當に開き、身體のある定まつた部分に當て二點が同時に刺戟されるやうに尖端を輕く押す。勿論相手にはその距

たりをも二點か一點かも知らせずに置いて二點か一點かを問ふのである。そして相手が二點を刺戟したのに一點だと答へたら、その距たりを順次度げて行つてくり返し聞いて見、初めて二點だと感じた時その境の時の距離を物指で計るのである。尤も精密に計るにはグリースペッハ氏智覺計といふ精密な機械を用ひて度々實驗を繰返し之が結果を平均するのである。但し同じ場所を檢するにも二點を同時に刺戟するのと相踵いで刺戟するのとでは結果に甚だしい差を生ずる。相踵いで刺戟した場合には識閾の距たりは遙に小さいのである。同一人でも身體の部位に依て無論識閾の大いさは違ふ。その數例を擧げると

舌の……一糎
指の尖（背面）……二糎
鼻の尖……七糎
こめかみの部……一六糎
前額部……三二糎
手の甲……三〇糎

脊中の中央……七〇糎

病的智覺を有するものは、これが非常に鋭敏であるか若くは遲鈍なのである。

一般に能力の足りぬものは同一の原因から感覺器の發達をも妨げられるために感覺を鈍くするので、低能の者は大抵聽力視力の異常者が多い。又ある病的性格異常の者には案外非常に鋭敏なものがある。例へばヒステリー性の兒童の中には人間の顏が襖の引手位に見えたり、他の人には聞えない位微かな音をきゝつけて眠れなかつたりする。又ある感覺の異常者は、鼻の尖に砂糖をふれると甘く感ずると同時に赤い色が見えるとか、又は一種の音を聞せかると黃色の色が見えるとか、或る感覺と同時に他の感覺が伴つてくるといふ風のがある。これなどは神經性病的の最も甚だしく烈しいものである。

四　幻覺、妄想、錯覺

普通の場合は外界に音を出すもの光を發するものなどあつて、それが刺戟となつて我々に見えたり聞えたりするのであるが、時とすると外界に何の刺戟もないのに音を聞き物を見ること

がある。これを幻覺といふ。健全なものにも夜道をして幽靈を見るとか人魂が飛ぶとかいふ類があるが、病的のものには特にこの傾向が烈しいのである。戰爭とか難船とかで極度に疲勞してゐる時や、強い熱病の爲の幻覺は健康者にもある現象だが、子供は大人よりも一層感じが強いから、幻覺を見る事も多い。晝間怖い芝居を見ると夜暗所でその場面を見るとか僅な熱にも譫言をいふとかの類で、體の弱い神經質の特に異常體質のものに多いのである。

夢は睡眠中に見る幻覺である。子供は特に夢を見る。この現象は既に二三才位から初まるので、夜惡夢におそはれて突然眼覺めて泣いたりする。夜啼きの原因が夢から來る事も往々あるのである。

錯覺といふのは外界の刺戟を誤り感ずる、つまり見誤り聞き誤りである。注意が移り變る場合とか、疲勞した場合、又光線の十分でない場合とかは主として錯覺の原因となるのであるが、病的のものは特にこの場合が多いのを注意せねばならぬ。

五　病的兒童の意識と注意、記憶、及び判斷作用

感覺には殆んど異常がなくとも意識の不明瞭な場合や注意の纏まらぬ場合には事物の了解は不正當になる。知覺につぐ精神の働きは意識である。

注意の散漫になる原因は外界の刺戟の强過ぎる場合もあり、身體に故障があるとか、疲勞興奮の場合とか色々あるが、變質者異常性格者或は神經衰弱性の兒童は多く疲勞し易く、從つて注意も散亂しやすいのである。殊にこの種の兒童は夜中睡眠の不足勝な爲め翌日は一層氣が散りやすい傾向がある。

又、病的に意志の薄弱な人も注意が散亂しやすく、物事を輕卒に判斷し易い。激しい惡戲をする癲癇病患兒、興奮性の痴愚、魯鈍の兒童も氣が移り易い。これら病的兒童は注意の散亂するため、一寸見には小賢しく、敏捷さうに見えるが、その實事物に對する理解が十分に得られないものである。

その外注意の先天的に鈍い者がある。丁度熱病をやんだ時の樣にいかに努力しても注意が集中しないのである。注意と理解、理解と智力とは密接な關係のあるもので、注意が集中しなくては事物の理解は絶對に困難である。

了解の障礙をなすものに意識の溷濁といふことがある。我々が夢も見ずに睡つてゐる時は最も意識の溷濁してゐる時なのである。この時は全然無意識といつてよいが、それから醒めるに從つて溷濁の度を減じ、意識も次第に明瞭になるのである。この醒覺時に病的兒童は異常のあるもので、めさめてあたりの物ははつきりと判つてもまだ手足は十分に動かないといふやうな運動と精神の活動の不一致が多い。又夢を見て覺めてからまだそれを事實だと信じてゐる事がある。寢言寢ぼけ等もこの一種で、つまり精神の一部分のみ恢復して他の全身がまだ睡眠の狀態にある譯である。

寢惚け力の烈しいのを夢中遊行といふ。內的意識が明瞭で、外的意識の全然働かない場合に起るので、夜中家をとび出して夢中で所々方々を歩き廻り、歸宅醒覺後何も覺えて居ないといふ有樣である。ヒステリー性の兒童に多いが、特に癲癇患者には赤い物の幻覺があつて、たとへば赤い大鳥居とか、赤い天狗の顏とかを幻覺し、それに釣られて夢中遊行を起すのである。

知覺し、了解した知識は記憶となつて殘る。併し記憶といふ以上は思ひ出した觀念が確かなものでなければならぬ。不確かな事實、ある事ない事を交ぜて自分の想像力から生み出したものが想像、又ある觀念からある外の觀念をひき出すのが聯想、ある觀念と外の觀念との關係を定める能力を判斷といふ。

一體兒童期に於ては記憶力は次第に增大し、十三四才を最大限として二十五六才の青年後期まで持續し、これから次第に減退してゆくものである。言ふまでもなく低能兒は記憶力の發達は鈍い。のみならず五官のいづれかに缺點のある場合が多い爲め、眼で見ればすぐ覺えるが聞いた事は覺えないとか、口の中で暗誦して見なければ駄目だとかいふ所謂記憶の型が甚だしい。かゝる兒童に對しては一方その發達した機能を見出すと共に、一方にはなるべく一方に偏しないやう綜合的の方法で凡ての感覺に訴へて覺えさせるといふ方針をとる必要がある。

病的兒童の記憶力は薄弱である上に誤謬が多い。しかもそれをそのまゝ事實と信じ切つてゐる爲め、嘘言と思はずに嘘言を吐く場合が往々ある。それが低能兒ヒステリー兒の特徵傾向である。

その他又反對に特殊の記憶といふのがあつて、全體として記憶が良くないながら、ある事物については特殊の記憶能力を働かせ得るものが病的兒童、特に白痴等の中にある。例へば最近

の新聞に見えた月日を示されて直ちに曜日を指摘する少年や、俗に神童といはれて幼少にして大人のやうな大演說をやる少年など、みなこの異常記憶者に過ぎないのである。

この記憶や聯想の誤謬とか薄弱とかいふ事から、兒童の談話中には非常に辻褄が合はぬ事もあり、同一事實を重複して語つたりする事がある。これは一般兒童の通則であつて成長するにつれて秩序立つた話をやるやうになるが、病的兒童就中白痴のやうなものになると、成人の後でも同一の言葉を反覆する事が非常に多いのである。

次に病的兒童には强迫觀念が非常に强く、殆んど制しきれない爲めに知らず〳〵狂人ちみた動作をする。神經的病質の者に殊に多いが、例へば物を勘定して見ようといふ强迫觀念におそはれると、何の仕事をも中途で放擲してこれに懸る。それを病的として自ら制すれば制する程强迫は强く迫り苦しむのである。

知覺の薄弱意識の不正確は延いて概念の不統一を來す。兒童特に病的兒童の概念は具體的方面にはかなりの程度まで進むが抽象的方面には甚だしく遲れる。例へば犬とか猫とか牛とか馬とかは知つて居てもこれを總括して獸といふ概念を造る事はできないといふ調子である。一般

に能力の足りぬものは知つてゐる物の數が少いといふよりはこの概念構成の出來ないものが多いのである。特に、低能の者は他の概念に比して色彩の概念が遲れる。計數の概念も同樣である。これらは素質檢定の材料に用ひらるべきものである。

概念の不確實は續いて判斷の不正確を來す。爲に、外部の者の判斷につりこまれて、それに雷同して終ふ事が多い。これが被影響性といつて低能の者には特に著しいのである。

智力發達の狀態を檢査するにはドモーア氏の現象を試みる。これは目方が同じて大きさに大小ある二個の品を與へて測定せしめると、普通兒は同重といふか或は小さい方を重いといふ。所が低能のものは大きい方を重いといふものである。普通兒でも六才以下のものは大抵大きい方を重いといふから、低能兒の能力は六才以下と測定してよい事になるのである。

なほ低能のものは自己意識が全然ない爲め自分の見たとか考へたとかの明瞭な辨別なくして知らず〳〵嘘言を吐くものが多い。進んでは竊盜、濫費等を平氣で犯すに至るのである。

判斷を誤る場合の一に妄想がある。これは誤解又は空想と異なり、外からどんなに苦心して諫めても一向自分の確信を動かさない計りでなく、却つて反抗的に益ゝ自分の考へを正しいも

のと信じて終ふもので、しかもその考へといふのが他から見れば大した誤覺の場合をいふのである。これは多く十二三才以上の者に來るので、十才以下の妄想は眞の妄想といふべきか例の誤信空想といふべきか判斷しがたく、その上幼兒は判斷が不確實で智識も不熟の爲獨立して自己の妄想を信じ通すといふ事は無い。而してこれは可成の想像力を要する爲め低能者には少く、一時性に極く單純な精神異狀を起した時稀に見るのみである。一般に眞の妄想を多く起すのは眞の意味の精神病者に多く、就中十四五才頃から多く起る早發性痴呆、癲痒性痴呆又は躁鬱病等にこの現象が強い。

妄想の種類は非常に多いが最も普通なものは他の何物かが自己に被害を加へるといふ考へを起す被害妄想と、丈夫でありながら自己が病氣に罹つてゐると考へる心氣妄想又はヒポコンデル妄想がその主なものである。この後者を主とする多數の病をヒポコンデリーといふ。外に妄想の種類は非常に多く、中にも普通なのは誇大妄想（自己をひどく偉い者と考へ高貴の人を妨ねたり故なく金錢を使つたりするもの）追跡妄想（絶えず人につきまとはれてゐると考へるもの）罪業妄想（何の惡事もせずに居て罪を犯したと考へこむもの）關係妄想（世間のすべてが自己に關係あるものゝ如く考へるもの）等種々を認められる。いづれにしてもこの妄想者は對社會的に種々な事を仕出かす恐れがあるのと、幼兒に少く成年者に多いといふ事から意外に累を他に及ぼすものである。

六　兒童の感情異常

一體感情とは如何なる事かといふにつまりその根元は快不快の感にある。之を根本として更に種々複雜な情緒を生ずるのであるが、その發達は無論智力の發育に伴ふもので、智力が複雜となり、殊に抽象的觀念が進むに從つて始めて高尚な情緒も起るのである。故に兒童が幼い程立派な道義的な情緒のあらう筈はなく、生來の我儘を抑制する事も無い。この思ひやりが無いといふ事は、兒童をして殘忍な行爲を敢てせしめるに至るのである。

蜻蛉の羽や脚をむしるとか、蛙の腹に筒を入れて吹くとか、蛇に焔硝を含ませ、火をつけて爆發させるとかいふ類の動物虐待はこの殘忍性の現はれで、普通の兒童のよくやるものであるが、ロムブロゾー氏の說によれば生來性犯罪者は幼時から殘忍獰猛な性質を有し、就中動物を

虐待するとは甚だしいものであると說いてゐる。この性情は幼年期の中頃から末頃に懸けて現れるものであるが、犯罪性を多く有するもの、又はごく低能なものは年長してもこの性が消失しないのである。又子供は特に火いたづらを好む。幼兒のそれは全然興味以外に意味はないが稍〻長じても白痴痴愚の低能者は火いたづらをやる事が多い。これらは火事があると大勢の人が騒いだりして面白いから一つ火事を出してやらうとか、火事があると御馳走酒が貰へるからといふやうな淺墓なのもあり、又復讐の意味で放火するのもあるが、いづれにしても放火犯人は兒童の心事同樣の能力者が多いのである。

一體兒童の感情氣分は大人よりも爽快なのが常である。それ故兒童が別に何の原因もないのに何時も不愉快さうで子供らしい面白さうな感情のない事があれば、何か心身に病的な所が有るのではないかと注意するのが肝要である。子供らしく喜ぶべき原因があるのに一向喜ばないといふ事は非常に注意を要するのである。

又その外一定の時期を定めて四五日位何の原因もなくて不機嫌になり、又さうかと思ふと機嫌のよい時が來る。つまり發作的に機嫌の變るやうなのも一種の病的である。それに屬するも

のはヒステリー症、特に癲癇に甚しく、一ケ月に三四日或は三ケ月に三四日位間渴的發作的に氣むづかしい時が來る。その期間は事〻物〻盡く肝癪の種となり烈しく怒つたり焦つたりするものであるが、これは適當の藥劑を用ひてたやすく治療し得るものであるから、なるべく早期に鑑別してその處置を誤らぬやうにせねばならぬ。

その他俗に云ふ我が儘の中には躾の惡い爲のもあり又神經衰弱のもの、變質者から來るもありヒステリーから來るもある。就中ヒステリー性の我が儘は非常に烈しく、又自分に注意を引きたい自分の思ふ樣にして他人から豪く思はれたいといふやうな虛榮心が强いものであるが、いづれも病的なのであるから教育的の手段は効を奏せぬ事が多い。

別に病的の潔癖といふのがある。例へば自分の手を汚いやうに感じて三十分でも一時間でも繰返し〳〵手ばかり洗つてゐるとか、食器を洗つても洗つても汚いやうに感じて食事もできずに繰返して洗ふ類である。これは病的恐怖病の中の一種に屬するものである。

その他の感情異常としては、病的のものは一般人に比べて物に感じ易く、非常に悲しがるか又は甚だ恐ろしがるとかいふ癖のものがある。又その感情の激しさが或る特種の事情に深くて

他の感情には鈍いのがある。例へば自分の事には中々感じがよくても人の事には鈍感だつたり、或はその反對の場合もある。又時には情緒の敎育が一方に偏したものは、道德等の感じが全く無く、惡事を惡事とも思はずして犯すものもある。俗に末恐ろしい少年などゝいはれるものは多くこれである。これらを新聞紙等に業々しく書き立てるのは病的を賞讃するやうなもので危險なことである。

又白痴のやうに精神能力の缺損したものは感情も亦進まない爲め、いろ〳〵の複雜な情緒には缺けてゐるが、概して怒るといふ感情だけは强いやうである。これが原因ははつきりしないがやはり自己保存即ち一種の正當防衛が必要上自然の結果として最も早く發する爲でもあらうか。憤怒の感情は概して子供には多く現はれるのであるが、これも餘りひどいやんちやのものは單に不良の習慣といふのみでなく中には病的のものもあることを注意せねばならぬ。

又憤怒に限らず悲喜の情でも、その度合が極端に烈しく通常人では何でもない事を百倍も悲しむといふ傾向は病的と見ねばならぬ。又時間に於てもその感情が永く消滅しないもの、即ち一つ事を一日も二日も三日もくよ〳〵悲しんでゐるといふのも病的であるし、その表情が普通

以上に烈しく手足に痙攣を起す如きは病的である。殊にヒステリー性の女は一寸叱言を云はれると三日も四日も泣き、しかも全身に痙攣を起すといふことがある。

七　恐怖症と臆病な子供の取扱

先に意識上から見た强迫觀念の事を記載したが、これと同一根元で現はるゝ時も同一な恐怖症といふのがある。これは理由なく或る物を恐れる症狀で、自分ではそんな恐いものではないと知りつゝ、なほ恐怖の念を制することができない事は强迫觀念と同じである。

一體物を恐れるとは自分を禦るといふ本能が、自己を安寧にするといふ態度をとる時に起る情緒で、これには苦痛を伴ふものである。兒童に於てはこの情緒は比較的早く、遲くとも生後四ケ月目には發するのである。

この恐怖を二種に分類して普通型と異常型とがある。普通型の方は通常兒童に一般的に現れるものであるが異常型の方は恐怖心が病的になつたものを言ふので、これになると却つて個體を損するものである。例へば夜中何物にか驚かされたやうに突然泣き叫び、又は彼方此方を歩

き廻りなどするもの、又は猫や犬を見て蒼白になり恐れて慄ひ上るやうな事もある。恐怖の度は普通以上に強く、それが永續性をもつてゐる。一種恐怖はその對象がなくなるか、又は機會を外すと消滅するものであるが、稀に、特に病的の場合には永く續いて、著るしきは生涯に亘つて殘る事がある。その多くは幼少の時にうけた劇しい恐怖の第一印象が强迫觀念となつて現れる爲である。

故に幼兒を叱るに恐ろしいもの例へば狼とか犬とか、巡査とか人取りとかを以て脅しつけるのは恐怖心を形成させるやうなもので甚だ有害である。神話や童話に化物や怪獸の現れることがあるが、これは大袈裟に話さぬがよい。若し話す必要があれば後に、決して恐るべきでない事、或は實際上にはそんなものは存在せぬことをよく了解せしめねばならぬ。又讀物繪本にもよく恐怖を起させる內容をもつ物があるから、與へる時に注意せねばならぬ。

特に神經病的ヒステリー性の子供は恐怖症に懸り易い。その手當は根本的に病質の治療をすべきは勿論であるが、一方漸を追うて次第に恐怖性を除く事につとめねばならぬ。例へば猫を恐れる兒童に急激に猫をつきつけたりしては驚き怖れ、戰慄して、却つて恐怖の度を增すもの

であるから、初めは玩具の猫位を極めて自然に目擊接觸せしめ、次第に實物に近づかしむる等、この要領で總て徐々に導く方針をとらねばならぬ。無論この間に兒童を嘲りこれに逆ふ態度に出るべきではなく、兒童の自尊心を十分尊重すると共に、意志の鍛練を計るのも必要な事である。かつ健康狀態一般の增進を計るべきは勿論である。

八 性慾、食慾、物慾、運動慾

感情と意志との中間にあるものを性慾といふ。性慾は心理分析上他の意志と別なものではないが、その現れ方が一種固有のもので、卽ち他の有意的行爲は多少の敎育に依つて初めて發育を遂げるのであるが性慾は一定の年齡に達すれば自然と現るゝものである。故に敎育の力とか道義心とかゞ相當に發達すれば性慾は抑制され得るのであるが、兒童、特に病的又は低能者は性慾が他のものに抽んでて、發達するか、又はよくこれを抑制する事ができないのである。

性慾の例として著しいのは色慾中の手淫といふ事である。病的兒童のある者は幼時から烈しく手淫を行ふ事がある。これが爲に、健康を害する事は近來喧しく問題にされてゐるが、その

實手淫の結果病氣になるのでなく、元來の病的の爲めにさうするのが多い。理由はともあれ、三四歲より七八歲の兒童の手淫癖は大いに注意せねばならぬ。又破瓜期になつて、自己の手淫の弊害に就き妄想的に大きな犯罪を犯したやうに訴へるものがある。これは先に記した心氣妄想犯罪妄想に屬するものであるから訓戒によつて將來を戒め妄想を去らしめねばならぬ。

又、色情の早くから發する事は、一の變質徵候としても來り、燥鬱病の一種としても、又痴愚等の興奮時に來る事もある。低能者はかゝる方面に關しては意外に早熟なもので、艶書强迫等の手段を弄する不良少年の多くは變質低格者である。勿論不良少年中には、家庭教育、境遇の惡感化等より發するものも多いには違ひないが純然たる病的のものもある。これを同一の方法によつて遷善感化するのは不合理な事で、本人の名譽を毀損しない程度に於て能く內部の事情を調査し、場合に依ては其の兒童が他人に迷惑を與へぬうち、又惡い習慣を流布させぬうちに、學校へ來る事を禁止するのは自他兩者の爲に必要であると信ずる。

色慾に次いで强烈なものは食慾であるが、病的兒童にはこれ又變則である。普通食慾の減退は精神的に來るものと身體的に來るものとがあるが、精神病者にもその病氣の爲めに食慾の減退

する場合があり、その反對に著しく食慾の亢進するものがある。その結果、俗に云ふむら食ひとなり、一日に五度も六度も飯を食ふとか、不規則に澤山食べたり少くたべたり、絕食したりする。この場合數日乃至數週間絕食してもさほどに感じないのが多い。又今まで好んだ物が嫌ひになつたり嫌つたものを好いたり、時によつて食慾の狀態が非常に違ふものである。

一般に低能者には食物の異常が大變に多い。例へば米とか壁土とか、炭とか、石油とか、とても常人には食べられないものを嗜むのである。眞の精神病者になるとその度が一層烈しくなり、早發性痴呆の患者になると糞便を好んで食べる者さへあるのである。

兒童は一體によく運動する。併し外界の刺戟と身體の運動との間に別に關係がある譯でなく、唯反對的衝動的に運動するので、これは兒童の精神に烈しい運動慾が働いてゐる故である。之が成長して、意志の働きが複雜になるにつれて運動も次第に進步し、意味を帶びてくるものであるが、低能のものはこの進步が鈍く、白痴等は殆んど嬰兒同樣衝動的反對的の運動のみで、意志のある運動をなし得ないのである。

又病的の場合には全然運動慾が缺除するものもある。昏迷といふのは明るみに居ても暗闇に

ねると同然、茫然としてゐるもので、早發性痴呆には往々ある。遲鈍性の白痴又は痴愚等は餘り運動を好まず茫然としてゐながら少しも退屈を感じないのである。その他ある精神病になると無意識に獨語を續けるものもある。

その他の意志異常としては種々な症狀を現はす。例へば、他人のすることを何でも拒むものがある。これを拒絶症といつて、初期の中は唯茫然としてゐる計りであるが、次第に症狀が進むと、話もせず、返事もせず、遂には蒲團を被つて寐て終つて、一生懸命に抵抗するといふ狀態になる。又別に理由なくして不可思議な擧動をなし、又手眞似口眞似をするものがある。

運動の不隨意症狀の一種に舞踏病といふのがある。その中には手足を動かし、舌を出し、痙攣癲痫癇等を發作的に起すものがある。かゝる神經性機能障礙は概して低能者に起り易い。

運動の不隨意は畢竟意志の遲鈍によるのであるが、これを測定すれば略々病的缺陷の有無を計り得る譯である。併しこれは甚だ困難な仕事であつて、何かの命令を下してその實行の敏鈍を目測する外は無い。但し、意志運動を起すに要する時間は計る事ができる。之を意志運動の反應時間の測定といふ。その方法は例へば舌を出せと命令して、その舌を出すまでに要する精

密な時間を計るのである。通常人にこの試驗を施した結果は左の如くである。

視覺刺戟に對しては　〇・一五——〇・二二秒

聽覺刺戟に對しては　〇・一二——〇・一八秒

觸覺刺戟に對しては　〇・〇九——〇・一九秒

これが病的のものは非常に遲く、聽覺刺戟に對して二分乃至三分を要するものがある。

猶これは心理學上には關係はないが、低能者は身體上にも特殊の變化がある。まづロムブローゾーの調査によれば低能者は前頭部が削げて顴骨の出てゐる事が多い。頭の骨も過大過少、或は左右不同のものが多いのである。顎面突起症といつて、口の所のつき出たのは智能の低い野蠻人などによくあるが、低能者にもこれが多い。耳はおほくは耳輪の上部が外方に向けて尖り猿の耳に似て、所謂ツエルコピテクス型耳である。

その他の變化としては、手や足の指が附着して蛙の水掻きのやうになつてゐるもの、副乳といつて乳房が三つも四つもあるもの（但しこれは稀に常人にもある）男女兩性を一身に兼ねたもの等がある。

身體上のみでなく生來的に發音が完全に出來ない病氣、即ち訛辯、瘖辯といふものがある。吃音は横隔膜、聲帶、舌、唇、軟口蓋等の一種の痙攣であつて、之が爲め呼吸の異常と音を形成する機關の痙攣とによつて吃音が生ずるのである。俗に舌足らずといふのはスタムメルン譯して發音不明症ともいふべきもので、或る音に限つて發音のできないものである。これらはやはり病的心理のものに多い。

九　兒童と犯罪

病的傾向を有する變質者は、自然普通の健全者では何等の影響をも受けないやうな些細な刺戟にも容易に支配される爲めに、知らず〳〵の中に犯罪を犯し易いのである。その程度の極めて輕いものは殆んど常人と區別して論ずる事の困難なのもあるが、その中でも重い程度のものは全然普通人と區別すべきもので刑法上の刑罰もこの種類のものには及ばない。即ちこれは普通の人格を有する個人として、その行爲に對する責任を問ふ事ができないのである。從つてこれら危險性の防止法としては、精神病者監置法等の特殊法則があつて寧ろ保護されてゐるが、唯

この程度の甚だしいものと普通人との中間に位するものは、一般に犯罪者として處分されてゐる者の中に少くないのみでなく、世俗的にはそれが單純な不良性惡性の現はれとして見られてゐる事も少くない。この種のものを普通に病的中間者、又は中間者といひ、處遇上多少の相違は有つても、犯罪者としての處遇は逃れ得ないのが多いのである。

病的即ち生來的犯罪者を決定する爲には其の犯罪者が大略如何なる年齢期からその犯罪性を發動したかといふ點にある。勿論犯罪行爲の種類によつては強ち單純な年齢問題を以て早い遲いを決める譯には行かぬのであるが、若し同一犯罪が青年期に初めて犯されたのと、幼年期から犯してゐるのを比較する時には、その犯罪性を先天性と關連して考へる上に一大相違があらねばならぬ。

病的犯罪の原因としては各種の妄想幻覺錯覺等が主體をなし、これに慘忍性を加へて一個の犯罪を形成するのである。尤もその犯罪の種類は病質によつて相異るものであるから、左に一々詳說する。

顚癇は腦神經の機質上の疾病であつて、漸次に健全な人格を破壞し、危險性の行爲に至る事

が甚だ多い。その症狀は痙攣發作に伴ひ、精神が一時的に朦朧狀態となる。しかもその間には强烈な感情、就中憤怒や恐怖が著るしく昂進し、その爲に自ら豫期しなかつた暴行をなす事がある。且つ發作中の動作に就いては殆んど記憶を有しないのが常である。けれどもこの發作は何れも外界の刺戟に對しては比較的無關係に起るものであるから、外部から觀察してその興奮の甚だしい原因の怪しまれるやうな場合も少くない。卽ち何人も怒らせた覺えがないにも拘らず、烈しい怒りを發するやうなものである。概して癲癇病者は頗る我儘で偏狹であるが理解力や思考作用にはさして障害はない。但し癲癇性の低能者にはその程度に相違した理解力や思考作用の障害を見るのが普通である。癲癇の苦悶に伴つた錯亂狀態は時に何等の痙攣發作を伴はない事もあるが錯覺幻覺妄想を有する事多く、患者は往々血や炎や怪物や惡魔の如きものを經驗し、死の苦惱に攻められ、或は憤怒の感情が極度に昂奮し、異狀な刺戟性が起る爲めに、恐るべき暴行を敢てし意外の大罪を犯すことも少くない。殊にこの種の苦悶を去る强烈な刺戟を要求し故らに放火をし、人を傷つけなどする事も少くない。從つて放火や風俗に關する罪や、官吏抵抗罪、殺人罪、傷害罪等を犯す事が多い。

癲癇としての疾病が明かに現はれてゐるものゝ外、さほど著るしい程度のものでなくてしかも癲癇性素質をもつ爲めに特殊な異狀性格を有するものが少くない。かゝる兒童は俗に云ふ氣むづかしやで、我意强く、偏頗で强情で怒り易く疑ひ易く、從つて友達などゝ爭ふ事が多い。甚だしく自己本位な爲めに他人の利害を顧みる餘裕がなく、慘酷な事をして意に介しない。極めて頑迷で思想が偏してゐるからら特殊の迷信に陷り易い。又時々寢呆ける事があつてその程度の高いものは、先に記した夢遊狀態に陷る。併し平素は特殊な痙攣發作もなく丁寧な善良な性質なので寧ろ愛されてゐる事が多い。これが何等かの刺戟に遭ふと突發的に發作を起すもので、例へば忠實な小僧として愛されてゐる少年が、何か些細な叱言をうけた爲に激しい怒りを起して主人を害し、主家に放火して人を驚かす如きはこの種の性格異常者に往々あるのである。

癲癇と精神活動上相似た點があるものにヒステリーがあるが、これは全然別種の疾病である。癲癇と同じく烈しいものは痙攣發作を伴ふが、發作の起つてくる事を自ら豫知し、痙攣中も意識は比較的明瞭に保たれる。稀に朦朧狀態に陷ることもあるが、その經過は比較的安靜で動作も暴行に至るやうな事は少く、時には演劇化されたやうな狀態になる事がある。且つその發作は

外界の刺激によつて誘起され影響される。從つて日常の感情も外の刺戟によつて急に轉じ急に興奮する傾きがある。表面的には極めて快活に見え敏捷に見えるが、刺戟をうけ易い爲に人に對しても事物に對しても、印象する事が少くない。又實際の事實と想像とを混同し自己の記憶を變更する事もある。爲に不良な行爲や事實を模倣し易く、特別な目的もなしに犯罪する事が多い。好奇心や虛榮心が非常に強い爲めに故らな虛飾をなし、稍長じたものはこの點に於て萬引等を働くことがある。その上嫉妬心が強く、甚だしいものになると嫉妬妄想に苦しんで自己や他人を過つ事がある。空想の昂進は實に異常であつて、一方健忘性をも有してゐる爲めに容易に虛言を云はしめ虛僞なことを平氣で行つて他人に迷惑を及ぼす事がある。而して時には病的感動があつて輕微な刺戟、例へば子供の泣き聲とか、時計の音とかによつて甚だしい感動狀態に入り、もしこの病的感動が嫉妬や憤怒である時には何等の思慮も分別もなく亂暴を働くのである。往々苦悶の狀態に入る時は顏色は蒼白となり、呼吸は詰まり、身體は衰へ、昂じては暴力をふるひ、自殺を企て、他人に危害を及ぼさんとするのである。

やゝ症狀の輕度なヒステリー性格者はやはり以上に類似した特徵性格を有してゐるが、平常

は觀察の銳敏と注意周到と理解迅速等の爲め、特別な技能に練達して天才的のものも少くない。唯その異常狀態の發動は、自己の愛護者や親近者などの方面で起り易く、全く他人の中で起る事は稀である。この病の特徵として暗示性に富んでゐる爲め他人の言や自己の考へから身體上に眞に異常があるやうになつたり、疾病を引起したりする事もある。從つて傳染性があり、例へば親密な友達の間又は特殊な團體、殊に上級女生徒間に同一狀態が頻よとして流行的に現れ、この種の異常性格が原因となつて起るやうな犯罪とか不良行爲とかゞ、それらの範圍で流行する事があり勝ちである。要するにこの病は顚癇の慘酷的な暴行的なのに對して、思考的でありし利慾的である事が異つてゐる。

次に低能なものは、それ自身に犯罪性を有する場合は比較的少いが、知能の劣り意志の薄弱な爲に他の者から教唆され、又は他よりの模倣によつて不良行爲をする事がある。この場合には行爲に對する批判力がないだけにかなりの大罪を平氣で遂行する。又突然の感情の興奮の爲めに暴行をなし、又は知らず〳〵の間に虛僞を敢てする。時には性慾方面に變態な發現をなして風俗に關する罪を犯し、又は高等な精神の發達に俟たねば味はゝれないやうな事物に感興を持

たなくて、強烈な粗野な刺戟にのみ異常な興奮と滿足と興味とを經驗する爲に、或る偶然な出來事から殘忍な行爲を敢てし、又は放火等をする事も少くない。中には精神の發達がある局部に限られ、その部分は異常な發達をしてゐるのに、他の方面は頗る低度にある所謂白痴天才などと云ふものがあつて、普通の生活も滿足に出來ないくせに、他人の虛を覗ひ財物を竊取するとには非凡の才能を有するものもある。固より白痴といはれる程度のものは何人もその行爲に對して責任を問ふ事の出來ないのに同意しよう。けれども痴愚や魯鈍といはれる程度のものはまゝ斟酌の下に責任を問はれる事も少くない。殊に上記の如き其の犯罪行爲が頗る用意周到に行はれ、時には普通人よりも寧ろ勝つた手段方法に依つて行はれる事もあるから、他の方面の注意深い觀察が等閑に附せられてゐる場合には、單に惡性の强いものとして取扱はれる事がある。

痴愚の一種で悖德病といふのがある。これは英國の醫師プリツチヤード氏の主唱にかゝるものであるが、智力は相當にありながら道德の力だけが特に足りないものを悖德病といふ。例へば豪放な飄逸な天才肌の人によく見る、頭腦は立派でありながら素行に指難のあるものなどがこの變質者である。文字通り悖德行爲があるのであるが多く私行上のことで法律刑法に觸れる事は少い。

犯罪性を有する不良少年が、全部病的兒童であるとは必ずしも云へないが、その內のある者は病的である事は確かである。これらは恰も爆裂彈のやうに、機會（卽ち外界刺戟）ある毎に犯罪に走らんとしてゐる。これを未然に防ぐは卽ち病的兒童の鑑別保護治療に外ならぬのである。

一〇　病的兒童と遺傳との關係

一體病的兒童といふものはその當人の不攝生不注意によつて生ずるよりも、寧ろその父母の不攝生又は疾病に基づくものが多く、先づ第一原因としては、親達の酒類濫用を擧ぐべきである。その外には黴毒その他種々の疾病特に精神病に基いて白痴、痴愚、又は大酒家、精神異常者を出すものである。

左に表示するは卽ち遺傳と病的兒童との關係を示すものである

百組の夫婦より出づる子供の數とその運命

	全數	夭死	健全	疾病
精神病（躁鬱性痴呆（シゾルチンス））	五九六	一一三	三二六	一五七
酒客（デムメン）	五七〇	二五〇	一〇〇	二二〇
非酒客（ククク）	六一〇	五〇	五〇〇	六〇
鑑別物職工（ブルヌピーヌ）	四八三	二五三	一三七	九三
痴（ニシエフエリア）	三九二	一四三	一三四	五七

各病者の有する父母の疾病數

（但し括弧内の數字は百分比例）

病者／父母		各病者數	卒中	神經病	癲癇	異常氣質	酒客
痴患	男	九		七（七〇〇）	四（四〇〇）	九（九〇〇）	四（四九〇）
	女	六	一（一六八）	五（七九〇）	—	四（六三〇）	三（五六〇）
悖德病	男	八	三（三六九）	三（八四五）	四（四九〇）	一〇（一三〇）	三九（五六七）
定期性精神病	男	一二	八（八八）	一一（一一一）	一一（一一一）	一〇（一一〇）	一八（一六七）
	女	一〇八	七（六五一）	一三（一一〇九）	一一（一六六）	八（七四）	一八（一六四）
嚴氣性痴呆	男	一四	三（一七二）	一〇（八一〇）	一一（一六一）	八（六四）	一八（一三六）
躁鬱性精神病	男	一九三	八（八五）	一〇（一〇七〇）	四（一四八）	七（七四九）	四（四六一〇）
	女	一四	一（一八）	六（一一一〇）	七（一一九）	一（一八）	一七（四六五）
早發性痴呆	男	一九〇	八（八八）	三（三五六）	三（三三）	三（三六）	一四（一三六）
	女	六九	六（八七〇）	七（一〇一三）	一（一四五）	一一（一三九）	二一（三〇四五）
中毒性精神病（アルコール）	男	二六	二七（九四三）	一九（六六五）	三（五三）	二一（七三）	一四（六〇九）

即ち酒客の親には他の精神病又は神經病の親よりも、病的殊に低能及び癲癇の子供が多いのを示してゐる。又幼い中に夭折するのも酒客の子に多いので、これは社會問題としても誠に寒心すべき事であらう。

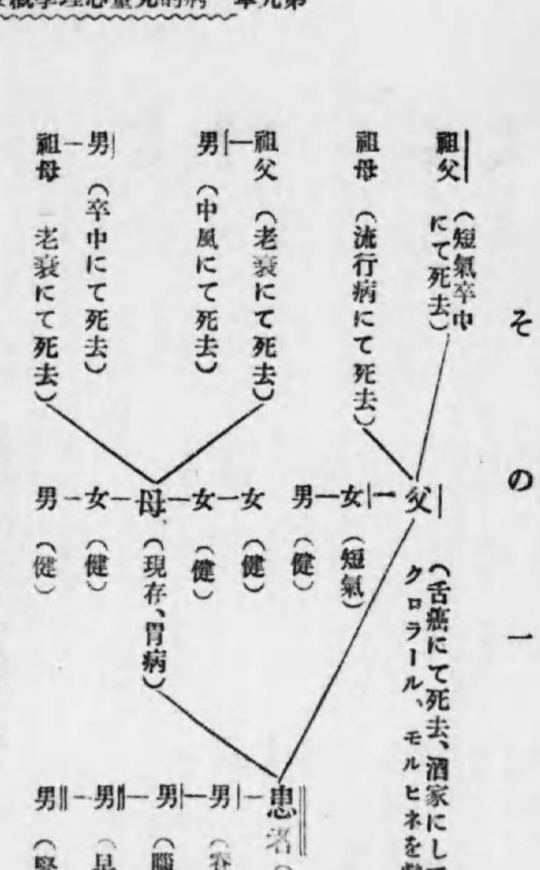
又同じ親から生れた兒の或る者は精神病者であり、ある者は健全である例があるが、之は病氣其者の感傳といふよりは寧ろ病氣に罹り易い素質を享け傳へるのであらうと思はれる場合もある。又子が健全であつて、その子の子即孫に現れるといふ所謂隔世遺傳も往々に見る所である。

又精神病者或は低能者の種類によつて、遺傳がなくとも起るもの、主として遺傳によるもの、遺傳的に病氣の素質を承けても發病させるには何等かの機會を要するもの等に分れる。遺傳の學說は目下學界の問題として研究中に屬するものであるが、殊にかの血族結婚などは絕對的に恐るべきものではなく、唯だ夫婦間に惡い血統、例へば發狂とか酒亂とかの血が交つて居らない事を必要條件とするので、もしかゝる血統のものが血族結婚をする時には、それ以外のものよりも一層害が激しいのだといふ事が最近明かになつた。又男系と女系の何れが遺傳性が多いかといふ事は、最近の學說では男女系とも相等しいといふ事になつてゐる。

低能者も亦遺傳するものであつて、モーレル氏の進行性退化說によれば初め一人の極端な神經質者は、變質者を生み、變質者は更に低能を生む。かく次第に惡化して行つて、低能は多く生殖不能のものであるがもし子を得れば多くは白痴で、この家は永くとも四代で滅ぶるもので

あるといふ。これは必ずしもさうと決つてゐる譯ではないが、全體としてさういふ傾向を示す事は確かである。左に白痴者の遺傳關係を示した二表を掲げる。

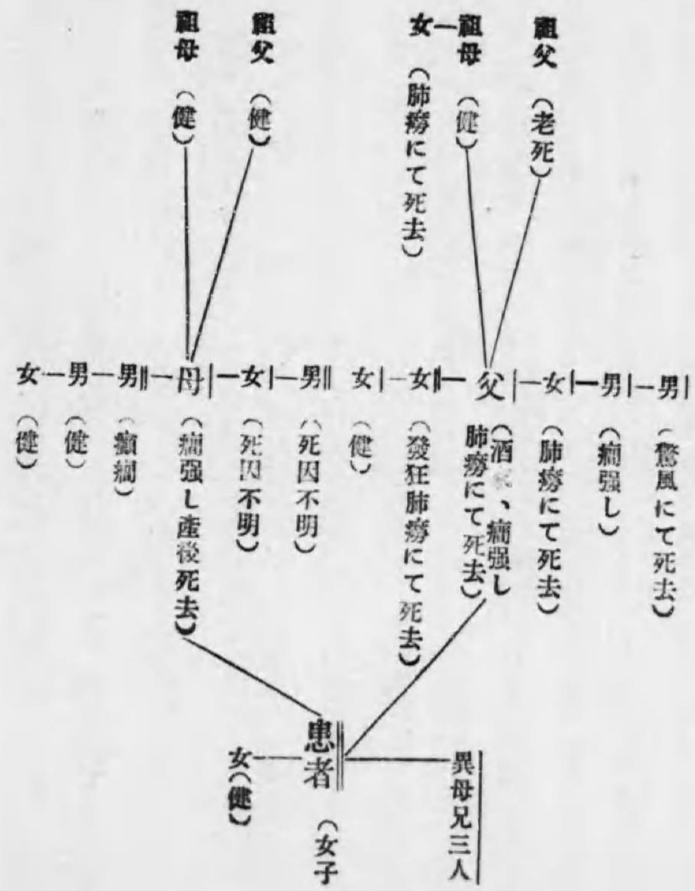
その一



═══は精神病者

└──┘は之に類する者

その二



遺傳の種類は種々で單に發狂者の子に發狂者が出るといふのみでなく、酒亂、變性、神經質等も其の子を精神病にする有害遺傳物である。又同樣の病氣の遺傳は無論多く、痴愚者の親には痴愚者があり、躁鬱病者の子にはやはり躁鬱病者が生れる、精神病者の家には代々精神病者が出で終には白痴を生じて家系の絶滅を來すといふ事も有り得べきである。併し單に遺傳といつても近親の度と病氣の性質とに依つて危險の度も一樣でない。勿論最も危險の多いのは實父母の精神病であるが、祖父母、伯叔父母となると次第にその度を減ずるものである。故にかゝる血統中の健全者が他の良い血統のものと結婚すれば健全なる子を得る事も出來る道理である。併し普通氣質の惡い悖德者、癲癇、ヒステリー等の重い者は往々にして隔世的に後々までも害毒を殘し子孫の變質を來すものであるから、配遇者の選擇には等しく精神異常であつても、血統をひかぬ者、つまり變質的のものでさへなければさして恐れる事はないのである。故に英國米國の一部では犯罪者及び精神病者の到底治らぬ性質の者は法律を以て結婚を差し止めてゐる。かゝる制度は當人の上には勿論國家社會政策としても必要な事であらう。

低能又は精神病となるには單に遺傳のみが原因といふ事は出來ない。例へば出産前に母體內

で病氣をしたのもあれば、分娩時又は産後の疾病殊に熱病等の爲めに腦病をひき起し痴呆となるものもある。又遺傳的に持つてゐる病氣が七八歳に至つて始めて現れるものもあり、その頃に熱病等の爲めに腦を冒され、又精神病等に罹るものもある。

精神病中ヒステリーその他二三の變質病は精神的原因から來るものである爲に、比較的發病する年齢が遲いがその他は新陳代謝又は内分泌の異常殊に中毒作用に原因するものが大部分を占めてゐる。卽ち物質的變化であるが、主として腦の變態に歸する。白痴に於ける腦疾患の著しい物を擧げると小顱症（腦の小さいもの）軟腦膜炎（腦を覆ふ腦軟膜と腦質との密着固定したもの）腦水腫（腦膜と腦質の間、又は大腦内部の腦室に水の溜つたもの）等で最も多いのが腦水腫である。その外稀には穿孔腦（大腦の表面に摺鉢のやうな形に實質の缺損ができるもの）といふのもある。而してこの疾患の原因は兩親の黴毒から腦水腫を起す場合が多い。又稚い時に腦の血管を痛ふと、その爲め血液の營養を缺き腦の發育を止める事もあるし、或は他の傳染病乃至黴菌の爲めに炎衝を起したのが因になる事もある。罪人悖德者の死後これを解剖すると、生前何ら病的傾向を見なかつたにも拘らず腦に變質を起してゐるといふ場合が少くないのである。

狹義の精神病者のうち、痲痺性痴呆の腦は無色透明なるべき軟腦膜が乳色又は黄白色を呈する。腦質血管にも炎衝性病的變化を起す。早發性痴呆は多少程度の低い病的變化で且つ炎衝性の所は少しも無い。癲癇や腦打撲で白痴になつたもの、熱病の爲の精神異常や、腦膜炎所謂驚風などの多くには解剖的變化が多少とも見出せるのであるが、ヒステリーその他の變質的病症及び躁鬱病には何等の解剖的異常の無いものである。

第十章　病的兒童の處置

病的兒童の殆んど全部は醫藥によつて救ふ見込みのないものであるが、さりとてこれをそのまゝに放置して置く事は人道上、又社會風教上忍びない處なので、輕い一時性のものは無論醫藥の力で癒すし、白痴痴愚又生來性の變質者の如き一生惡い宿命を負うて生れて來た者にも出來得る丈けの慰安と活路とを與へるやうに力を致し、暗澹たる劫運の下から救ひ出すのが同胞としての尊い務であらう。

さてこの爲の設備についてはまづ白痴を收容する白痴院がある。精神病も白痴の程度になると重症で、種々の痙攣を起し、寢小便をするとか、癲癇があるとか、その他一時性の精神異常や興奮の狀態を呈することが往々ある爲め、白痴院には是非とも精神病專門の醫師の監督の下に到底治療の見込みの無い白痴を集めて、他の迫害を避けつとめて平靜な日を送らしむるのである。

これより稍程度の輕い痴愚の方は精神的療法即ち教育によつて導き得るのである。併し教育といつても元來能力皆無の連中の事であるから、學問を仕込といふ事は何等の効果も無い。寧ろ日常の起居動作の作法から初めるのである。又教授の方法も元來抽象的概念は無いのであるから、なるべく實物を以て直觀的教授の必要がある。しかも理解力に乏しいといふ點を念頭に置いて、あくまでも親切丁寧に反覆して七くどく教へねばならぬ。その外には簡短な職業を覺えさせて、將來自活の幾分の助けが出來るやうに道を拓いてやる事も肝要である。實際の白痴に至つては教育するといふよりはたゞこれをお傅りしてやるに過ぎず、その効果も精々自分の身始末ができるやうになれば十分と思はねばならぬ。

痴愚程度のものを教育するに、低能者は普通兒童とは性格能力共に異るのであるから、普通の兒童と歩調を合せて同一方向に進む事は困難でもあり、又弊害を自他に及ぼす點も少くないので、特別教育機關を必要とする。補助學校はこの目的に副ふべきものであるが、一方これには種々な批難點があつて、目下研究中に屬するのである。

この批難の一は、低能兒を區別して教育する事はその兒童の自尊心を傷つける恐れがあり、父兄の感情その他も區別には贊成すまいし、時には普通兒童と一緒に教育した方が知らず〳〵の中に良い感化を受ける事もあつて、一概には云へないのである。殊に診斷の間違から病的と認めたものが病的でなかつたり、教師の偏頗から不出來な人好きのしない兒童を低能として放逐する弊も起るので可成り學界の問題となつてゐるのであるが、種々研究の結果多少その弊害を避ける方策も立ち、特殊教育の必要も認められて引き續き各國に設置を見るに至つたのである。

獨逸のブラウンシュワイグにある補助學校は一八八一年五月の創設でこの種の施設の草分といふべきで、當初は痴愚の外白痴變質者盲人瘖啞聾啞といふものまで混在した爲め專門的教育に大いに困難を感じたが、次第に異分子も除かれ現在ではこの種學校の模範となつて居るも

のである。その元動たる校長キールホルン氏の作製した教授時間割を左に掲出する。

科目	第五級	第四級	第三級	第二級	第一級
宗教	半時宛六回	半時宛六回			
國語（言語文字）	三	三	三	三	三
算術	八	八	八	八	八
直觀教授（鄕土課）	三	四	四	四	四
體操	四	四	三	三	三
手工	二	二	二	二	二
唱歌	二	四	四	四	四
圖畫（男生）	一	一	二	二	二
計 男生	一八	二二	二七	二七	二七
計 女生		二四	二六	二六	二六
合 男生	二二	二四	二七	二七	二七
合 女生	二二	二四	二六	二六	二六

參考。この中直觀教授とあるのは例の實物示教の事でこの時間は特に重きを置かれてゐる。

第五級第四級では教師の取計らひで毎日十分間づゝの唱歌及び圖畫を課してもよい。猶低能者には特別言語障害の多いものであるから、特に吃音者には毎週四時間發音矯正の時間を設け、スタンメルン（發音不明症、訛癖、痙癖）のものには國語の時間に特に注意するやうに計らつてゐる。一體發音障害特に吃音は神經過敏の者に多いので練習と同時に神經の醫學的治療をも施すことになつてゐる。而して若し治らぬものは醫者の手に依つて口腔の異狀他の疾病の有無を檢査するのである。日本でも東京師範學校の低能兒教場ではこの學校にならつて着々効果を擧げ、吃音者には別に伊澤修二氏の樂石社があつて矯正に從事してゐるが、この事たるや實に難中の難事で、中々一朝一夕に眼に見えた結果を現はす事はむつかしいのである。

さてこのブラウンシュワイグの補助善校へ入るものゝ資格は、無論普通兒童と同一の步調を保つて行けぬもののみで、就中全くの低能者に限るのである。故に家の都合が惡い爲め躾けを忘つた者、長期間の病氣の爲め學業の遲れた者、單に低能である者等を有資格者とし、癇癪發作の盛なものとか、聾盲その他五官器の發達の惡いものとか、白痴重症の痴愚とかは入學を拒絕

して、別に白痴院盲唖學校等の特種機關に移し入れるのである。從つて八歳就學の普通小學校に入れ、能力の足りぬため別に外の理由なく二三回も續けて落第するものは低能と認めてこの學校へ收容する。又何かの都合で學齢より早くから就學したいといふ普通兒童に對して一先づ補助學校へ入れる事もあるが、この場合何等の差し障りを生じないといふ事である。

獨逸は一體に教育感化事業が進んでゐるが、左にマンハイムの補助學校に於ける級編成の大體を表示する。

年級名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
八年		(卒)	(補)	(補)	(白)			(卒)	(分)	(分)			
	8	7				8	8	7	6	5	8	8	
七年		(分)	(補)	(補)	白)				(分)	(復)	7/(分)		(卒)
	7	6				7	7	6	5	4	6	7	7
六年		(分)	(補)	(補)	(白)				(復)	(復)	(分)		
	6	5				6	6	5	4	3	5	6	6
五年		(復)	(補)	(補)	(白)				(復)	(復)	(復)	5/(復)	
	5	4				5	5	4	3	2	4	4	5
四年		(復)	(補)	(補)	(白)				(復)		(復)	(復)	
	4	3				4	4	3	2	2	2	3	4
三年		(復)	(補)	(補)	(白)		3/(復)			(復)	(復)	(復)	
	3	2				3	2	2	2	1	2	2	3
二年		(復)	(復)	(補)	(補)	2/(復)	(復)		(復)		(復)	(復)	
	2	1				1	1	1	1	1	1	1	2
一年									(猶)				
	1	1	1	1	1		1	(猶)	1		1	1	1

A	普通兒童の進級狀態	……8	學級名
		無符號	普通級
		(卒)	卒業級
		(復)	復習級
		(分)	分離級
		(補)	補助學級
		(白)	白痴院
		(猶)	入學猶豫

說明

B 一年級を終つて二年へ入る能力なきもので、一年復習級をすませ、次第に昇級して普通兒童の七年生と合併した卒業級にして卒業する者、

C 一年の復習級後猶見込みなく補助學校に編入するもの、

D 一年普通學校に居て復習を繰返す迄もなく直ちに補助學級に入るもの、

E 補助學級にも堪へずして白痴院に入れるもの、

F 特殊教育を一二年にして普通兒童と同程度になれば普通級へ戻すもの、

G 智慧づき遲く一年入學を猶豫する者、

H 以上の表は特に周密な設備を以て初めて成さるゝもので、通常の場合は最初の一年級二年級のみを普通學級で教授し、その上能力不足と認めるものは校長、視學官、校醫の證明を得、且つ父兄の承認を經て、補助學校へ送るものである。獨逸では大抵男女生を一緒に混合して授業し唯特別な二三課目のみを別々に授けてゐる。但しこれらの制度を直に我國に採り用ひる事は種々の事情からして困難であらうが、十分參考とは成し得るものである。

補助學校では入學當初暫くの間は傳染病の有無、遺傳的疾病の存否並びに氣質の異常等を觀

察するために學課の授業は施さずに、擧動等に注意する。入校後四週間から六週間の間に教員と學校醫と兩方で兒童の身體精神全體の狀況をよくとり調べて檢査表を作り、後日の參考に學校へ殘して置き、其後入校後三年目或は五年目に又種々の事項を書き込み、その他經歷等を記しておくのである。この檢査表は學校により種々な方式を採用してゐるが例のブラウンシュワイグの學校の檢査表を參考として掲出しよう。之が特徵としては餘り面倒でなくて實行し易い事である。

ブラウンシュワイグの檢査表

一、兩親祖父母其の他近親の疾病其他の事項

二、兄弟の數、死せしものあらばその死因、現存せるものはその身體並びに精神の健康狀態

三、その兒童の姙娠中又は分娩時に於ける事項

四、入學當時迄の身體、智力、並びに德力の發達狀態、現に存在する缺陷、及び惡癖

五、入學數ケ月前に現れたる身體並びに精神の異常狀態

六、入學中の兒童の發育狀態

七、家庭の狀況

八、卒業の際に於ける兒童の發達狀態

九、卒業後に於ける狀況

この卒業後の狀況を調べる事は非常に必要な事で、之が不分明な時は眞當の結果を調べ出す事は出來ない。恰も退院後の患者の容態の如きものである。

猶ほ獨逸が補助教育會議を設立し、各補助學校の職員が決議に依つて低能兒教育の方針として制定した處を紹介しようと思ふ。

低能兒は將來唯々日々の生活に堪へ得る程度の職業に從事し得れば良いので、それ以上は得て望むべからざる事である。從つて之に授ける知識も單に主要の數課目に留め、而も之を確實に教へるやうにせねばならぬ。然して直觀的教授を必要とする性質上、教材もなるたけ單純なものを豐富に用意せねばならぬ。多くを教へる必要はないが、必要なものを脱漏してはならぬ爲、この教材は廣く諸方面に亘つて實物を要するのである。蓋し實物指示は最も有効な教授法である。次に家庭でする仕事を成るべく少くして大抵の事は學校で修得するやうにする。從つて學

校の方でも種々の智識を注入するよりは手藝や世故の常識、人間の道を先づ習得せしめるやうに仕向けねばならぬ。普通學校のやうに數時間の授業は徒らに倦怠し、過重の負擔を感ぜしめるのみであるから、晝間は手工其の他の勞働をさせ、その間に少しづゝ教へる方針をとるのである。殊に低能者は疲勞し易いものであるから、課業は變化を多くし、その時間を短くして授業を受くるに苦痛の念を起させないやうに勉めねばならぬ。

日本でも留岡幸助氏の家庭學校、浦和の高師氏の埼玉學園等はこれらの方針に則つて制定され、晝間は園藝農作手工等に意を用ひ、夜間に少時間智的教育を施すやうにしてゐる。かゝる學校では教師が隨意に郊外散歩に引率して行く事を許され、その間に自然物の實物教授を行ふ便宜を與へられてゐる。

補助學校の智的教育は通常小學校の半分程度まで進めば十分とすべきで、無論それ以上各個人の能力に應じて教育を進めてゆく事も必要ではあるが、一方各自の個人性に應じて、その長ずる方面を伸ばしてゆく時は、意外の收獲を得る事があるのである。併し過重の荷を負はせる事は心身に害を及ぼすからよく〳〵その能力を察知せねばならぬ。

主として智力の足らぬ白痴低能の處置法は先に述べた。その外なほ神經質のもの又は所謂性とも云ふべき感じの強い刺戟性の人、癲癇乃至ヒステリーの兒童は、これも一定の個所に收容して治療と教育とを兼ね施す設備として、林間、海邊に適好の地を卜し、野外に病院兼學校を設けるものが續々現れて來た。早發性痴症の治療期にあるもの、若くは慢性でごく輕症のもの等にも効果があるといはれてゐる。

德力の不足なもの卽ち不良少年等は、之を常人と區別して所謂感化院に送る事が自他兩方の爲に必要である。殊に魯鈍者といはれる位のもので德力の非常に缺けてゐるのは、是非とも特殊の教化法を行ふ必要がある。

就中有効なのは宗教を教化に應用する事である。病的兒童特に不良少年低能の類に倫理等の抽象的觀念は飲みこみにくいものであるから、具體的の神佛を對象として、その慈悲刑罰等を以て行爲を牽制するのが最も効果を擧げ得るのである。それには例へ無宗教無信仰の家庭でも、兩親自ら先して禮拜祈禱を規則的に行はねばならぬ。これは宗教的教化の外規則的訓練とも成る良習慣である。宗教を教化に利用する事は稀に弊害の伴ふ事も無くは無いが、それは多く

宗教そのものゝ罪ではなく、その方法の誤用にある事が多い。

補助學校卒業後の低能兒に就きよく之を保護し、社會上に過のない事を期する目的を以て、獨逸プロシヤのケーニヒスブルグの低能兒保護會は組織されてゐる。この會ではそれら低能者に農耕の手傳や、日傭取等、適當の職業を與へる一方、怠らずこれを監督して他の誘惑殊に酒や放埒に對して保護を加へ、これらより來る種々の惡疾の豫防をするとか、無精怠惰に流れるのを防ぐ方法をとる。又一時的の精神病の傾向を早期に察知して早く病院へ送り、又看護の勞を執る。又濫費他人との折合等に就ても監督して過なきを期するもので、とかく誤解を受けやすい不良少年に對する社會の同情を喚起せしめんが爲めに働くものである。

かゝる機關があるといふ事は、畢竟補助學校に於てこれら病的兒童を全癒せしめる事の困難を語るものの如きである。事實一時神病は別として、異常氣質特にヒステリー性癲癇性の慢性症性ので又病的悖德者の如きは、治療非常に困難で且つ一旦全治しても何らかの機會に又再發するものである。白痴痴愚等は教育の効で多少は向上するが、これとて普通の人間同樣になるべき筈は無い。殊に低能者の犯罪性を有するものは得て累犯の恐れがある。これらは教化が十分

でなく境遇が悪いために犯罪を重ね、その度に益ゝ性質不良に陥るもので、境遇の如何によつては犯罪を絶對に防止する事も出來得るのである。併し惡事に對する道德的觀念は概して稀薄であるから、單にこれを牢に入れる事のみによつて良心の苛責を受け犯罪を再びせぬ事を決心せしめうるかは疑問で、寧ろ何度牢へ入つても出ると又犯罪をして、結局牢へ入つたり出たりで一生を過すものも多いのである。これらもつまり內の低能と外の保護とが放置される爲めに出獄後の糊口に窮して再び犯罪に入るので、こゝに免囚保護事業の必要を認めるのである。と同時に低能者の保護を十分にして罪人の卵を孵化せぬ中に絕やすといふ事は國家的の重大事である。又低能者が兵役に就く時は、規則を亂り暴行を働き、或は惡疾を發するものがあるので、獨逸等では補助學校と徵兵官とが聯絡をとり、かゝる者を除外する規則になつてゐるのは尤もな事、然あらねばならぬ筈である。

實にこの病的兒童問題たるや單に醫學者教育家の机上の問題でなく、一身一家の盛衰に關し、廣くは民事刑事の法律、軍隊の風敎に至るまで、累を及ぼす所大なる國家的社會的の問題である。故に吾人は人生の爲め御互に全力を擧げてこれらの病的者の絕滅を期しなければならない。特にその出現を未然に防ぐ爲め、兒女の養育に精密なる注意を拂ひ、親よも遺傳の法則を服膺して身を愼む事をつとめねばならぬ。これ實に個人の些ゝたる事件でなく、國家水遠の大策である。

（完）

心理學と
兒童心理

定價金貳圓五拾錢

著者	多田不二
發行者	東京市京橋區南紺屋町十二番地 増田義一
印刷者	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 瀧澤一郎
印刷所	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍
發行所	東京市京橋區南紺屋町十二番地 實業之日本社 振替口座東京三二六番 電話番號青山二九〇一番

大正十三年四月廿二日印刷
大正十三年五月廿五日發行

不許複製

東京市社會教育課編　醫學博士　竹内薫兵氏解説

愛兒の躾けと育て

定價貳圓
郵税八錢
四六判上製

好評忽七版

本書は東京市が社會教育資料として、子供を良く躾けた實例、躾けを誤つた實例、健康に育てた實例、思はぬ病氣や怪我をさせた實例を廣く募集しました。集つた千餘の生きた實例は、何れも詐らず欺かざる尊き體驗の告白のみであつたのです。此の書はそれ等の内から、育兒上是非心得て置かねばならぬ百卅一篇を收めた世にも得難い資料です。

嫁入文庫

價各壹部壹圓五拾錢
郵税各壹錢入

四六判總布
裝幀頗優美

第一編　育兒の卷　四十三版　醫學博士　加藤照麿先生著
第二編　裁縫の卷　四十二版　喜多見さき子先生著
第三編　禮法の卷　三十五版　下田歌子先生著
第四編　料理の卷　卅七版　赤堀峯吉先生　赤堀菊子先生　共著
第五編　洗濯染色の卷　十九版　山下榮藏先生著
第六編　編物刺繍の卷　二十五版　吉田とく子先生　細川たけ子先生　共著
第七編　化粧の卷　十六版　水島幸子先生　古字田醫學士　共著
第八編　娯樂の卷　十三版　齋藤鹿山先生著
第九編　生花の卷　二十九版　齋藤鹿山先生著
第十編　女中使方の卷　十六版　加藤常子先生著
第十一編　家政の卷　卅四版　鳩山春子先生　鳩山薫子先生　共著
第十二編　婦人衛生の卷　二十版　醫學博士　相馬又三郎先生著

我が子の躾け方叢書

前東京高師教授・現横浜市視學
加藤末吉氏著

□第一篇　愛兒のしつけ方　十六版
□第二篇　兄弟喧嘩を少くする工夫　叱り方ほめ方　九版
□第三篇　家庭復習の方法　說論の仕方　八版
□第四篇　子供を順良にする工夫　お守りの仕方　七版
□第五篇　愛兒入學前の用意　入學後父兄の用意　五版
□第六篇　愛兒の學力を進むる工夫　四版
□第七篇　惡兒の惡癖矯正　四版

定價　郵稅　各冊　各冊　一八　圓錢　五總　十布　錢裝　四釘　六雅　判美

□子供を賢くする爲めに　新刊　醫學博士　三田谷啓氏著　定價二圓　郵稅八錢
□子供本位の家庭　九版　早大教授　安部磯雄氏著　定價一圓二十錢　郵稅八錢
□胎教　四十九版　文學博士　下田次郎氏著　定價一圓三十錢　郵稅六錢
□安産の栞　十五版　醫學士　伊庭秀榮氏著　定價一圓二十錢　郵稅十錢
□花の生け方　四版　子爵　松平宗圓氏著　定價二圓　郵稅十錢
□毛絲あみもの　十五版　石本靜枝子著　定價一圓八十錢　郵稅八錢
□新趣味の袋物拵へ方　三版　中村興湖氏著　定價三圓五十錢　郵稅十六錢

□文明の中樞　三版　サンガー女史著　石本靜枝子譯　定價二圓　郵稅十錢

□小說集　早稻田文藝大觀　三版　片上伸氏他編　定價二圓　郵稅八錢

□戲曲　長生新浦島　四版　文學博士　坪內逍遙氏著　定價二圓二十錢　郵稅八錢

□社會と自分　冊一版　夏目漱石氏著　定價一圓五十錢　郵稅六錢

□藝術と家庭と社會　三版　文學博士　坪內逍遙氏著　定價二圓　郵稅十錢

□虐げられた笑　四版　生方敏郎氏著　定價二圓二十錢　郵稅十錢

□余の漫畫帖から　十版　帝大教授　伊東忠太氏著　定價二圓　郵稅八錢

□縮刷版　修養　百二版　法學博士　新渡戸稻造氏著　定價一圓五十錢　郵稅六錢

□世渡りの道　六十五版　同　新渡戸稻造氏著　定價一圓五十錢　郵稅六錢

□一日一言　七十五版　同　新渡戸稻造氏著　定價一圓二十錢　郵稅四錢

□生活戰術　二十一版　法學博士　浮田和民氏著　定價一圓五十錢　郵稅六錢

□立身の基礎　十八版　實業之日本社長　增田義一著　定價二圓二十錢　郵稅十二錢

□青年と修養　五十四版　同　增田義一著　定價一圓五十錢　郵稅六錢

□思想善導の基準　十八版　同　增田義一著　定價一圓五十錢　郵稅八錢

□新しい言葉の字引　九十一版　服部嘉香氏 植原路郎氏共著　定價一圓二十錢 郵稅六錢

□新しい主義學說の字引　拾一版　勝屋英造氏著　定價三圓 郵稅八錢

□新しい商業經濟の字引　九版　河瀨蘇北氏著　定價一圓七十錢 郵稅六錢

□新しい世界常識の字引　新刊　河瀨蘇北氏著　定價二圓 郵稅六錢

□經濟記事の讀み方　九十八版　細貝正邦氏著　定價一圓二十錢 郵稅六錢

□割九々いらずの珠算　八版　星伊策氏著　定價一圓五十錢 郵稅八錢

□新案速達英語會話カード（スポークンイングリシ）　新刊　牧野孫太郎 中村八郎氏共著（ドクトル オブ ザ ユニヴァーシティ）　定價九十錢 郵稅四錢

527
19..

終